



鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (212)

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (212)

主要地方道石垣加世田線道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

しも もも き わた せ
下桃木渡瀬遺跡

(南九州市川辺町)

下桃木渡瀬遺跡

二〇二三年三月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

2022年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター



遺跡遠景（遺跡を南東上空から）

序 文

この報告書は、主要地方道石垣加世田線道路改築事業に伴って令和2年度に実施した、南九州市川辺町に所在する下桃木渡瀬遺跡の発掘調査の記録です。

下桃木渡瀬遺跡では、旧石器時代や縄文時代早期、縄文時代後期、縄文時代晚期、弥生時代、古墳時代の遺構・遺物が発見されました。

旧石器時代では、礫群6基を検出し、それに伴うと考えられる角錐状石器や磨石等の石器が出土しました。

縄文時代早期では、掘り込みをもつ集石2基を検出しました。遺物は、早期前葉や中葉の土器や、磨石や有溝砥石が出土しました。

古墳時代では、竪穴建物跡1基や、建物跡内から成川式土器が出土しました。

なかでも、旧石器時代の礫群や縄文時代早期の集石は、当時の人々の生活や土地利用の実態を知る、有効な情報になりました。また、旧石器時代・縄文時代早期の石器は、当時の人々の石器の使用法を解明する手がかりとなる貴重な資料です。

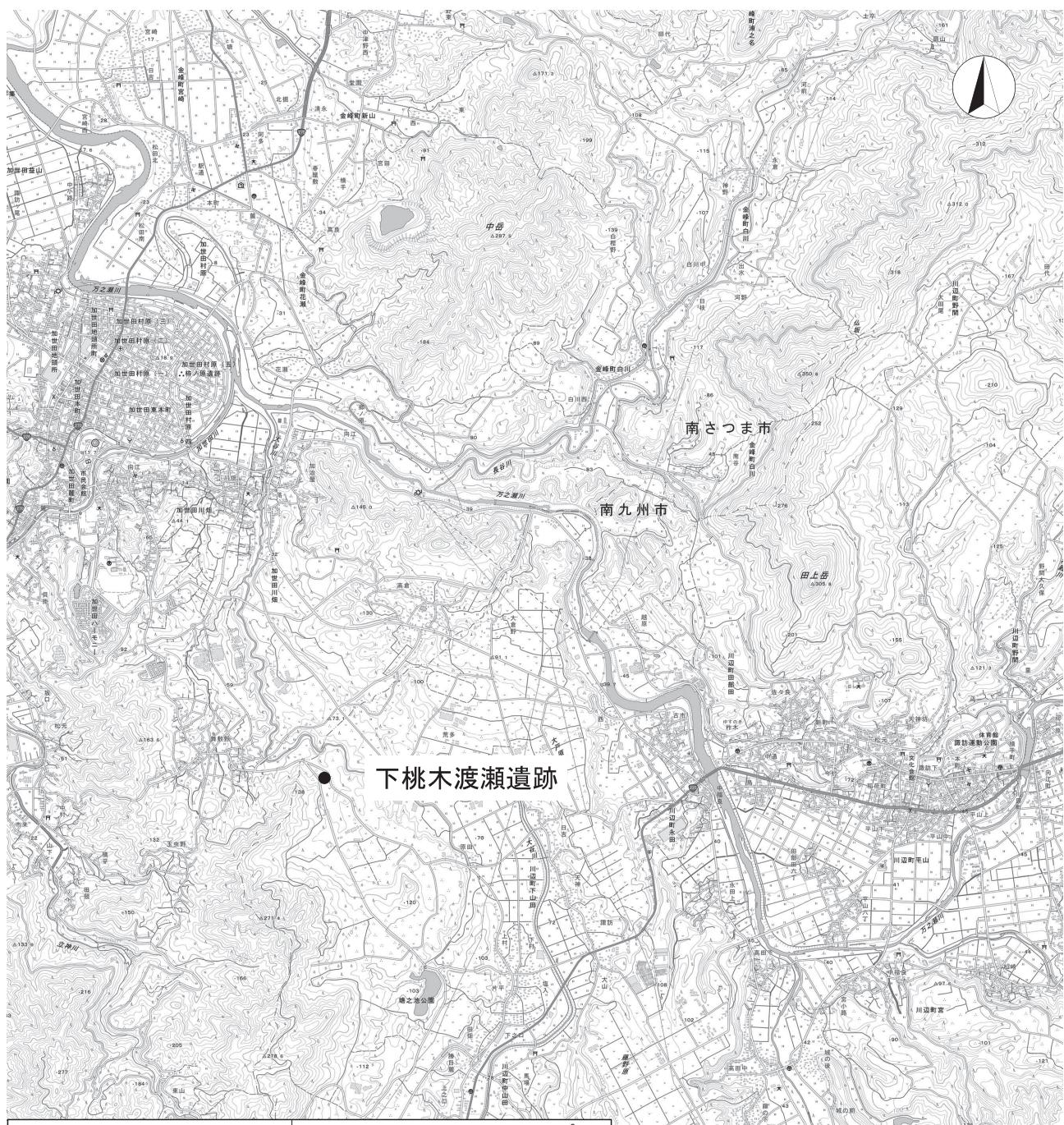
本報告書が県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心と御理解をいただくとともに、文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後に、調査に当たり御協力いただいた県土木部道路建設課、県教育庁文化財課、南九州市教育委員会、発掘調査・整理作業に従事された地域の方々、本遺跡が所在する南九州市川辺町の皆様、その他関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

令和4年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長 中原一成

報 告 書 抄 錄



遺跡位置図

例

- 1 本書は、主要地方道石垣加世田線道路改築事業に伴う下桃木渡瀬遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は南九州市川辺町下山田に所在する。
- 3 発掘調査は鹿児島県土木部道路建設課の依頼を受け、鹿児島県立埋蔵文化財センターが担当した。
- 4 発掘調査は令和2年度に実施し、整理・報告書作成作業は令和3年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターで実施した。
- 5 掲載遺物番号は通し番号とし、本文、挿図、表、図版の番号は一致する。掲載した遺構番号は、遺構の種類ごとに付し、本文、挿図、表、図版の遺構番号と一致する。
- 6 遺物注記等で用いた記号は、「SMK」である。
- 7 (挿図の)縮尺は、挿図ごとに示した。
- 8 本書で用いたレベル数値は海拔絶対高である。
- 9 本書で使用した方位はすべて磁北である。
- 10 発掘調査における実測図作成及び写真撮影は、調査担当者が行った。
- 11 空中写真の撮影は、有限会社スカイサーベイ九州に委託した。
- 12 遺構の埋土や土器の色調、土層断面の土色は『新版

凡

- 1 各遺構の略記号及び縮尺は原則以下に示すとおりである。各遺構図にスケールを示してある。

遺構名	縮尺
堅穴建物跡	1／30
集石	1／20
礫群	1／20

- 2 掲載遺物の縮尺は、原則以下に示すとおりである。

遺物名	縮尺
土器	1／2
角錐状石器	1／1
削器	1／1
磨石・凹石	1／2
台石・石皿	1／3
礫	1／2

- 3 観察表の表記凡例は次のとおりである。

- (1) 土器の法量において、括弧で示したものは復元径の値である。石器の計測値において、括弧で示したものは欠損した計測値である。

言

- 標準土色帖』(1970年度版、農林水産省農林水産技術会議事務局監修)に基づく。
- 13 遺構図等の作成・ト雷斯は、上浦と湯場崎が整理作業員の協力を得て行った。
 - 14 出土遺物の実測・拓本・トレスは、上浦が整理作業員の協力を得て行った。なお、遺物実測の一部は株式会社大福コンサルタントに委託した。
 - 15 出土遺物の写真撮影は、鹿児島県立埋蔵文化財センターの写場にて、西園勝彦が行った。
 - 16 本書における自然科学分析は、放射性炭素年代と炭素・窒素安定同位体分析を株式会社古環境研究センターに委託した。
 - 17 本書の編集は、上浦と湯場崎が担当し、執筆の分担は次のとおりである。
第1～3章 湯場崎
第4章 上浦・三垣
第5章 株式会社古環境研究センター
第6章 上浦・三垣
 - 18 本報告書に係る出土遺物及び実測図・写真等の記録は鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、展示・活用を図る予定である。

例

- 4 本書で用いた石材の分類は以下の表のとおりである。

類	群	特徴
黒曜石 I類[OB 1]		不純物を多く含み、漆黒で全く光を通さないもの。
		不純を多く含み、光を通すもの。
黒曜石 II類[OB 2]	A群	不純物が不均一に入り、径0.5mm～1mm程度の石英質の不純物を含むもの。基質はアメ色を呈するものが多いが、まれにオリーブ灰色～黒色を呈する。
	B群	不純物がやや均一で、基質は黒色～アメ色を呈するもの。
玉髓 I類 [CC 1]		基調が比較的珪質分に富み、白色系の色調を基調とするもの。
玉髓 II類 [CC 2]		基調が比較的珪質分に富み、赤色系の色調を基調とするもの。
頁岩 I類 [SH 1]		珪質分が非常に富む頁岩。油脂光沢のあるもの。
頁岩 II類 [SH 2]		珪質分にやや富むが、油脂光沢があまり無いもの。
ホルンフェルス II [HF 2]		やや節理が発達するか、粒子が粗いものの。頁岩～砂岩質のもの。
砂岩 [SA]		やや粗粒。二次的に被熱し、赤化したものも含まれる。
安山岩 A [AN A]		角閃石や輝石などを含む多孔質のもの。灰色～明褐色を呈する。
安山岩 B [AN B]		灰色～黒色を呈する緻密で良質なもの。

本文目次

序文

報告書抄録

例言・凡例

第1章 発掘調査の経過

第1節 調査に至るまでの経緯..... 1

第2節 本調査..... 1

第3節 整理・報告書作成..... 1

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境..... 2

第2節 歴史的環境..... 2

第3章 調査の方法と層序

第1節 調査の方法..... 6

第2節 層序..... 6

第4章 調査の成果

第1節 旧石器時代の調査..... 11

第2節 縄文時代早期の調査..... 30

第3節 縄文時代後期・晩期の調査..... 40

第4節 弥生時代の調査..... 44

第5節 古墳時代の調査..... 46

第5章 自然科学分析..... 53

第6章 総括

第1節 旧石器時代の調査..... 55

第2節 縄文時代早期の調査..... 55

第3節 縄文時代後期・晩期の調査..... 56

第4節 弥生時代の調査..... 56

第5節 古墳時代の調査..... 56

第6節 おわりに..... 56

写真図版..... 57

挿図目次

第 1 図 周辺遺跡位置図	4	第 27 図 1号集石及び礫接合図	31
第 2 図 下桃木渡瀬遺跡グリッド配置図	7	第 28 図 2号集石	32
第 3 図 D-10 区 VII層～XIV層 土層断面	8	第 29 図 縄文時代早期 包含層礫出土状況図	33
第 4 図 D-10 区 VII層～XIV層 土層断面図	8	第 30 図 縄文時代早期 遺物出土状況図	34
第 5 図 土層断面図(1)	9	第 31 図 縄文時代早期 遺物接合図	35
第 6 図 土層断面図(2)	10	第 32 図 縄文時代早期 出土土器(1)	36
第 7 図 旧石器時代遺構配置図	12	第 33 図 縄文時代早期 出土土器(2)	37
第 8 図 1号礫群及び礫接合図	13	第 34 図 縄文時代早期 出土石器(1)	38
第 9 図 2号礫群及び礫接合図	14	第 35 図 縄文時代早期 出土石器(2)	39
第 10 図 3号礫群	15	第 36 図 縄文時代早期 出土石器(3)	40
第 11 図 3号礫群内 出土石器	15	第 37 図 縄文時代後期 出土土器	41
第 12 図 4号礫群	16	第 38 図 縄文時代後期 出土土器(1)	41
第 13 図 4号礫群内 出土石器	16	第 39 図 縄文時代後期 出土土器(2)	42
第 14 図 5号礫群	17	第 40 図 縄文時代後期・晚期 遺物出土状況図	43
第 15 図 4号礫群・5号礫群礫接合図	18	第 41 図 弥生時代 出土土器	44
第 16 図 矽接合図	19	第 42 図 弥生・古墳時代 遺物出土状況図	45
第 17 図 4号礫群・5号礫群内出土矽	20	第 43 図 墓穴建物跡	46
第 18 図 6号礫群及び矽接合図	21	第 44 図 墓穴建物跡内 出土土器接合図	47
第 19 図 旧石器時代包含層礫出土状況図	22	第 45 図 墓穴建物跡内 出土土器(1)	48
第 20 図 旧石器時代遺物出土状況図	24	第 46 図 墓穴建物跡内 出土土器(2)	49
第 21 図 旧石器時代 出土石器(1)	25	第 47 図 古墳時代 出土土器(1)	49
第 22 図 旧石器時代 出土石器(2)	26	第 48 図 古墳時代 出土土器(2)	50
第 23 図 旧石器時代 出土石器(3)	27	第 49 図 古墳時代 出土土器(3)	51
第 24 図 旧石器時代 出土石器(4)	28	第 50 図 古墳時代 出土土器(4)	52
第 25 図 旧石器時代 出土石器(5)	29	第 51 図 暗年較正結果	54
第 26 図 縄文時代早期 遺構配置図	30	第 52 図 試料写真	54

表目次

第 1 表 周辺遺跡一覧表	5	第 7 表 縄文時代早期 出土石器観察表	38
第 2 表 下桃木渡瀬遺跡基本層序	8	第 8 表 縄文時代後期・晚期 出土土器観察表	42
第 3 表 旧石器時代 矽群内出土石器観察表	27	第 9 表 弥生時代 出土土器観察表	44
第 4 表 旧石器時代 出土石器観察表(1)	27	第 10 表 墓穴建物跡内 出土土器観察表	49
第 5 表 旧石器時代 出土石器観察表(2)	29	第 11 表 古墳時代 出土土器観察表	52
第 6 表 縄文時代早期 出土土器観察表	37	第 12 表 出土試料の放射性炭素年代測定結果	54

図版目次

図版 1 基本土層・旧石器時代 1	57	図版 8 旧石器時代 遺物 2	64
図版 2 旧石器時代 2	58	図版 9 縄文時代早期 遺物 1	65
図版 3 旧石器時代 3	59	図版 10 縄文時代早期 遺物 2	66
図版 4 旧石器時代 4	60	図版 11 縄文時代後期・晚期 遺物	67
図版 5 縄文時代早期	61	図版 12 弥生時代 遺物・古墳時代 遺物 1	68
図版 6 古墳時代	62	図版 13 古墳時代 遺物 2	69
図版 7 旧石器時代 遺物 1	63		

第1章 発掘調査の経過

第1節 調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会は文化財の保護・活用を図るために、各開発関係機関との間で、事業区域内における文化財の有無及びその取扱いについて協議し、諸開発との調整を図っている。

この事前協議制に基づき、鹿児島県土木部道路建設課（以下、道路建設課）は主要地方道石垣加世田線（下山田工区）道路改築事業に先立って、事業対象内における埋蔵文化財の有無について、鹿児島県教育庁文化財課（以下、県文化財課）に照会した。

これを受け、県文化財課が平成28年度に事業予定地内の分布調査を実施したところ、事業区域内に、下桃木渡瀬遺跡の所在が判明した。分布調査の結果を受けて、道路建設課、県文化財課、鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）の三者で協議した結果、対象地域内の遺跡の範囲と性格を把握するために当該地域において試掘調査を実施することとした。

試掘調査は、県文化財課が埋文センターの協力を得て、平成31年3月14日に実施した。その結果を踏まえ、遺跡の取り扱いについて県文化財課、道路建設課、埋文センターの三者で協議した結果、遺跡の現地保存は困難であることから、埋文センターが令和2年度に本調査を実施することとした。

第2節 本調査

試掘調査は、対象地域内に4か所にトレンチを設定し調査を実施した。その結果、3か所から被熱破碎礫が確認され、旧石器時代から縄文時代早期の遺構や遺物が本事業対象範囲全体に広がることが想定された。

試掘調査の結果を踏まえ、本調査が必要となったため表面積440m²の本調査を行った。職員2名、発掘作業員20名体制で、令和2年12月1日から令和3年1月27日までの期間実施した。調査体制および調査経過の詳細については、以下のとおりである。

（1）調査体制

事業主体 鹿児島県土木部道路建設課

調査主体 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課

調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター

所長 前迫 亮一

調査企画 次長 兼 総務課長 野間口 誠

課長兼南の縄文調査室長 中村 和美

主任文化財主事兼第一調査係長 三垣 恵一

調査担当 文化財主事 上浦 麻矢

文化材主事 馬籠 亮道

事務担当 主幹 兼 総務係長 山下 勝史

（2）調査経過

11月

事前準備

12月

D・E-5～13区 V層・VII層・VIII層調査

1月

D・E-5～13区 X層・XI層調査

発掘調査終了。

第3節 整理・報告書作成

本報告書刊行に伴う整理・報告書作成作業は、令和3年度に埋文センターで行った。

整理・報告書作成作業に関する調査体制及び作業経過は、以下のとおりである。

1 整理作業

（1）作成体制

事業主体 鹿児島県土木部道路建設課

調査主体 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課

調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター

所長 中原 一成

調査企画 次長兼総務課長 大口 広嗣

調査課長 寺原 徹

主任文化財主事兼第一調査係長 三垣 恵一

調査担当 文化財主事 上浦 麻矢

文化財主事 湯場崎辰巳

事務担当 主幹 兼 総務係長 山下 勝史

報告書作成指導委員会 令和3年11月24日ほか4回

寺原 徹調査課長ほか6名

報告書作成検討委員会 令和3年11月29日ほか4回

中原一成所長ほか6名

（2）整理作業の経過

4月 遺物水洗い、土器接合、石器実測委託

5月 石器及び土器実測、自然科学分析委託

6月 旧石器時代石器接合、礫接合、土器トレース

7月 旧石器時代石器接合、礫接合

8月 入力作業、レイアウト

9月 レイアウト、原稿執筆

10月 図面整理、原稿執筆

11月 図面整理、原稿執筆

12月 遺物整理、報告書印刷製本入札

1月 校正

2月 遺物整理、収納、校正

3月 報告書納品

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

下桃木渡瀬遺跡は、鹿児島県南九州市川辺町大字下山田字下桃木渡瀬に所在する。

南九州市は、薩摩半島の南部に位置し、人口約1万6千人（令和2年7月現在）を有している。県庁所在地である鹿児島市に隣接し、南は広大な東シナ海を臨み、東は指宿市、西は枕崎市・南さつま市に隣接している。平成19年12月に、旧揖宿郡頴娃町、旧川辺郡知覧町及び川辺町が合併し、南九州市が誕生した。市の基幹産業は畜産業や農業で、中でも「茶」は栽培面積・生産量ともに日本有数の産地である。伝統地場産業もあり、特に川辺仏壇は国の伝統的工芸品の指定を受けるなど、全国でも有数の高い技術と伝統を誇っている。

川辺地方の地形の特徴としては、四方を400~500m級の山々に囲まれる盆地状の地形を呈し、東側にある南北へ連なる山並みから西側へ緩やかに下降傾斜しながら吹上浜へと続く地形をなしている。また、南薩地方の代表的な二級河川である万之瀬川は、川辺町北部で清水川、野崎川と合流し、さらに神殿川、小野川（麓川）、高田川（永里川）などをあわせて、この盆地の中央を流れ、田代で山を貫いて、吹上浜へ向かって西流し、東シナ海へ注ぎ込んでいる。

また地質的には、薩摩半島全域の基盤をなす「川辺層群」といわれる四万十層（白亜紀層）が広く発達し、砂岩や頁岩および砂岩・頁岩互層などを主とし、一部に礫岩や蛇紋岩を挟む地層がみられる。川辺層群の上位に薩摩半島南部、特に旧笠沙町から知覧町南部・頴娃町・指宿市にかけて、「南薩層群」といわれる新第三紀中新世後期に属する地層が発達し、この地域では主に、石英安山岩溶岩・輝石安山岩および凝灰岩・凝灰岩質シルト岩・泥岩などの水成堆積層が広くみられる。また、角閃石安山岩溶岩は点在的に分布し、粗粒の角閃石の斑晶がみられ、川辺町小野では、安山岩の崖中から角閃石の結晶がみつけられている。この「南薩層群」の上部には、溶結凝灰岩からなる阿多火碎流が台地を形成し、この溶結凝灰岩の崖に刻まれたのが「清水摩崖仏」である。その上層には約29,000年前のシラスと呼ばれる始良カルデラの噴出物が厚く堆積し、万之瀬川の本支流により開析されて、現在のような地形となっている。シラスの上には約7,300年前の鬼界カルデラの噴出物であるアカホヤ火山灰や、開聞岳噴出物のコラなどが堆積している。

調査対象地である下桃木渡瀬遺跡は、万之瀬川に流れ込む大谷川左岸の河岸段丘面に位置し、標高約70mである。

第2節 歴史的環境

南九州市の先史時代及び古代の遺跡は町内全域に分布し、約505か所（令和3年4月）の埋蔵文化財包蔵地が所在している。中でも万之瀬川流域や川を眺望できる台地上には密に分布している。ここでは、旧川辺町を中心に、周辺の市町村も含め、主な遺跡を時代別に概観していく。

1 旧石器時代

町内最古の遺跡は、後期旧石器時代のナイフ形石器や台形石器、剥片尖頭器等を出土する津フジ遺跡、背野平遺跡、上桑持野遺跡、荻久保遺跡等があり、背野平遺跡ではAT層上位から7基の礫群が発見され、約24,000年前の生活痕跡を知ることができる。後続する時期の遺跡として、宮ノ上遺跡があり、石材原産地の近傍に位置し、原産地遺跡的な性格をもつ遺跡である。石器では、角錐状石器群及び小型ナイフ形石器群を主体に、約3万5千点以上の遺物が出土した。また、総数770個体を越える豊富な接合資料が得られたことが注目され、これらの接合資料の分析により、石器製作技術やブロック形成過程を具体的に検討可能なことが重要である。細石器文化期も宮ノ上遺跡や背野平遺跡、上桑持野遺跡などで確認されている。周辺では、枕崎市の奥木場遺跡で、ナイフ形石器、角錐状石器、細石刃期の石器が発見されており、石材の原産地近くの遺跡として注目されている。

2 繩文時代

縄文時代になると遺跡数も飛躍的に増加し、具体的活動の痕跡を多くの遺跡で見ることが可能となってくる。草創期

旧川辺町の縄文時代で最も古い遺跡は、縄文時代草創期の鷹爪野遺跡で、隆帶文土器と共に舟形状配石炉が発見されている。隣接する南さつま市では、多くの草創期の遺跡が発見されている。椿ノ原遺跡（南さつま市）は、連穴土坑（煙道付き炉穴）や集石などの各種の遺構とともに多くの隆帶文土器や石器が発見されている。中でも、「椿ノ原型石斧」と呼称される丸ノミ形石斧は、刃部の形状から木材加工に利用されたと考えられており、縄文時代草創期における南九州の先進性を示す遺跡として、平成9年に国指定史跡に指定され、遺跡の一部は保存されている。志風頭遺跡（加世田）でも連穴土坑とともに隆帶文土器や石鏃・石皿などが発見されている。

早期

鷹爪野遺跡では、早期前葉の竪穴建物跡8軒や集石3基が発見されている。また、前平式土器と頁岩製の磨製石槍や磨製石鏃など3,200点あまりの遺物が出土してい

る。小崎遺跡では南下した押型文土器に伴って食糧残滓の貝殻や獸骨が発見されている。寺山遺跡では、早期中葉の手向山式土器、荒多遺跡・上桑持野遺跡・鳴野原B遺跡等では塞ノ神式土器が主体で遺跡を構成している。

前期

廻り淵遺跡や南田代に所在する遺跡などでは縄文時代前期に属する遺物が多量に出土している。南田代遺跡では、集石、石斧埋納、磨石集積などの遺構とともに、轟式土器や曾畠式土器が出土している。

中期

南田代遺跡では、集石や深浦式土器・阿高式土器、春日式土器、船元式土器が発見されており、縄文時代前期から中期にかけての時代と共に遺跡の立地が変化していく様相を見ることができる。

後期・晚期

田中堀遺跡からは、指宿式土器や市来式土器が多数出土し、貯蔵穴と見られる土坑も発見されている。また、答石遺跡では、指宿式土器や松山式土器、西平式土器、晩期の黒川式土器の存在が報告されており、縄文時代のほぼ全ての遺跡が存在することが分かる。

3 弥生時代

弥生時代の遺跡に関しては、万之瀬川や神殿川等の河川流域や流域に直結する台地から発見される傾向が見られる。

弥生中期になると、大型スーパーが進出した寺山遺跡で大規模なV字溝が2本平行して構築され、万之瀬川を見下ろす台地に環濠集落が存在した可能性が高くなっている。出土品からは、丹塗り土器等の北九州系土器も含まれ、広範な交流の痕跡が読み取れる。

隣接する南さつま市では、学史に残る遺跡が数多くある。高橋貝塚（金峰町）は、弥生時代前期を主体とする貝塚で、万之瀬川の支流、堀川右岸の標高11mの洪積世砂丘上にある。調査の結果、縄文時代晩期の夜白式土器と高橋I式土器の共伴関係が確認されたことや、南海産のゴホウラを素材とした貝輪や南海産貝が出土している。下小路遺跡（金峰町）は、弥生時代中期の須玖式土器を用いた甕棺が検出された埋葬遺跡で、棺内の人骨にはゴホウラ製の貝輪が着装されている。松木蘭遺跡（金峰町）では弥生時代後期の環濠の可能性のあるV字形の大溝が松木蘭式土器を伴って発見されている。

4 古墳時代

弥生後期から古墳時代前期の集落構造や葬制の様相は、堂園A遺跡と堂園B遺跡で明らかになり、集落は堂園B遺跡で、当時の墓は堂園A遺跡で具体的に見ることができる。さらに堂園B遺跡の竪穴建物跡の中には、鍛冶工房と指摘される特殊な建物跡もある。答石遺跡では、竪穴建物跡7軒やV字形の溝状遺構が発見され、隣接する塘池上遺跡及び塘之池周辺にも集落が広が

る可能性が指摘されている。

5 古代・中世

『倭名類聚抄』によると、古代には「加波乃部」と訓じられ河辺郡に属し、稻積・川上の二郷があったとされる。旧川辺町は、河辺郡川上郷と阿多郡嘉例郷に属していたとされる。平安時代末期から鎌倉時代中期にかけ、河辺郡は府領社と公領からなる。地頭は島津忠久が、府領社下司と公領郡司には河辺氏の子孫河辺道綱の名が伝えられる。その後、島津忠良の三州統一化により川辺も直轄地として組み込まれることとなり、平山城・松尾城・山石城等の乱立する詰城がその緊張した時代背景を伝えている。

発掘調査では、山下遺跡で平安時代の中岳窯群産の須恵器壺・甕をはじめ、土師器や青磁などが出土している。馬場田遺跡の発掘調査では、幅3.4m・深さ1.2mの堀が検出されている。居館跡と考えられ、掘立柱建物跡とともに、東南アジアや朝鮮の陶器をはじめ龍泉窯系鎧連弁の青磁・青白磁、白磁など威信材としての貿易陶磁器の希少遺物が多く出土している。

鹿児島県の史跡に指定されている「清水磨崖仏群」は、清水川の右岸の溶結凝灰岩崖に刻まれている。凝灰岩崖は高さ20mに達し、総延長400m間に192体の梵字・五輪塔・宝篋印塔が確認され、その造営は平安時代から明治時代の長い間連綿と行われたとされる。

【引用・参考文献】

鹿児島県立埋蔵文化財センター

2005「南田代遺跡」埋蔵文化財発掘調査報告書（88）

2007「堂園遺跡A地点・古殿諏訪陣跡・折戸平遺跡・山神迫遺跡」埋蔵文化財発掘調査報告書（108）

2008「堂園遺跡B地点・堂園遺跡A地点」埋蔵文化財発掘調査報告書（123）

2010「宮ノ上遺跡」埋蔵文化財発掘調査報告書（146）
川辺町教育委員会

2004「寺山遺跡」埋蔵文化財発掘調査報告書（13）

2007「背野平遺跡」埋蔵文化財発掘調査報告書（9）

2007「荒多遺跡・上桑持野遺跡」埋蔵文化財発掘調査報告書（10）

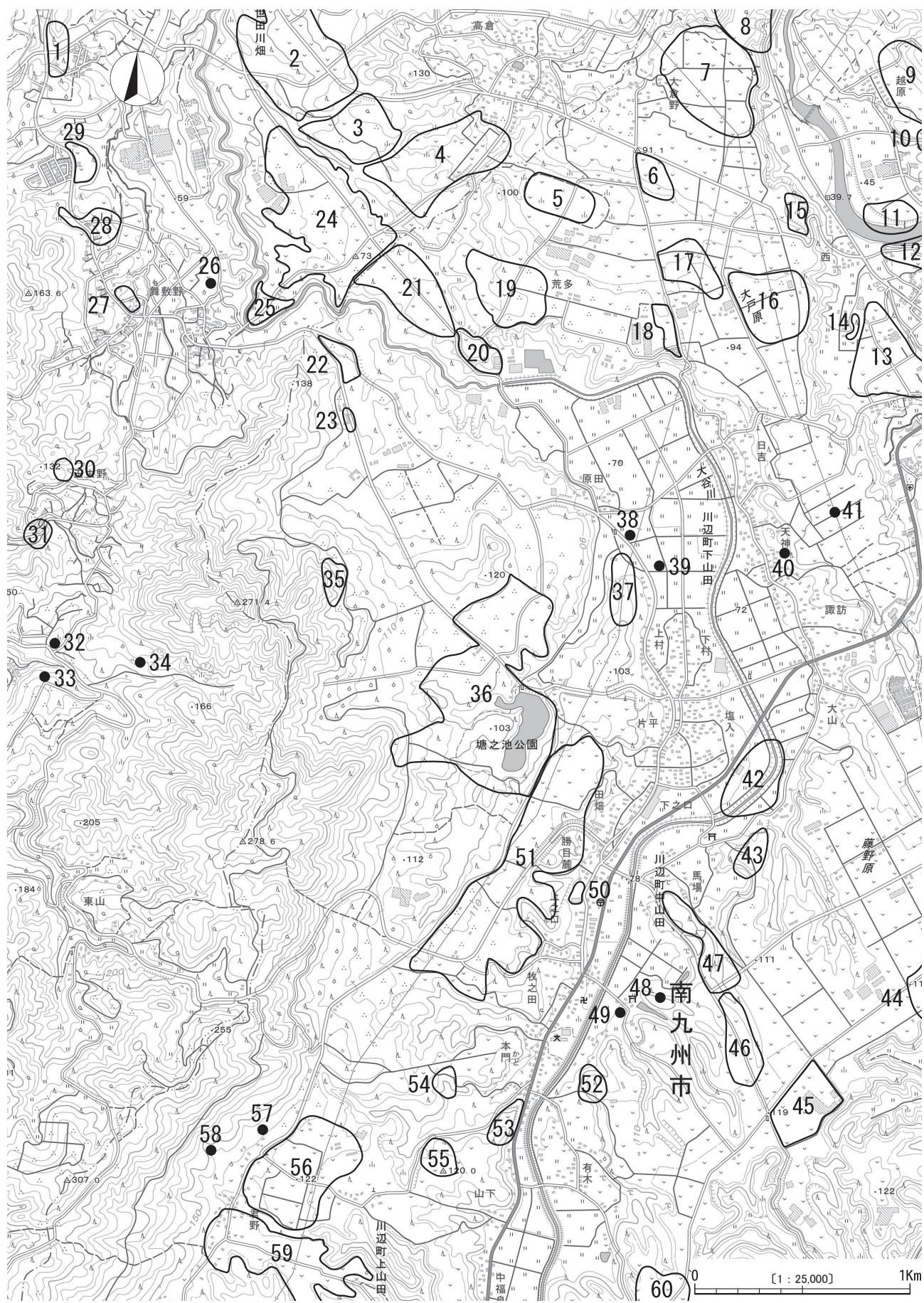
2007「津フジ遺跡」埋蔵文化財発掘調査報告書（11）

南九州市教育委員会

2008「答石遺跡」埋蔵文化財発掘調査報告書（1）

寺山遺跡・民間調査会

2006「寺山遺跡」



第1図 周辺遺跡位置図

第1表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	遺跡台帳番号	所在地	地形	旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世	備考
1	遠見ヶ丘	220 1	南さつま市加世田川畠	丘陵		●	●					
2	松阪原	220 76	南さつま市加世田川畠	台地	●	●	●	●				
3	入道ヶ野	220 75	南さつま市加世田川畠	台地		●	●	●				
4	深田ノ迫	220 74	南さつま市加世田川畠	台地		●	●					
5	水ヶ元	223 376	南九州市川辺町下山田	台地			●	●				川辺町埋蔵文化財発掘調査報告書(4)
6	西之平	223 377	南九州市川辺町下山田	台地					●			
7	津フジ	223 383	南九州市川辺町下山田	台地	●	●		●				川辺町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)
8	兎ヶ城跡	223 385	南九州市川辺町下山田	台地				●		●		
9	田部田	223 290	南九州市川辺町田部田越ヶ原	丘陵			●					
10	黒木山	223 357	南九州市川辺町田部田	平地			●					
11	南田代	223 359	南九州市川辺町田部田	台地		●	●	●	●			鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(88)
12	古市	223 366	南九州市川辺町永田	平地			●	●		●		鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(89)
13	南中野	223 362	南九州市川辺町永田	台地		●	●	●				
14	中野迫	223 361	南九州市川辺町永田西	台地		●						
15	永田西	223 360	南九州市川辺町永田西	台地		●						
16	矢倉ヶ迫	223 384	南九州市川辺町下山田	台地		●						川辺町埋蔵文化財発掘調査報告書(7)
17	供養塚	223 378	南九州市川辺町下山田	台地		●	●	●	●	●		川辺町埋蔵文化財発掘調査報告書(5)
18	西供養塚	223 402	南九州市川辺町下山田	台地				●				
19	荒多	223 279	南九州市川辺町下山田	台地			●					川辺町埋蔵文化財発掘調査報告書(10)
20	上桑持野	223 287	南九州市川辺町下山田	台地	●		●					川辺町埋蔵文化財発掘調査報告書(10)
21	荒田迫	223 278	南九州市川辺町下山田	台地			●					
22	桃木渡瀬	223 504	南九州市川辺町下山田	河岸段丘	●	●	●	●				本報告書
23	勝目	223 368	南九州市川辺町中山田	台地				●				
24	上長迫	220 80	南さつま市加世田川畠	台地			●		●			
25	平渡瀬	220 8	南さつま市加世田川畠	台地	●	●	●	●				
26	神山	220 9	南さつま市加世田川畠	台地			●					
27	舞敷野	220 103	南さつま市加世田川畠	台地				●				
28	湯開原	220 26	南さつま市加世田川畠	丘陵	●	●	●	●	●	●	●	
29	みかきの	220 27	南さつま市加世田川畠	丘陵			●					
30	玉虫野	220 34	南さつま市加世田内山田	台地								
31	土城跡	220 32	南さつま市加世田内山田	平地						●		
32	滝ノ上	220 6	南さつま市加世田内山田	丘陵		●	●					
33	田之野	220 7	南さつま市加世田内山田	山地			●					
34	大谷	220 25	南さつま市加世田内山田	丘陵			●					
35	狸平	223 369	南九州市川辺町中山田			●						
36	答石	223 280	南九州市川辺町下山田	丘陵		●	●	●				南九州市埋蔵文化財発掘調査報告書(1)
37	堂山	223 367	南九州市川辺町下山田	台地			●					
38	原田前	223 419	南九州市川辺町下山田				●					
39	庄屋屋敷	223 420	南九州市川辺町下山田	平地			●					
40	大野忠宗夫人墓	223 343	南九州市川辺町下山田	平地								
41	八幡堀	223 379	南九州市川辺町下山田	台地			●	●				
42	土器園	223 371	南九州市川辺町中山田	湿地		●	●	●		●		川辺町埋蔵文化財発掘調査報告書(8)
43	下ノ口	223 370	南九州市川辺町中山田	台地			●					
44	長堀	223 399	南九州市川辺町高田・長堀ほか	台地		●	●	●				
45	一里山	223 432	南九州市川辺町中山田	台地			●					
46	一里塚	223 423	南九州市川辺町勝目					●				
47	勝目城跡	223 342	南九州市川辺町中山田馬場	台地					●			市指定文化財(史跡)
48	宝正寺跡	223 332	南九州市川辺町中山田万山丘	平地								
49	光明寺跡	223 331	南九州市川辺町中山田	平地								
50	山田郷地頭仮谷跡	223 430	南九州市川辺町									
51	塘池上	223 288	南九州市川辺町下山田	台地		●	●	●				川辺町埋蔵文化財発掘調査報告書(12)
52	有木堀之内城跡	223 300	南九州市川辺町上山田	台地						●		
53	上山田陣之尾城跡	223 299	南九州市川辺町上山田城戸坂	台地						●		
54	焼山	223 372	南九州市川辺町上山田	台地		●						
55	田中堀	223 281	南九州市川辺町上山田	台地			●					『鹿大史学』第31号鹿大史学会 『川辺町郷土史追録』川辺町
56	榎木馬場	223 412	南九州市川辺町上山田	台地		●	●	●				
57	長嶋寺跡	223 333	南九州市川辺町上山田桜ヶ迫	台地								
58	権現洞穴	223 335	南九州市川辺町上山田君野	山地								県指定文化財(天然記念物)
59	背野平	223 411	南九州市川辺町上山田	台地	●	●						川辺町埋蔵文化財発掘調査報告書(9)
60	龟之甲上	223 282	南九州市川辺町上山田	台地		●						

第3章 調査の方法と層序

第1節 調査の方法

本節では、発掘調査の方法、遺構の認定と検出方法、整理作業・報告書作成作業の方法について記載する。

1 発掘調査の方法

下桃木渡瀬遺跡の調査は、平成30年度に試掘調査、令和2年度に本調査を実施した。調査対象表面積約440m²である。

本遺跡の調査区割り（グリット）は、本調査において、工事用基準杭（センター杭）No.27とNo.31を結ぶ直線を基に、西側から東側に向かってA, B, C…、南側から北側に向かって1, 2, 3…とする10×10mの調査区割り（グリット）を設定した。グリット配置図と基準点の国土座標、任意座標は第3図に示す。

発掘調査は基本的に重機で表土を除去した後、試掘調査の結果に基づき、人力にて遺物包含層の掘り下げを行った。遺構は移植ゴテ等の遺構調査に適した道具を使用し、実測、写真撮影等を行い、トータルステーションを使用して位置とレベルを記録し、小破片はグリットごとに一括して取り上げた。

また、安全対策等で調査区内と外の境には、1～2m安全帯を残した。

各年度の発掘調査方法及び概要は以下のとおりである（詳細は第1章日誌抄等に記載）。

調査は、表土からVI層にかけて重機により掘削した後、一部VI層中とVII層からX層については鋤簾等による人力掘削を基本として遺構・遺物の確認を行った。遺構については、VI層からX層の上面で検出を行った。出土した遺物は点上げ、または一括で取り上げを行った。

2 遺構の認定と検出方法

検出された遺構の認定と検出方法については、以下のとおりである。

（1）遺構の認定

検出面、埋土状況、規模等を総合的に判断し、調査担当者で検討した上で遺構の認定を行った。本編掲載の主な遺構の認定は以下のとおりである。

竪穴建物跡は、埋土や形状、床面の有無、遺物の出土などから総合的に判断した。発掘調査ではSAの略記号を用いた。集石及び礫群は、礫の集中を確認したところで慎重に周辺を精査し、集石は検出した順にSEを、礫群はSRの略記号を用いた。なお、遺構の検出の写真撮影後、掘り下げて実測を行った。各遺構は基本1/10で実測している。

発掘調査時の認定を整理作業の際に再度検討して、遺構の認定や時期を決定している。

（2）遺構の検出方法

遺構の検出及び調査方法として、当時の掘り込み面に限りなく近い位置での検出を目指して調査を進めたが、判別のしやすい地層上面での検出が多くなったのは否めない。遺構調査の際に、掘り過ぎるものもあり「検出面からの深さ」にはらつきがあったので、調査のあり方を再検討し、今後の調査に生かしていきたい。

調査着手前の状況は、北側半分は畠、南側半分は雑木林であった。過去の圃場整備等に伴う造成等でI～III層については削平されている部分も多くみられた。表土が薄く、攪乱を受けている箇所があり、遺構の検出をはじめ調査が難しかった。この場合、先行トレンチの設定、攪乱部分の埋土除去等最善の調査方法を調査担当で検討し、遺構の推定ラインも含め残存部の記録保存に努めた。

3 整理作業・報告書作成作業の方法及び内容

整理作業・報告書作成作業は、令和3年度に行った。

水洗作業の方法は、土器や石器の一部に関しては、ブラシを用いたが、剥片石器は超音波洗浄機を用いて進めた。

注記は、水洗い終了後順次行った。注記を行う際、薬品を使用するため換気に注意しながら手作業で進めた。

これまでに刊行された遺跡の記号と重複しないようにデータを管理している南の縄文調査室に確認をとり、遺跡名を表す記号を「SMK」とした。その後に出土区、層、取り上げ番号等が記してある。

分類・接合作業は、遺構内遺物と包含層遺物に分けた後、包含層出土土器については、土器の胎土や文様等で時期ごとに分別し、接合する方法をとった。

石器については、剥片石器と礫石器に分けた後、器種及び石材別に分類した。作業の効率化を図るため、一部実測委託を行った。

遺物出土分布図は、トータルステーションで取り上げたデータを統合し、図化ソフトを使用して作成した。

遺構の認定・分類は、実測図や写真等を用いて、発掘調査担当者と連携を取りながら再検討し確定した。

土層断面や遺構の原図データの点検・修正後、デジタルトレースを行った。

第2節 層序

本遺跡は、標高約70mの万之瀬川に流れ込む大谷川左岸の河岸段丘面に位置する。

調査着手前の状況は、北側半分は畠、南側半分は雑木林であった。過去の圃場整備等に伴う造成等でI～III層については削平されている。また、傾斜地であり堆積状



第2図 下桃木渡瀬遺跡グリッド配置図

況が良好でないため、鍵層となる鬼界カルデラを噴出源とするアカホヤ火山灰層（約7,400年前）と桜島北岳を噴出源とする薩摩火山灰層（P14）（約12,800年前）の堆積が発達していないことが確認された。薩摩火山灰層は、通称チョコ層と呼ばれる旧石器時代から縄文時代草創期包含層の混合土で確認されている。このように鍵層の上位・下位の地層についても、堆積が一部において不

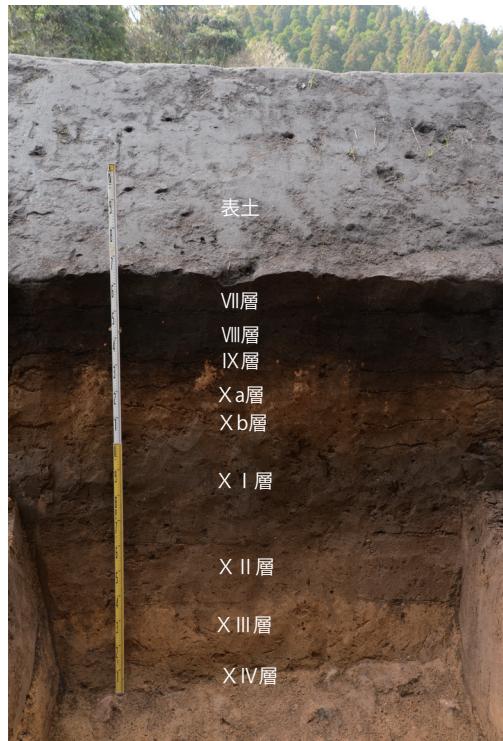
安定な状況が認められる。

下層確認の結果、旧石器時代の包含層の下位は暗褐色硬質土、黄褐色土を経て礫混砂層に遷移し掘削した範囲ではシラスは確認できなかった。

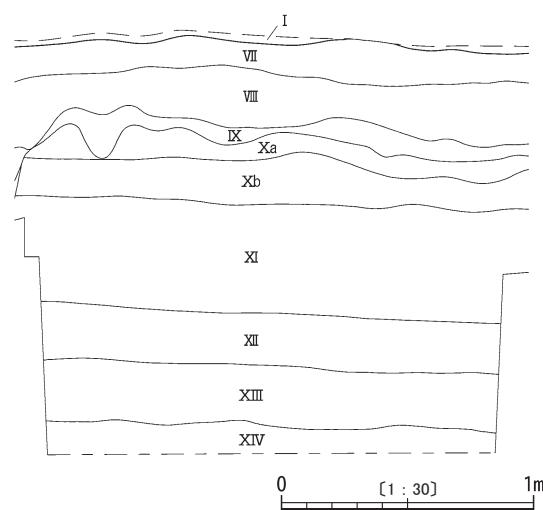
包含層や遺構・遺物の年代を把握する手がかりの1つとなる基本層所等は第2表のとおりである。

第2表 下桃木渡瀬遺跡基本層序

層位	色調等	包含層	備考
I	表土		
II	暗茶褐色土		
III	黒褐色土		大部分は削平
IV	明茶褐色土		
V	暗茶褐色土	古墳時代	
VI	明黄橙色土		アカホヤ火山灰相当層
VII	茶褐色土	縄文時代早期	
VIII	黒褐色土		
IX	茶褐色粘質土		薩摩火山灰層（P14）と チョコ層の混合土
Xa	黄褐色腐植土	旧石器時代	
Xb	黄褐色腐植土		X I層ブロック含む
X I	暗褐色硬質土		
X II	暗褐色粘質土		
X III	黄褐色土		
X IV	礫混砂層		

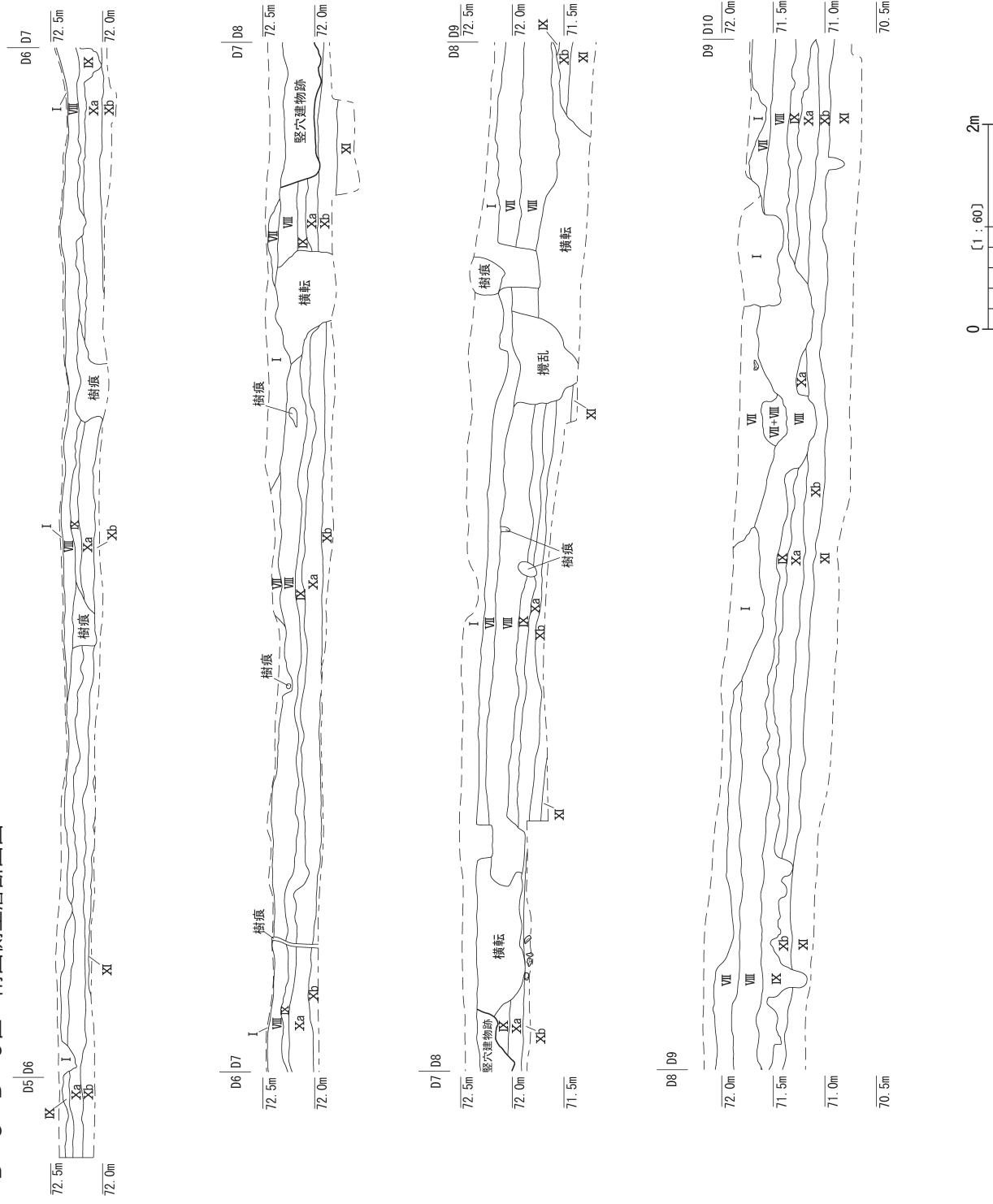


第3図 D-10区 VII層～XIV層 土層断面



第4図 D-10区 VII層～XIV層 土層断面図

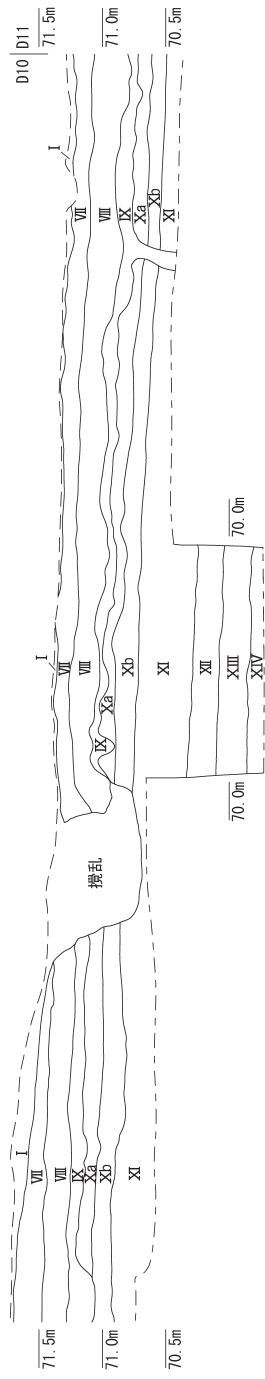
D-5～D-9区 南西侧土層断面図



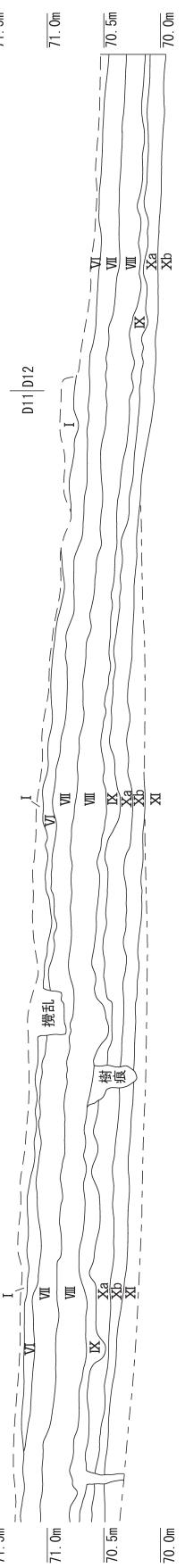
第5図 土層断面図 (1)

D-10~D-12区 南西側土層断面図

D9 p10



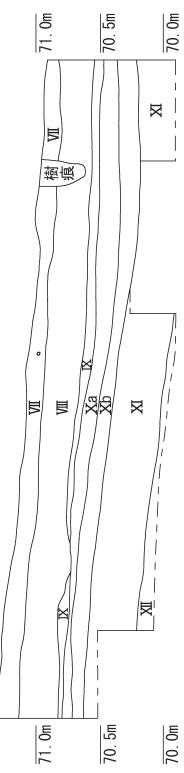
D10 p11



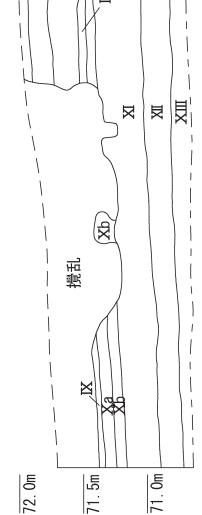
① D-6区 北側



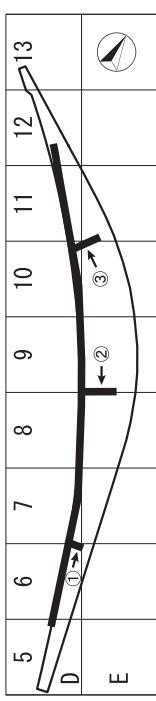
② E-9区 南側



③ D・E-10・11区 北側



E8 p8



第6図 土層断面図 (2)

第4章 調査の成果

はじめに

調査の結果、本遺跡では時代・時期を判断する上で指標の一つとなる、いわゆる鍵層の鬼界カルデラを噴出源とするアカホヤ火山灰や桜島を噴出源とする薩摩火山灰(P14)の堆積が発達していないことが確認された。

これら鍵層の上位・下位の地層についても、堆積が一部において不安定な状況が認められている。本遺跡が遺跡の東方に連なる標高180m級の山地から、遺跡の東方を南流する大谷川によって開析された河岸段丘面に立地することに起因すると考えられる。

旧石器時代に該当する遺構・遺物についてはIX～X層、縄文時代早期に属すると考えられる遺構・遺物は、VII～VIII層、縄文時代後期・晩期の遺物はVII層を主体に出土している。出土層位にやや幅が認められる状況である。

弥生時代以降の遺構・遺物については、当該時期の包含層の堆積厚が薄く、残存状況が部分的であったことから、土器形式によって時代区分を行い記述する。

第1節 旧石器時代の調査

1 調査の概要

IX層は、薩摩火山灰(P14)を含む茶褐色粘質土、X層は黄褐色腐植土である。本節では、IX・X層の調査について詳述する。

IX・X層における旧地形は、南から北に向けて緩やかに傾斜しており、一部には層の堆積が安定せず攪乱等も認められた。

遺構は、礫群6基を検出した。調査区全体に広がる形で分布し、構成礫のほとんどが被熱を受けていると考えられる点が特徴である。

整理作業の結果、礫分の構成礫とIX層から出土した礫の一部が接合し、同時期と判断できるものがあることからIX層の出土遺物は、基本的にX層と同時期のものと判断した。またIX・X層で角錐状石器が出土したことも両層を旧石器時代該当層と判断した根拠である。

薩摩火山灰(P14)を含むIX層からは石器のみが出土し、土器は確認されていない。出土遺物は少量であるものの、角錐状石器、削器、磨石、凹石、台石、石皿が出土している。

(1) 遺構

1号礫群（第8図）

D・E-11区のXa層上面で検出した。構成礫が130×180cmの範囲に楕円形状に分布する。礫は60個で、石材は砂岩が92%、凝灰岩が8%の割合である。礫の重

量は、100～200gが38%を占める。礫群の東側には地層の横転があり、この影響で横転付近の礫は原位置を留めていない可能性が残る。礫集中部の下位から楕円形を呈する70×80cmの浅い皿状の掘り込みを確認した。礫群内から遺物は出土せず、明確な炭化物は見られなかった。

2号礫群（第9図）

E-10区のX層上面で検出した。縄文時代早期の2号集石（第28図）の直下から確認されたものである。調査区の東に接する県道の法面脇に位置し、半分程度は後世の掘削により失われている。検出規模における構成礫は、150×230cmの範囲に分布する。石材は砂岩が85%、凝灰岩が15%で、確認した礫数は147個である。重量は100g以下が47%，101～200gが31%を占める。礫集中部の下位からは楕円形を呈する60×90cmの浅い皿状の掘り込みを確認した。礫群内から遺物は出土せず、明確な炭化物は見られなかった。

3号礫群（第10図）

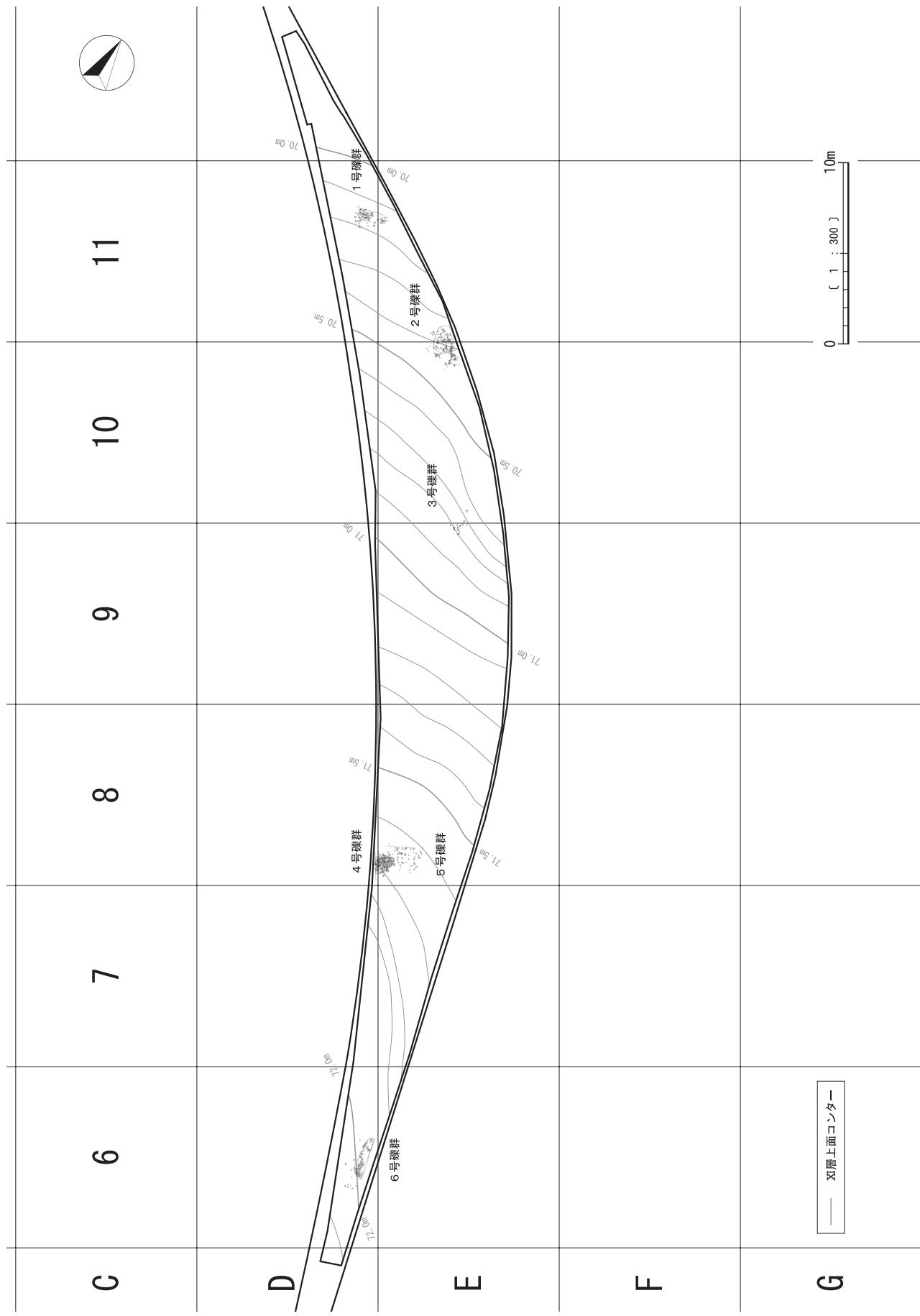
E-9・10区のXa層の中位で検出した。最下位の構成礫はXb層面に接していた。重量では、100g以下～400g以下の礫がそれぞれ同じ割合で構成され、石材はすべて砂岩である。礫数は16個で、検出した礫群の中で最も少ない。礫の分布も密ではなく、明確な掘り込みは確認できなかった。また、礫群の構成礫の中から凹石が1点出土している（第11図1）。1は、三角柱状を呈する形状の砂岩礫で全体に被熱による赤化、ヒビがみられる。表面は平坦面が広く中央に敲打つぶれによるとみられる浅い凹みが1か所確認できる。微量ではあるが、煤状炭化物の付着が確認された。

4号礫群（第12図）

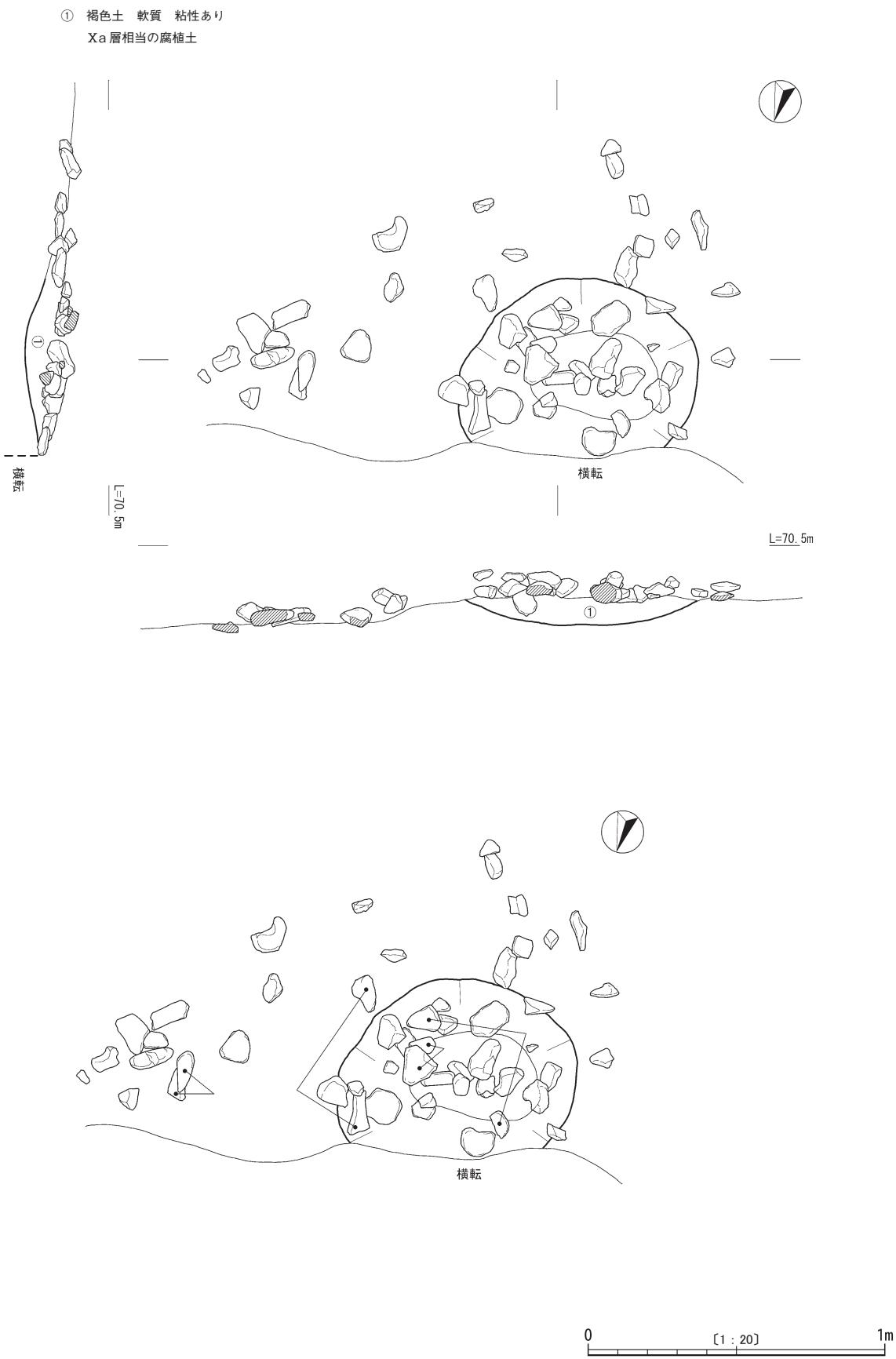
D・E-8区のXa層上面で検出した。西側が調査区外に延びていることが想定され、調査区内では全体の約4分の3程度を確認することができた。礫数は152個で、石材はすべて砂岩である。礫の重量は100g以下が22%を占めているが、1000～2000gの礫が10点、3900gの礫が1点あり、大きな礫を用いているのが他の礫群にみられない特徴である。礫群の中心と考えられる部分に110×130cmの浅い掘り込みをもつ。礫の一部に炭化物の付着が確認された。

整理作業で破碎礫を接合した結果、4号礫群を構成する礫に台石（第13図2）が含まれていることを確認した。

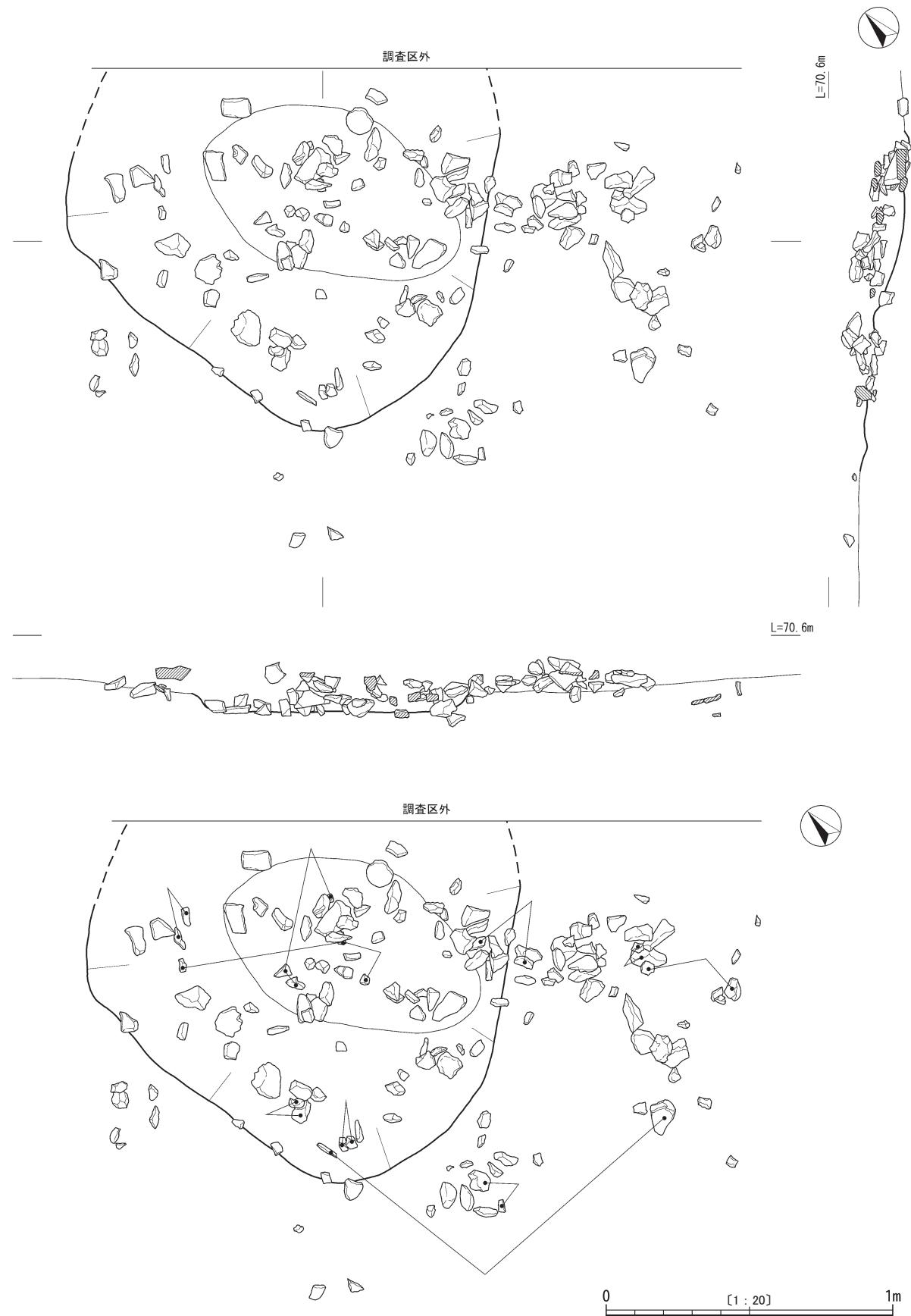
2は、砂岩を素材とする台石で、礫群内の礫2点と包含層出土礫3点の計5点が接合したものである。被熱を受けており、微量であるが煤状の炭化物も付着している。



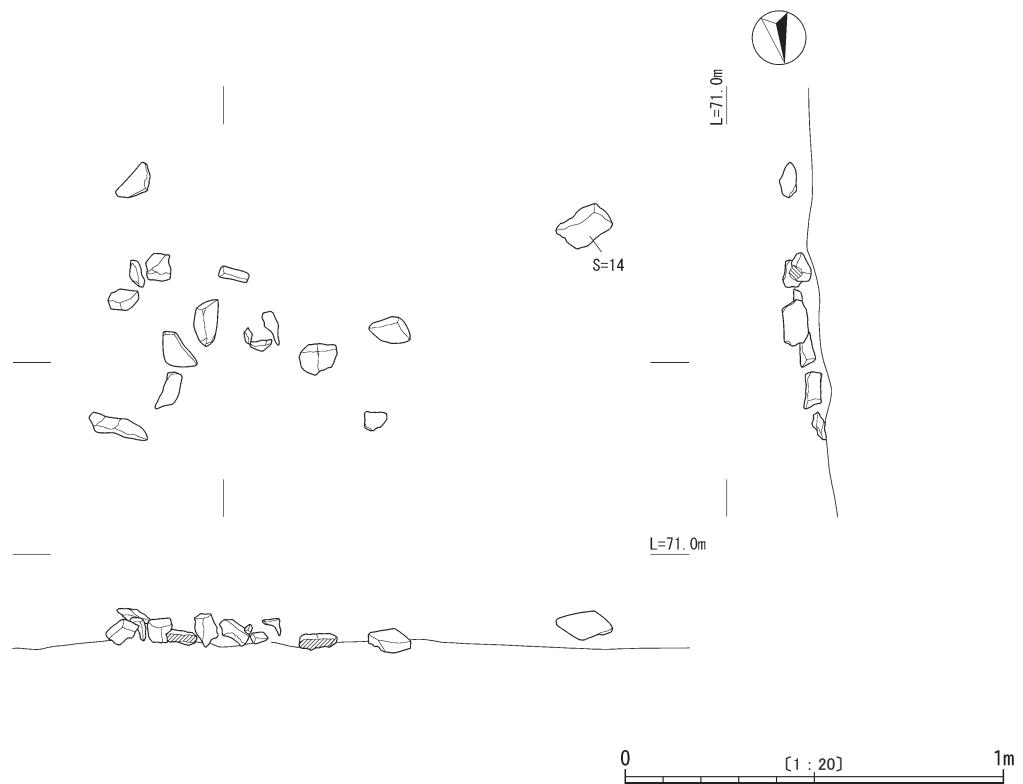
第7図 旧石器時代遺構配置図



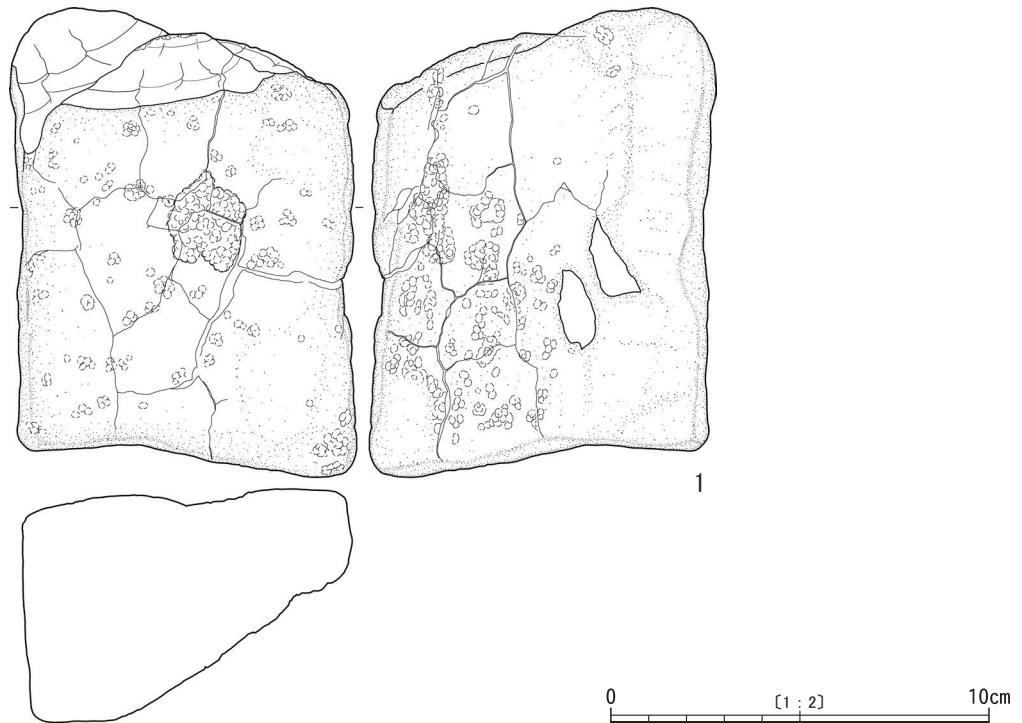
第8図 1号礫群及び礫接合図



第9図 2号礫群及び礫接合図



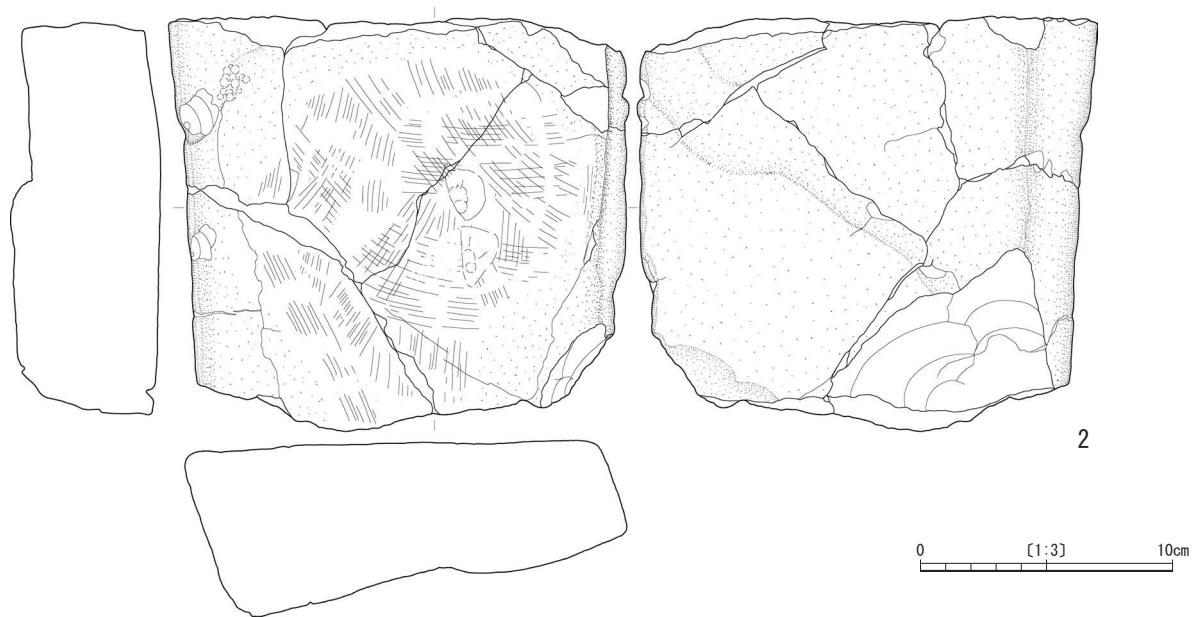
第10図 3号礫群



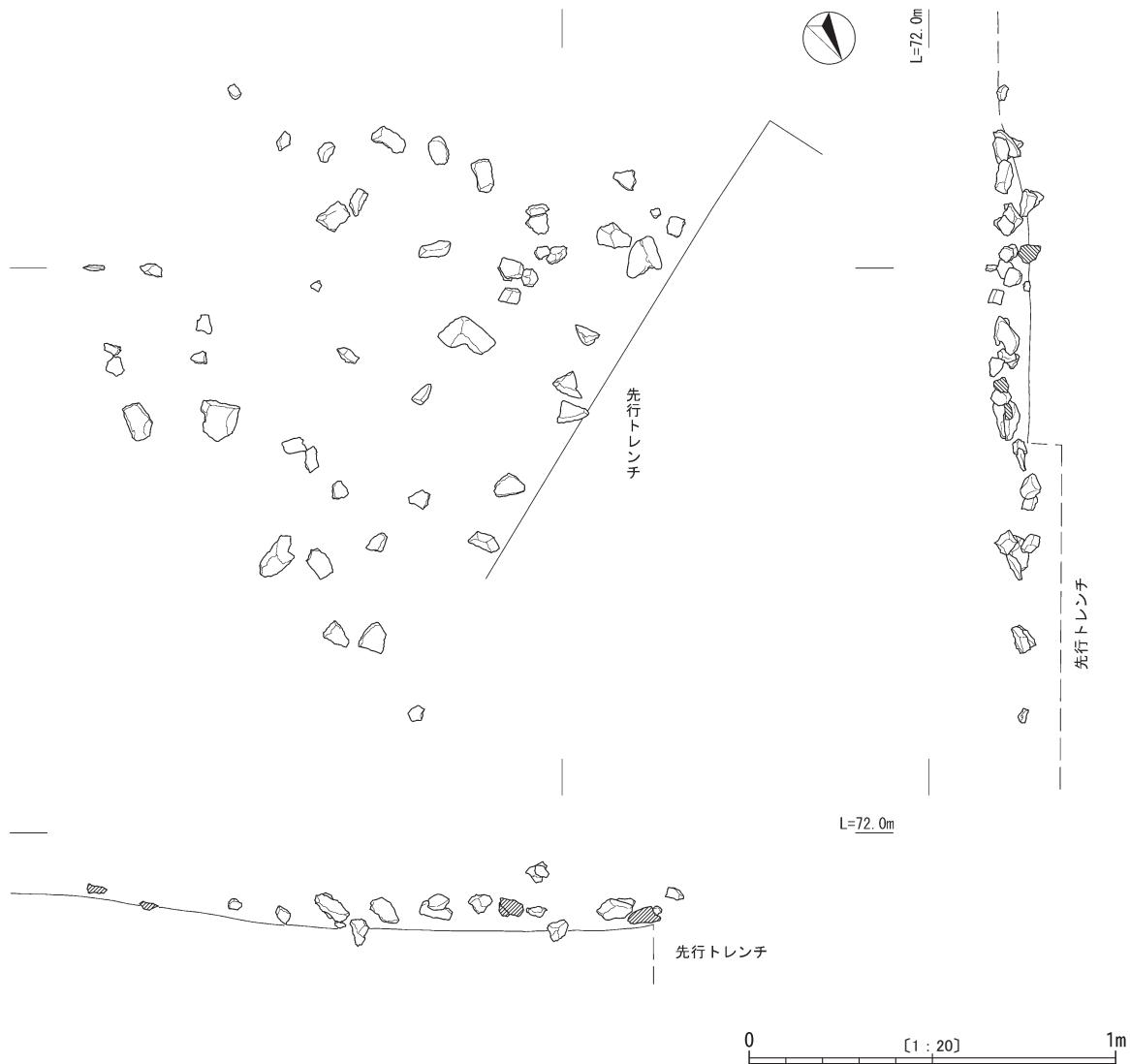
第11図 3号礫群内 出土石器



第12図 4号打砾群



第13図 4号打砾群内 出土石器



第14図 5号砾群

約16cm×17cmの方形を呈し、平坦面に擦痕があり、皿状の凹みがないことから台石として分類した。擦痕が様々な方向に確認できるが、弧を描くように擦っている可能性がある。また中央付近に敲打痕が2か所確認できる。

台石の構成礫のうち包含層礫1点（第13図2）は、6号礫群付近で取り上げており、他の4点とは出土位置が18mほど南側に離れている。どの礫も被熱していることから、台石として使用後、礫群へ転用されたのではないかと考えられる。そのため包含層礫3点についても4号礫群と6号礫群に使用されていたことも推測される。

台石のほか、接合できた礫を2点掲載した（第17図3・4）。この2点は、多くは4号礫群の礫で構成され、5号礫群1点と接合することができた。

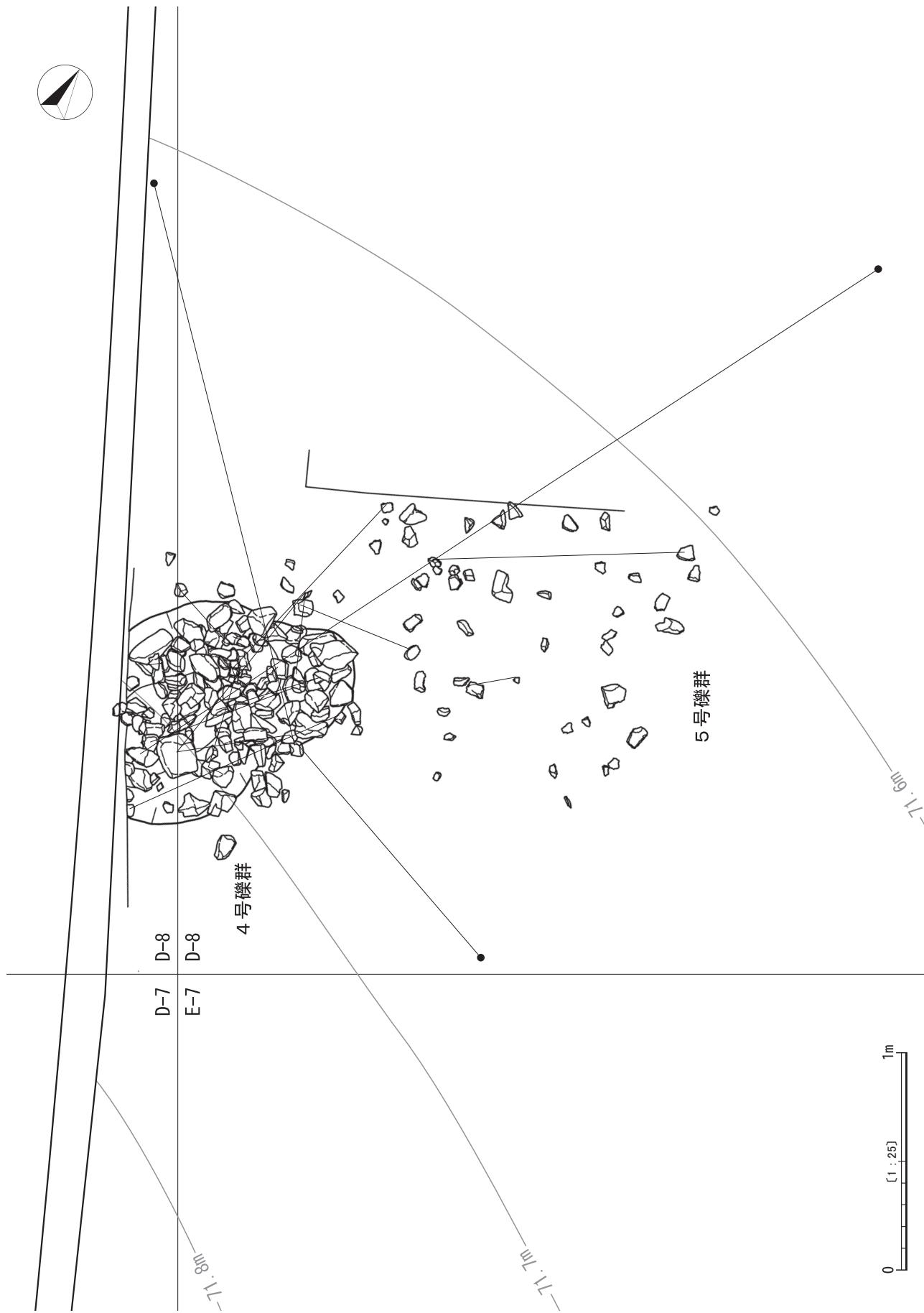
5号礫群（第14図）

5号礫群は、4号礫群の東側に隣接する形で検出した。

E-8区に位置し、礫は49個からなり、100g以下の礫が61%を占める。構成礫の分布範囲は160×170cmの円状を呈する。明確な掘り込みは確認できなかった。5号礫群と隣接していることもあり、第15図のように接合できる礫も数点あった。そのため、4号礫群と5号礫群は同一時期に存在していたと考えられる。また、5号礫群は4号礫群の掻き出し部にあたることも考えられる。明確な炭化物は見られなかった。

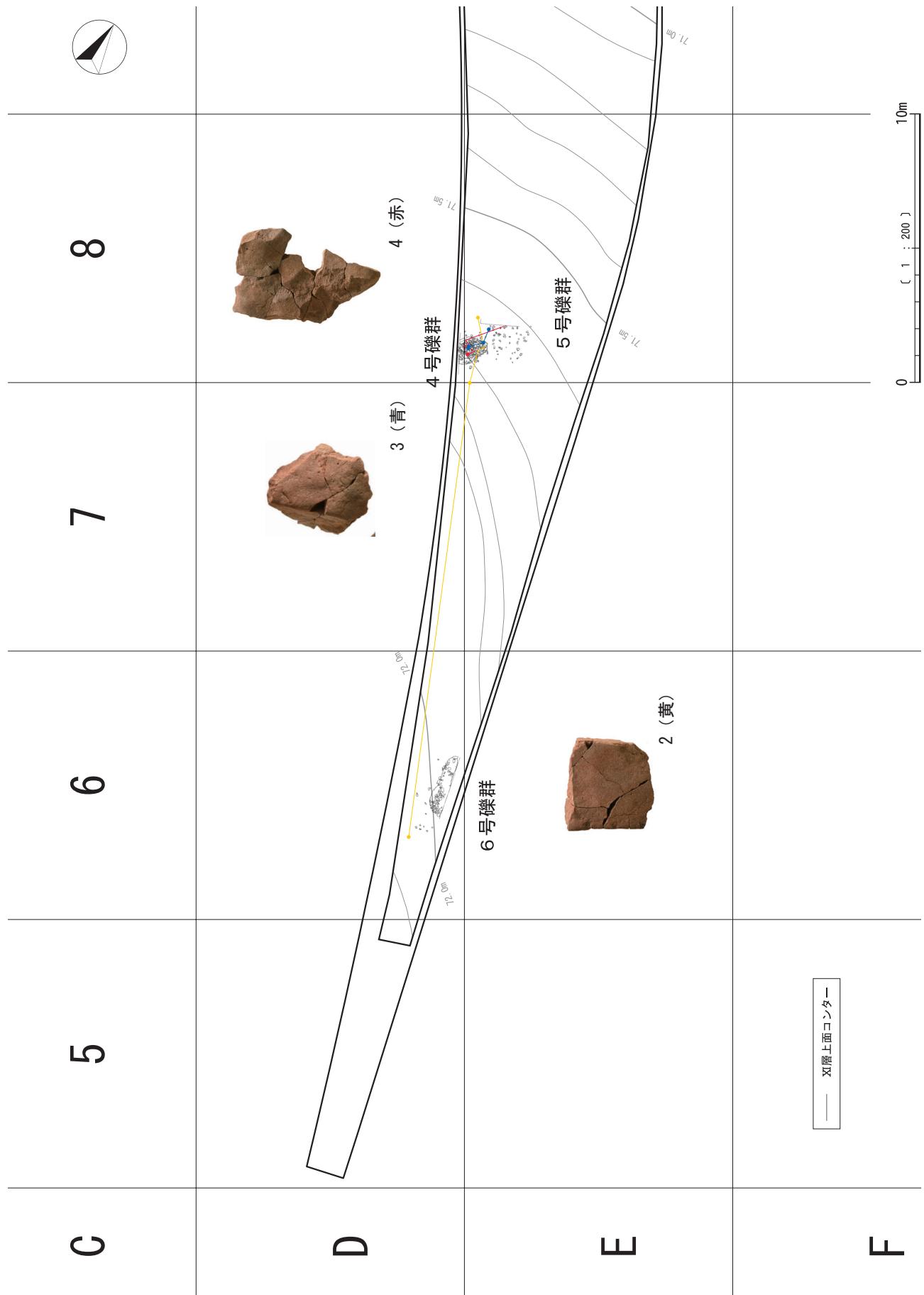
6号礫群（第18図）

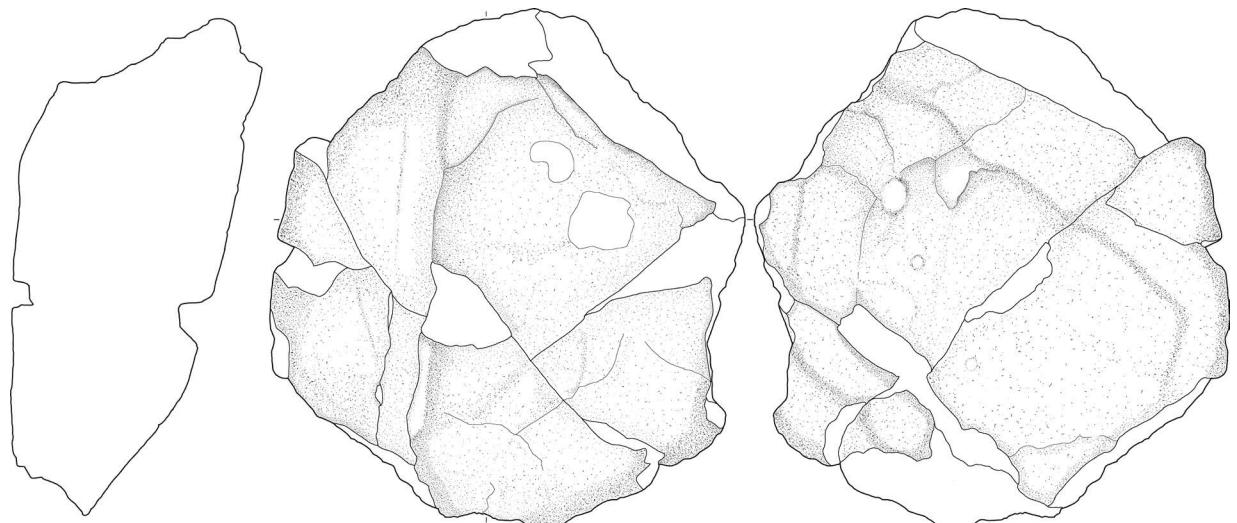
D-6区のXa層下位で検出した。構成礫の分布範囲は60×230cmの橢円形状を呈している。礫数は96個で、石材は砂岩96%、凝灰岩7%で構成されている。重量は100g以下の礫が38%を占めている。20×40cmの浅い掘り込みがある。礫に炭化付着物が確認されたため、1



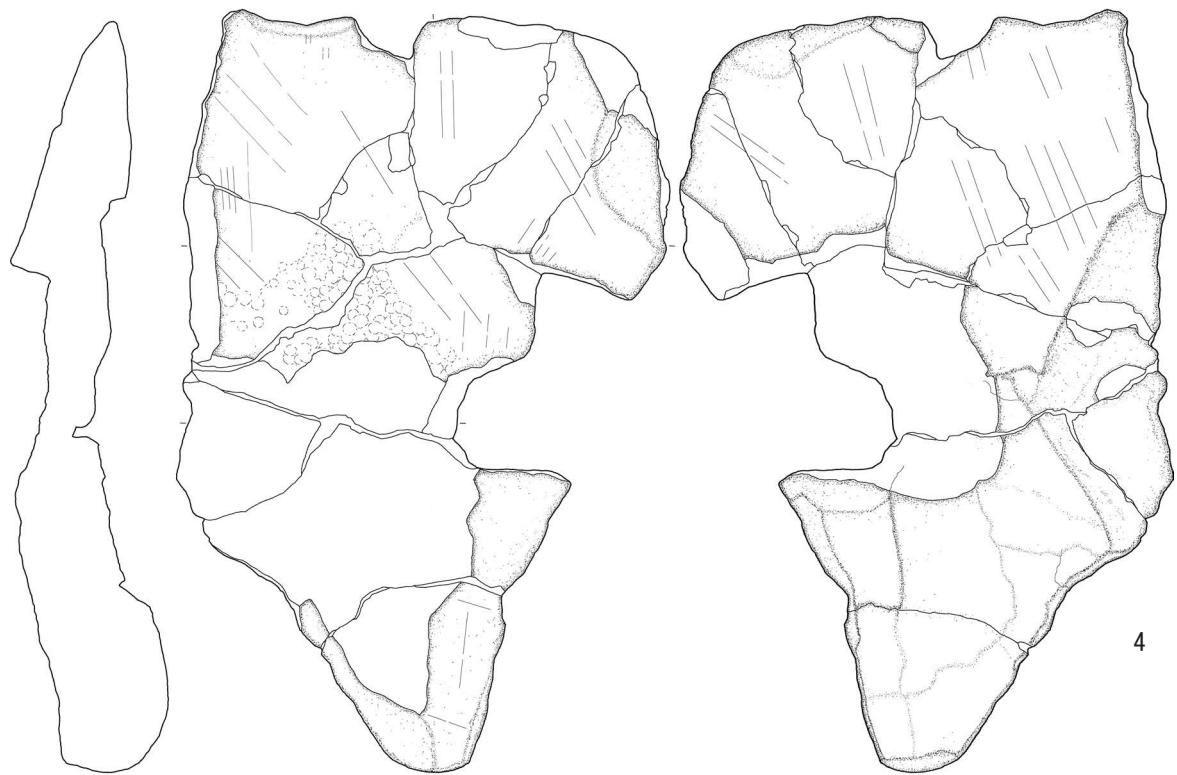
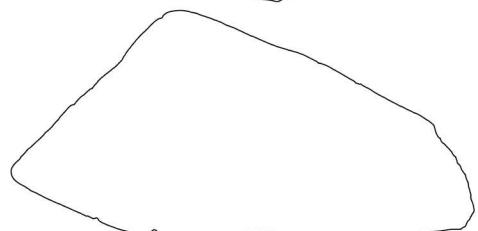
第15図 4号礫群・5号礫群接合図

第 16 図 磯接合図

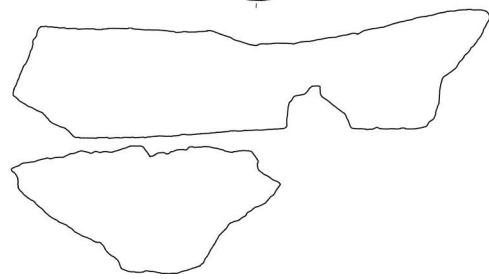




3



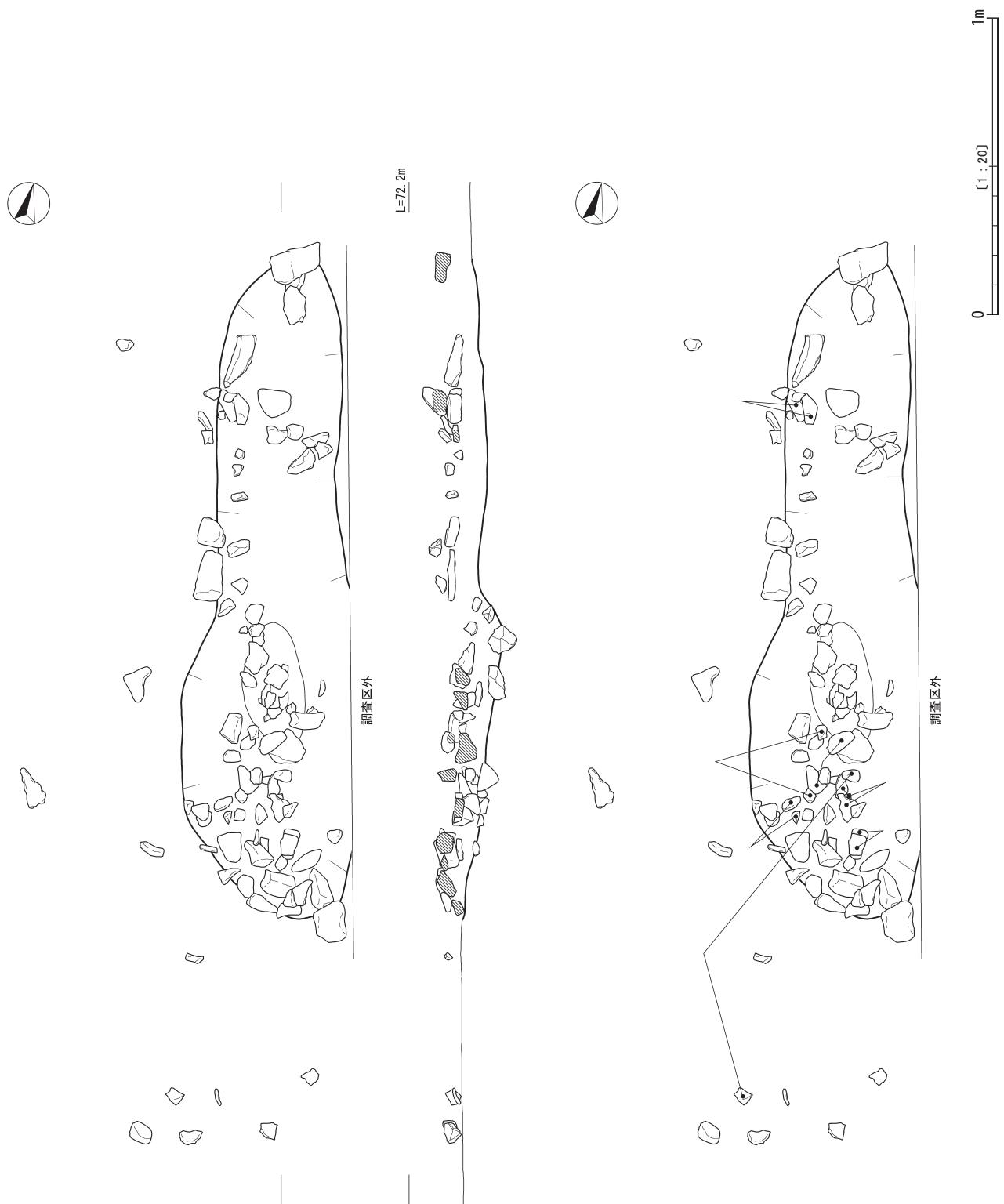
4

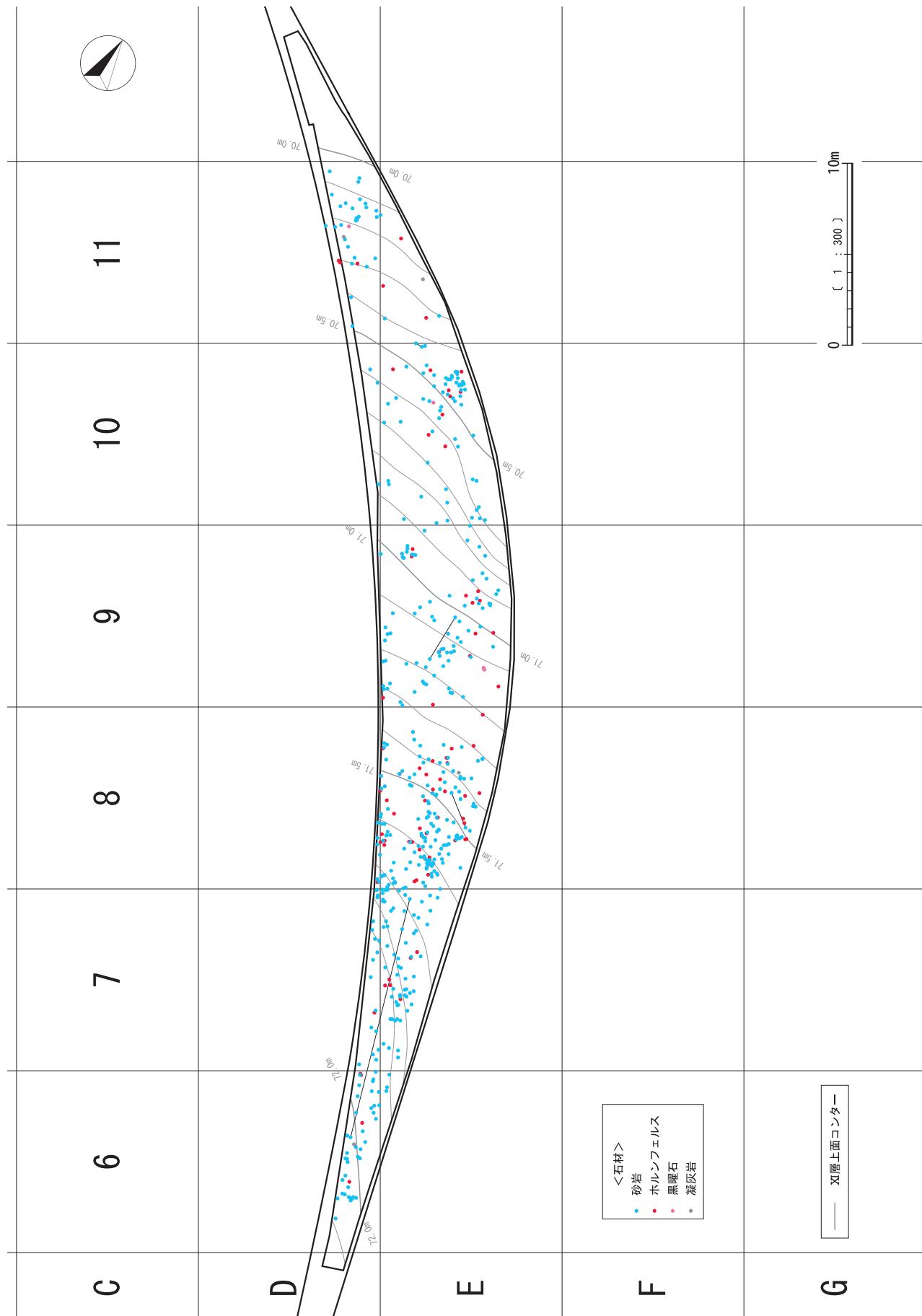


0 [1 : 2] 10cm

第17図 4号礫群・5号礫群内出土礫

第18図 6号礫群及び礫接合図





第19図 旧石器時代包含層礫出土状況図

点について放射性炭素年代測定を行った。6号礫群も2号礫群と同様、現道側の法面近くに位置し、調査区外に接しているため、攪乱等により一部が失われている可能性が高い。

(1) 遺物

調査区内における石器の分布密度は極めて薄く、集中部等は検出されていない。少量だが角錐状石器、削器、磨石、凹石、台石、石皿が出土している。

角錐状石器（第21図5・6）

5・6は、角錐状石器である。5は、乳白色を呈する凝灰質の頁岩を素材とする。残存長52.0mmで、両側縁及び稜上に急傾斜剥離による調整を施している。下半部を欠損するが、中型の角錐状石器であったと推定される。先端付近には明瞭な摩耗がみられ、穿孔具として使用された可能性がある。6は、頁岩を素材とする。長軸は35.9mmで、平坦剥離で成形される。両側縁に丁寧な急傾斜剥離による調整を行っているが、左側縁上部には微細な剥離が確認できる。先端部は、尖頭状を呈するがわずかに折れが生じており、基端部は尖らない。

抉入石器（第21図7）

7は、抉入石器である。白色の玉髓で厚みのある不定形剥片を素材とする。下部の内湾する部分には表裏面からの調整が施されており、抉入石器とした。刃部とみられる抉入部分には、微細な剥離が生じている。

削器（第21図8・9）

8・9は、削器である。8は、黒色ガラス質で白色の不純物を多く含む黒曜石を素材とする。最大長17.4mm、重さは1.1gで、IX・X層から出土した石器の中では最小である。上部は左右から生じた折れにより先端が尖る。下縁部には腹面側からやや粗い調整剥離が施され、縁辺には使用によると考えられる微細な剥離が生じている。9は、赤褐色を呈するやや厚みのある玉髓製の剥片を素材とする。最大長32.8mmで重さは11.4gである。最大厚は13.0mmである。主要剥離面には上方からの剥離で打瘤の膨らみを除去した後、右側辺に腹面側から剥離が加えられた後、腹面側からも不規則な二次調整が施され、縁辺には微細な剥離が生じていることから、右側縁を刃部とする削器とした。

使用痕・加工痕のある剥片（第21図10～第22図18）

10・11・12・13は、加工痕のある剥片である。10は、アメ色を呈し、黒色の縞が入る黒曜石を素材とし、残存長23.2mm、重さは2.5gである。左右側辺及び下辺は折れ面となっており、上辺部分に腹面側から二次的な剥離が施されている。11は、頁岩を素材とする。角錐状の厚みのある剥片である。左側辺は折れ面で、意図的に折断された可能性もある。上端部分に複数の剥離が加えられており、彫器として用いられた可能性が考えられる。12

は、安山岩を素材とする。角錐状の剥片で上面は折れ面となっている。表面には左右側辺及び下端方向からの二次的な剥離がみられる。13は、灰色を呈する砂岩の板状の剥片である。下辺に背面方向から粗い剥離が加えられている。背面には、砥石状の平滑な磨面がみられる。

14・15・16・17・18は、剥片である。14は黒曜石、15は玉髓、16・17は頁岩、18は、ホルンフェルスを素材とする。14は、漆黒色不透明で、若干の不純物を含む薩摩川内市樋脇の上牛鼻産の黒曜石に類似する、やや横長の剥片である。背面には部分的に自然面が残る。15は、赤褐色を呈する玉髓の剥片で、末端には折れが生じている。主要剥離面には顕著な打瘤の発達がみられる。明確な使用の痕跡は確認できない。16は、灰色に灰黒色の縞が入る珪質頁岩の剥片である。石核の稜を取り込むように剥出されたとみられる。やや縦長の剥片である。

17は、剥離面を打面として剥出された、やや縦長の剥片である。主要剥離面には顕著な打瘤稜痕が認められる。末端部先端には折れを生じているが、左側に伸びるやや厚みのあるノの字状の剥片である。

磨石（第23図19）

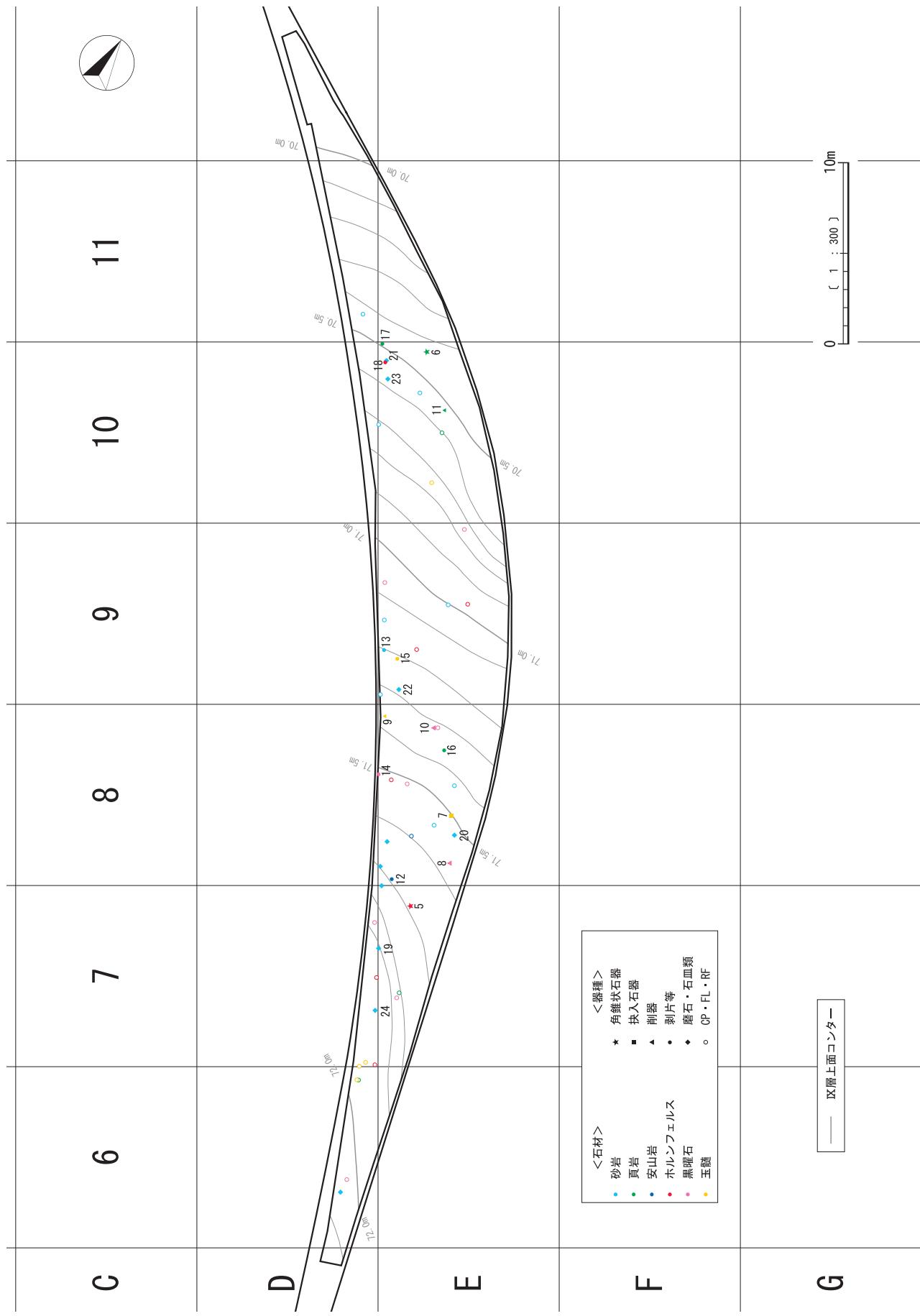
19は、磨石である。安山岩の円礫を利用し、平面形は卵形を呈する。長さは93.2mmである。平坦な磨面には、縦方向の擦痕が確認できる。裏面は下部分が特に擦れ方が顕著で、使用時に押し出す力が強くかかっていたのではないかと考えられる。また、側面には敲打が施され、作業の際の手擦れ痕の可能性がある摩耗が生じていることから、長い期間使用されていたのではないかと考えられる。

凹石（第23図20～第24図23）

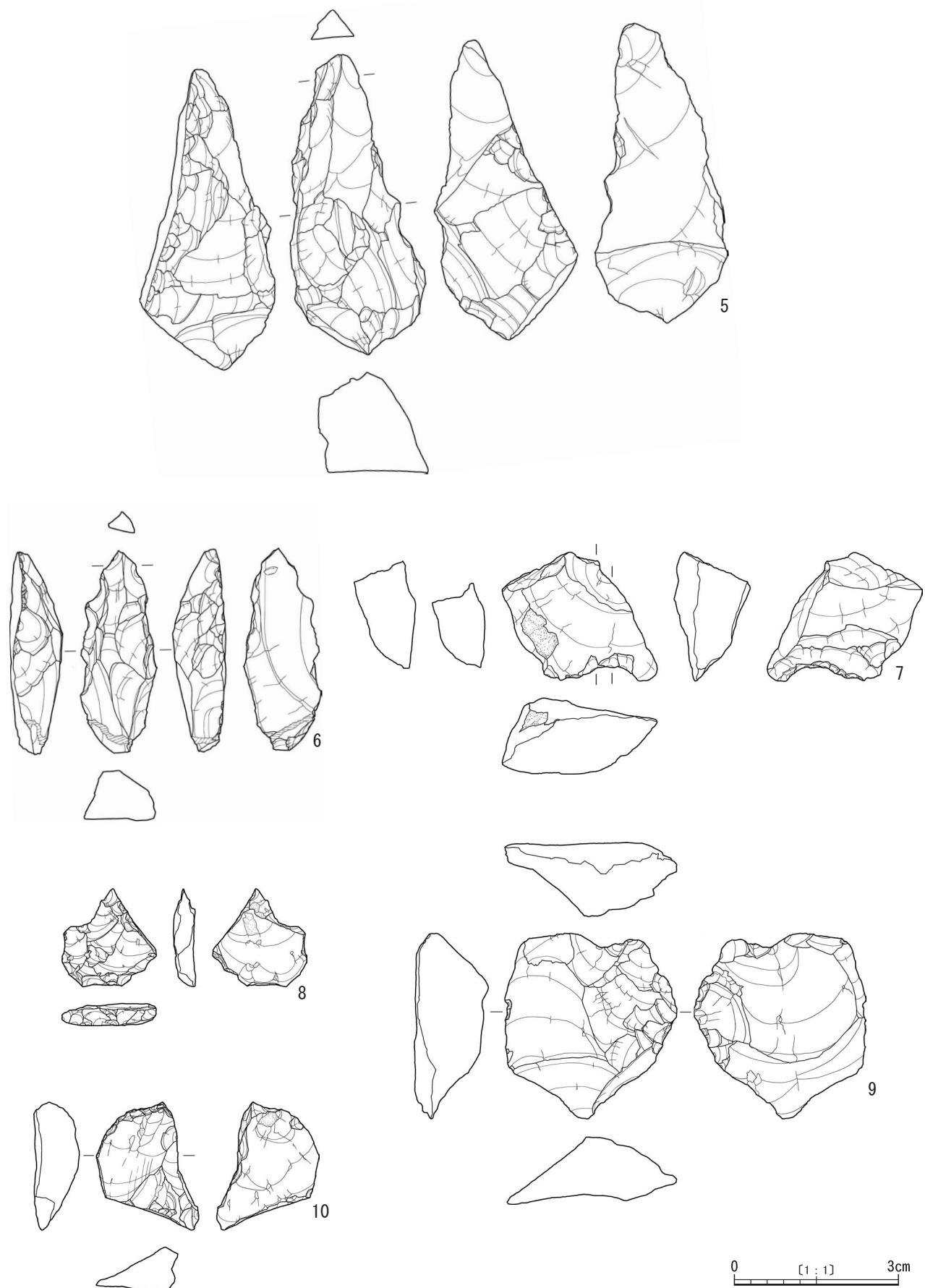
20・21・22・23は、凹石である。素材はすべて砂岩である。20は、細長く平たい礫で、表裏2面とも凹みがある。表面は、敲打面が集中しており、凹みの単位を2か所確認できる。また裏面は、敲打面がやや広く集中部が2か所確認できる。また上端部と下辺部にも敲打痕が確認できる。21は、縦長で凹凸のある礫である。表裏、左側側面の3面に凹みがある。表面には4か所、裏面には3か所、左側面には1か所の凹みが確認できる。また上下の面と左側側面には敲打痕がみられる。また裏面と右側面にはほんの僅かだが炭化物が付着している。22はやや縦長で、ノの字状になっている亜角礫である。表裏に1か所ずつ凹みが確認できる。表面には、集中する敲打痕も見られる。23は、平面形が三角形状の厚みのある亜円礫で、表面のみ凹みがある。礫の中央に2cmほどの凹みが確認できる。また、上端部に敲打痕が見られる。

石皿（第25図24）

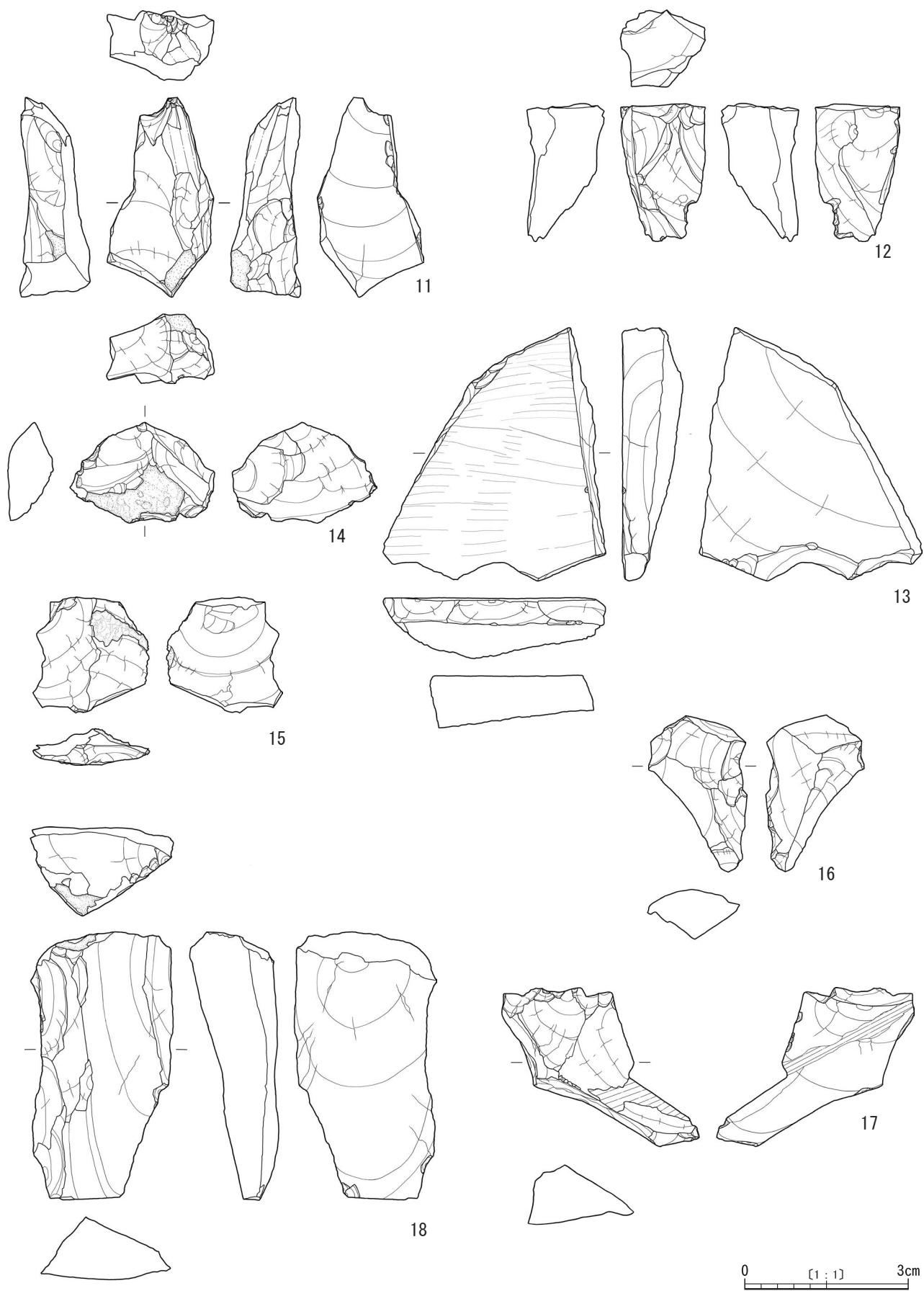
24は、凝灰岩を素材とする礫石器である。楕円状で右側面を欠損している。全体に擦痕が確認でき、中央部に皿状の凹みが確認できることから石皿に分類した。中



第20図 旧石器時代遺物出土状況図



第21図 旧石器時代 出土石器（1）



第22図 旧石器時代 出土石器（2）



第23図 旧石器時代 出土石器（3）

央付近は黒っぽく変色し、敲打痕も数か所確認できる。

凹みの周囲は多くの擦痕が確認できる。右側下部は外側へ向かう擦痕が確認され、石の減り方が大きく、搔き出

し口だと考えられる。裏面は上下に擦痕が見られ、作業の際に石器の動きにより生じた可能性がある。

第3表 旧石器時代 磚群内出土石器観察表

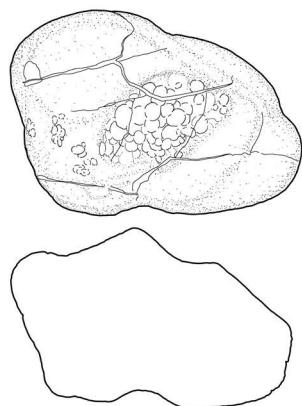
挿図番号	掲載番号	出土区	層位	取上番号	器種	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)
11	1	D-9	X	SR005-008	凹石	砂岩	116.4	89.5	64.2	980.0
13	2	E-8	X	SR003-036	台石	砂岩	161.0	178.8	72.0	2890.0
17	3	E-8	X	SR003-031他	礫	砂岩	202.6	181.2	101.0	3309.0
	4	E-8	X	SR003-120他	礫	砂岩	295.4	190.6	62.2	2634.0

第4表 旧石器時代 出土石器観察表（1）

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	取上番号	器種	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)
21	5	E-7	XI	1007	角錐状石器	頁岩 II	(52.0)	23.9	23.5	26.0
	6	E-10	Xa	518	角錐状石器	頁岩 II	35.9	12.9	9.3	4.5
	7	E-8	Xa	792	抉入石器	玉隨 I	23.0	22.9	14.0	7.0



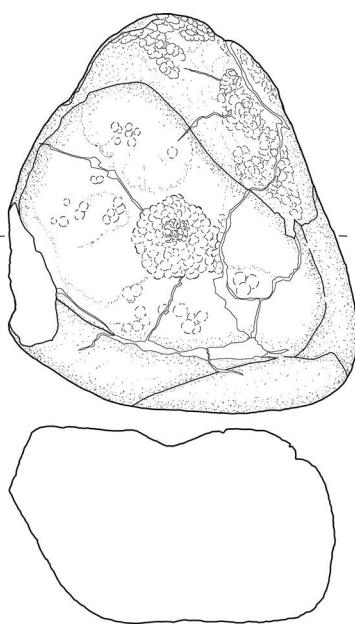
21



22

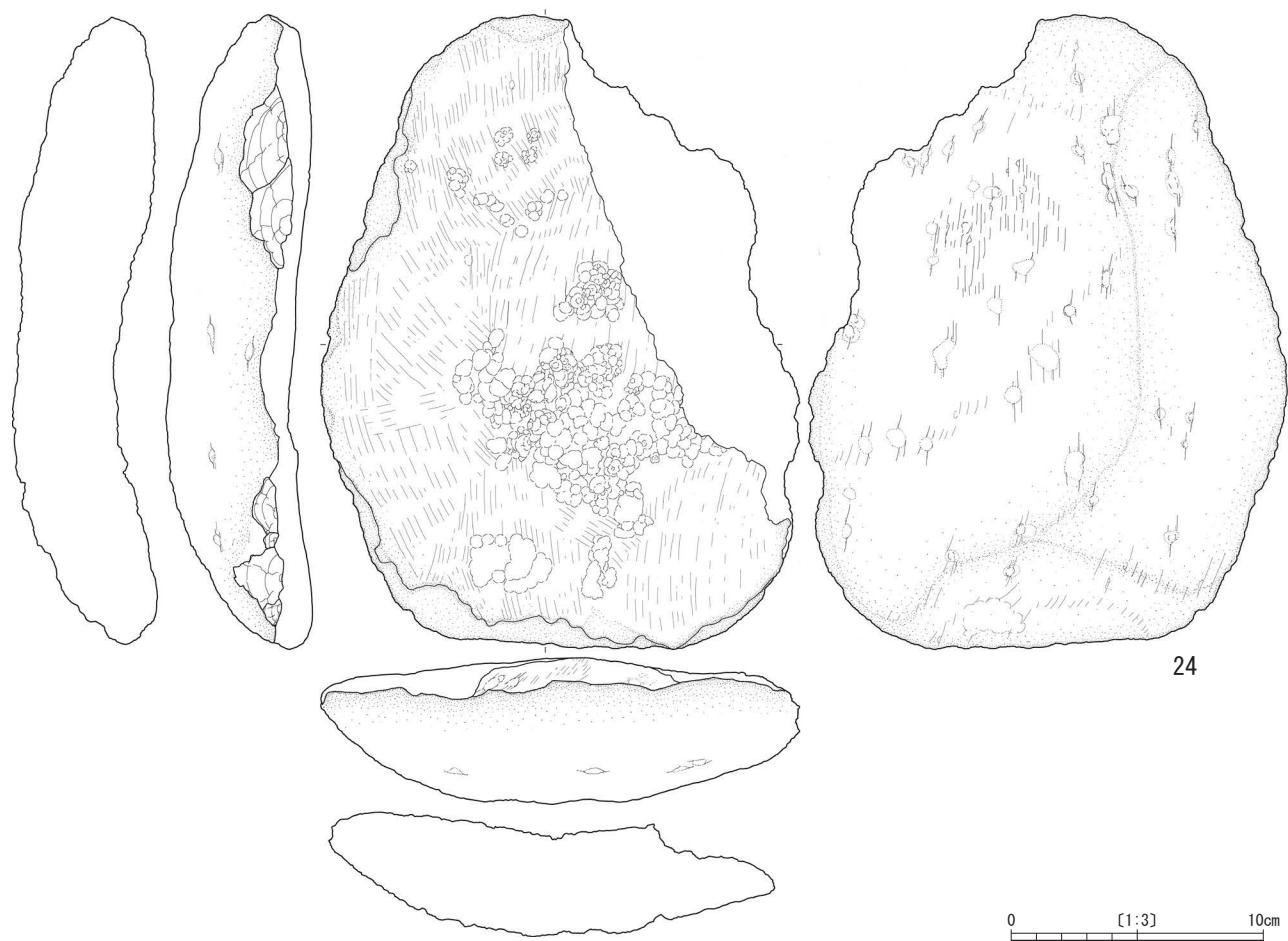


23



A scale bar at the bottom right, marked with 0, 10cm, and a ratio of 1:2.

第24図 旧石器時代 出土石器（4）



第25図 旧石器時代 出土石器（5）

第5表 旧石器時代 出土石器観察表（2）

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	取上番号	器種	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)
21	8	E-8	Xa	706	削器	黒曜石 II B	17.4	17.0	3.8	1.1
	9	E-8	Xb	428	削器	玉隨 II	32.8	30.6	13.0	11.4
	10	E-9	IX	156	二次加工剥片	黒曜石 II A	(23.2)	14.9	7.7	2.5
22	11	E-8	Xa	288	二次加工剥片	頁岩 II	36.1	18.3	12.4	7.8
	12	E-10	Xa	965	二次加工剥片	安山岩 A	24.1	15.1	12.7	5.0
	13	E-10	IX	408	二次加工剥片	砂岩	43.6	40.5	10.9	20.0
	14	E-8	Xb 下	437	剥片	黒曜石 I	17.8	26.0	9.1	3.6
	15	E-9	Xb	958	剥片	玉隨 II	21.0	20.0	6.5	2.3
	16	E-8	Xa	886	剥片	頁岩 II	17.7	27.1	10.2	3.6
	17	E-10	Xa	827	剥片	頁岩 II	22.3	20.8	12.0	6.5
	18	D-10	XI	996	剥片	ホルンフェルス II	48.4	25.6	14.9	18.0
23	19	D-9	Xa	979	磨石	安山岩 B	93.2	76.4	51.2	552.0
	20	E-8	Xa	784	凹石	砂岩	114.2	59.2	30.2	290.0
24	21	E-10	Xa	280	凹石	砂岩	126.8	76.3	54.1	687.0
	22	E-9	Xa	959	凹石	砂岩	104.4	66.8	45.6	355.0
	23	E-10	Xa	281	凹石	砂岩	103.5	91.0	51.8	620.0
25	24	D-7	Xa 下	601	石皿	凝灰岩	245.9	187.0	50.8	1930.0

第2節 繩文時代早期の調査

1 調査の概要

調査区に一部残存していた古墳時代のV層の調査を終え、茶褐色土のⅦ層、黒褐色土のⅧ層の調査を行った。

Ⅶ・Ⅷ層の旧地形は、IX・X層と同様、南から北に緩やかに傾斜している。安定した堆積ではないが、鬼界カルデラを起源とするアカホヤ火山灰相当層であるVI層を掘り下げた面のⅦ・Ⅷ層を本遺跡における縄文時代早期の該当層とする。調査区全域でこれらの層を確認することができる。

Ⅶ・Ⅷ層の遺構は、集石を2基検出した。構成礫は、すべて被熱している。また、遺物は少量だが楔形石器、石核、磨石、有溝砥石が出土している。

(1) 遺構

1号集石（第27図）

D・E-7区のⅦ層中で検出した。構成礫は90×110cmの範囲に分布し円状を呈している。90×70cmの浅いボルト状の掘り込みの中に礫の約4分の3が充填された状態で検出された。北側約4分の1は礫が少なく、搔き出されたものとみられる。礫数は84個で、重量は101～200g以下が全体の31%，201～300g以下が25%を占

める。石材は、約90%が砂岩で、約10%が凝灰岩である。明確な炭化物は見られなかった。

2号集石（第28図）

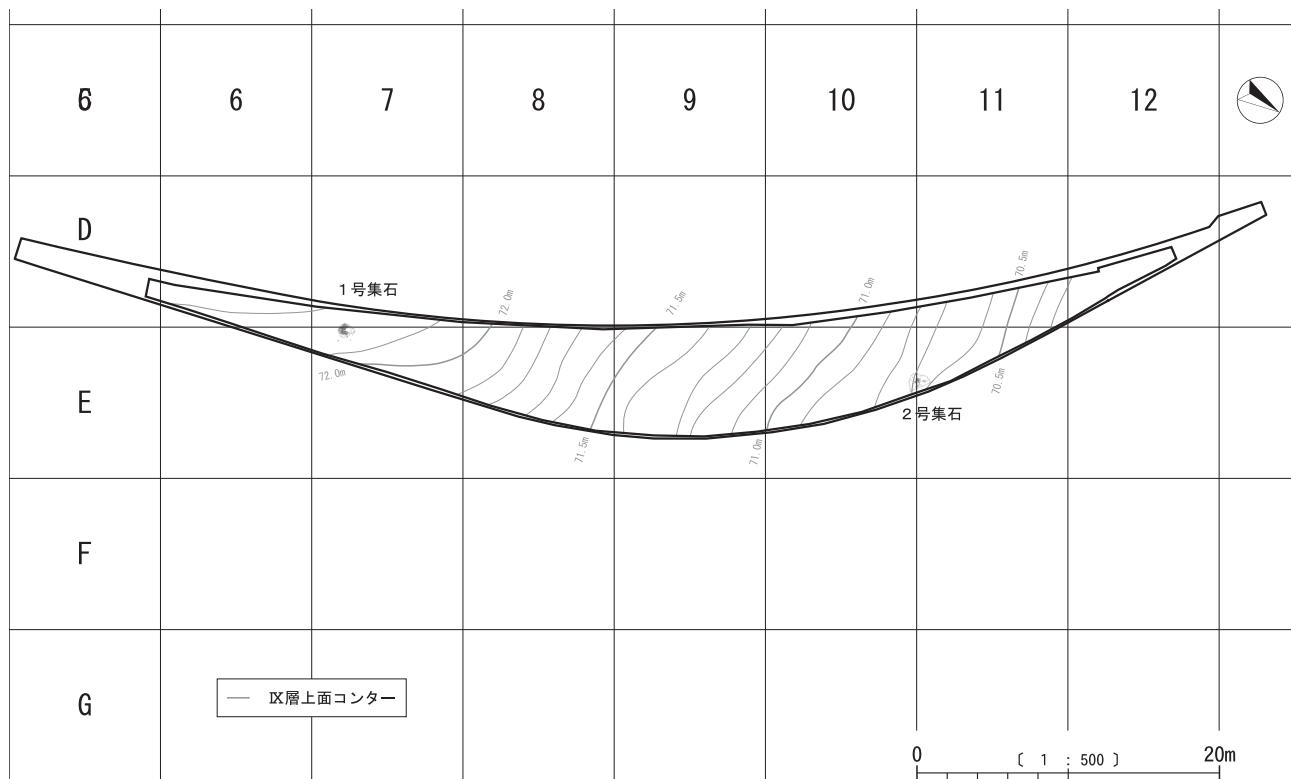
E-10区のIX層上面で検出した。埋土はⅧ層相当である。現道側の法面近くにあり、半分程度は、後世の搅乱等により失われている。2号集石の直下で礫が集中する2号礫群が検出され、集石構築時が礫群の礫の一部を巻き込んでいた。礫は径5cm程度と小ぶりなものが多く、破碎が進んでいる点で、礫群の構成礫とは特徴が異なる。2号集石は34個で、重量は100g以下の礫が約53%，101～200g以下の礫が約28%を占める。石材は約68%が砂岩、約32%が凝灰岩である。明確な炭化物は見られなかった。

(2) 遺物

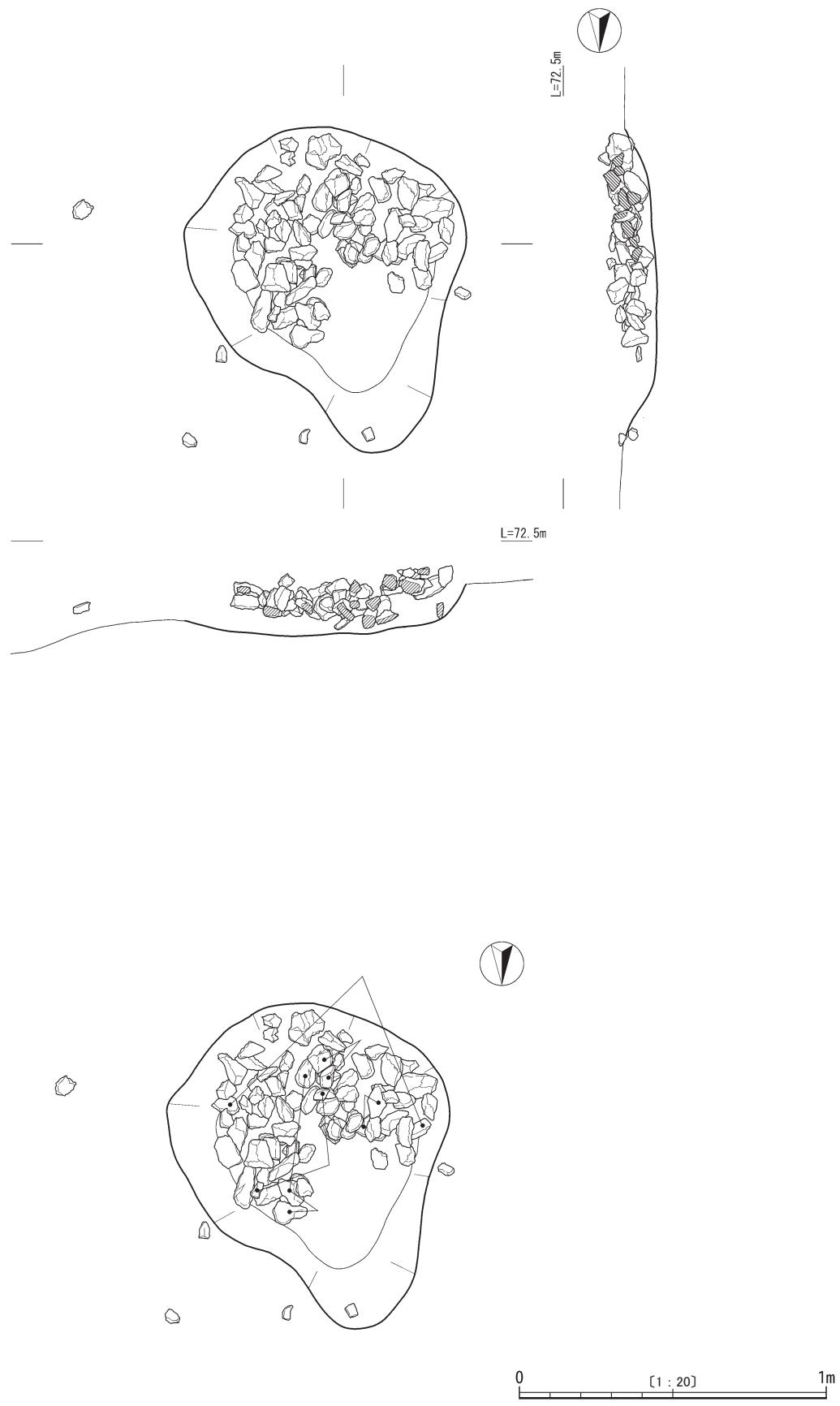
ア. 土器（第32図25～第33図29）

型式から縄文時代早期と認定できる土器片は29点出土した。整理作業を行い、そのうち5点を掲載する。

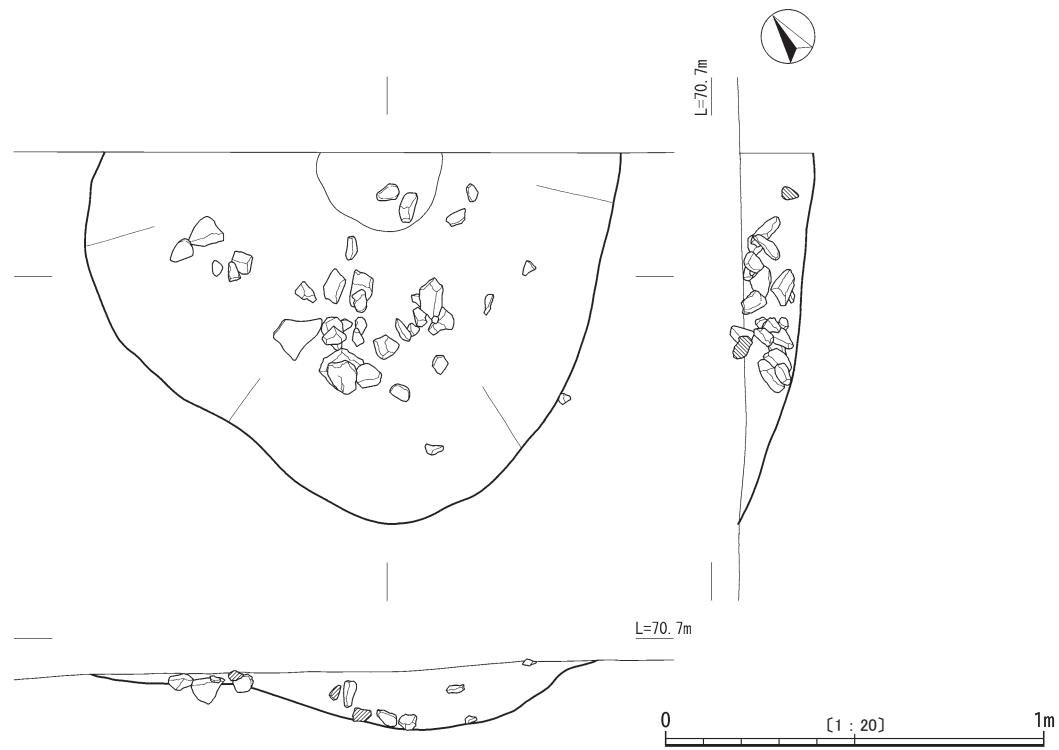
25は、深鉢形土器の胴部で、外面は斜位の貝殻条痕を施した後、丁寧なナデ調整を行い、縦位に3条ないし1条単位の貝殻刺突文が繰り返し施されている。内面は、ナデ調整を行っている。焼成は良好である。26は、深鉢



第26図 縄文時代早期 遺構配置図



第27図 1号集石及び礫接合図



第28図 2号集石

形土器で口縁から底部にかけて4分の1程度が残存している。外面は、短沈線による羽状文が施されている。口唇部は内面に向かって斜めに下がっている。27は、深鉢形土器の口縁から胴部である。口径で3分の2程度残存している。外面は、26と同様、短沈線による羽状文を施す。内面は丁寧にナデ調整が行われている。上部が厚く、下部にいくにつれ徐々に厚さが薄くなっている。また、口縁付近に円形の補修孔が穿たれている。28は、器種が不明であるが、胴部である。外面は縦位や横位のヘラ状の工具による沈線間に刺突を加える。また、縦位に紐状の低い突帯を貼り付け刺突を加えている。29も胴部片である。外面は、横位の沈線間に刺突を加えている。

イ. 石器

楔形石器（第34図30）

30は、楔形石器の破片である。黒色ガラス質で白色の不純物を含む黒曜石である。長軸14.9mm、重さ0.7gと本遺跡で出土した剥片石器で最小となる。上辺右寄りを起点とする複数の剥離が階段状を呈し、下辺は折れ面となっている。

使用痕・加工痕のある剥片（第34図31・32）

31は、灰褐色を呈する安山岩の剥片で、上辺には折れが生じている。右側縁には微細な剥離痕が確認できる。また下部先端は、摩耗しているのが確認できる。32は、二次加工痕のある剥片である。安山岩を素材とする。や

や厚みのある不定形剥片の右側辺上半部に不規則な二次的剥離が見られることから加工痕剥片とした。

石核（第34図33）

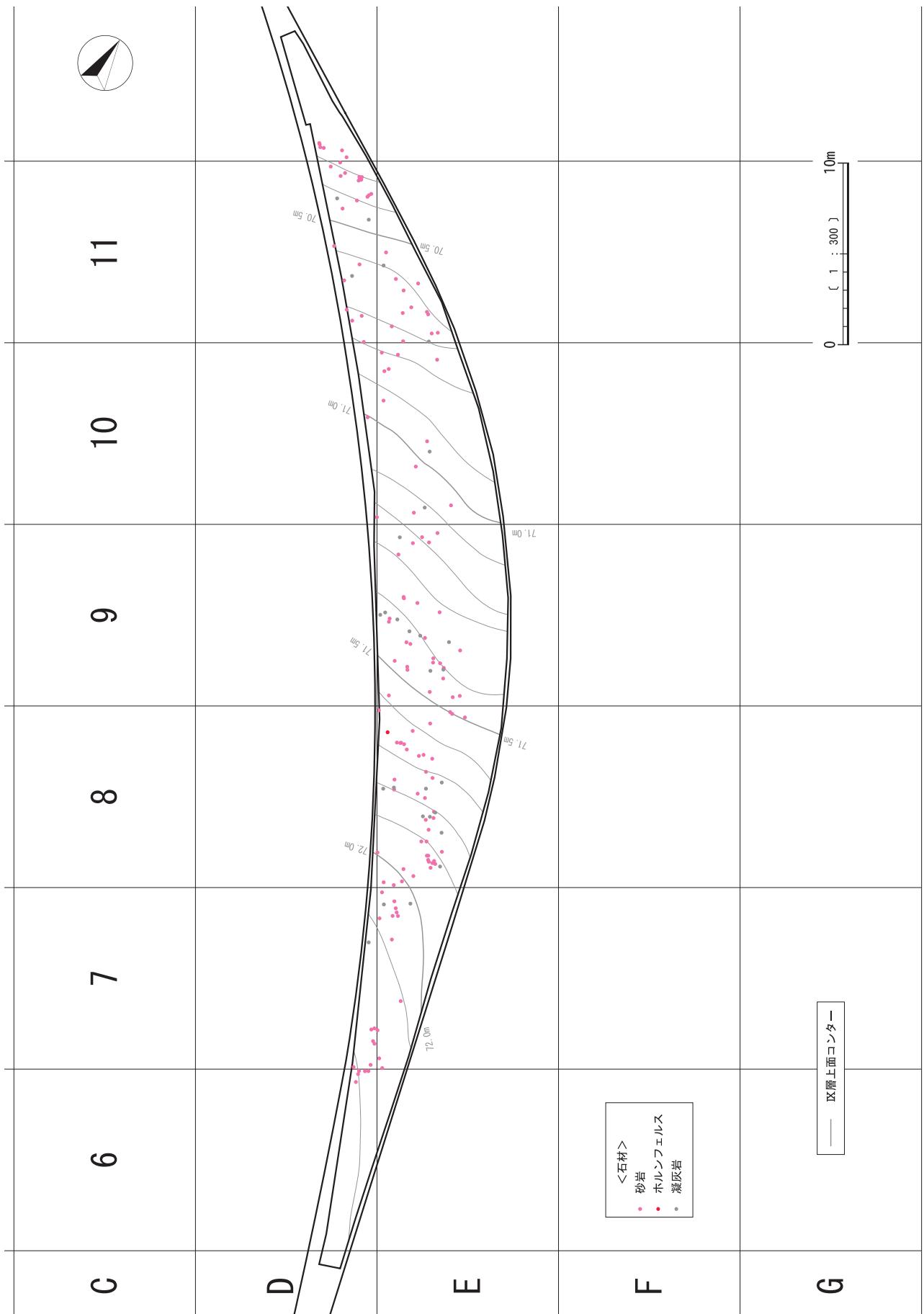
33は、石核である。漆黒色不透明な黒曜石を素材とする。自然面及び先行する剥離面を打面とし、上下左右に90°及び180°の打面転移を繰り返しながら、不定形な剥片を剥出している。背面は及び下面是、自然面が残っている。

剥片（第35図34～36）

34、35、36は、剥片である。34は、暗灰質で頁岩質のホルンフェルスである。先行する背面側の剥離の後、90度打面を転移し、剥出されたやや厚みのある不定形剥片である。35は、砂岩を素材とする。長軸91.2mm、重さ73.0gで、本遺跡で出土した剥片石器で最大である。背面の下部から右側縁にかけて自然面を残す。36は、赤を基調とする玉髓製の剥片であるが、クリーム色がマーブル状に混ざる。下辺は折れもしくは切断面で、全形は台形状を呈する。表裏の剥離痕から節理面を打面として同一打面から連続して剥片の剥出が行われたとみられる。

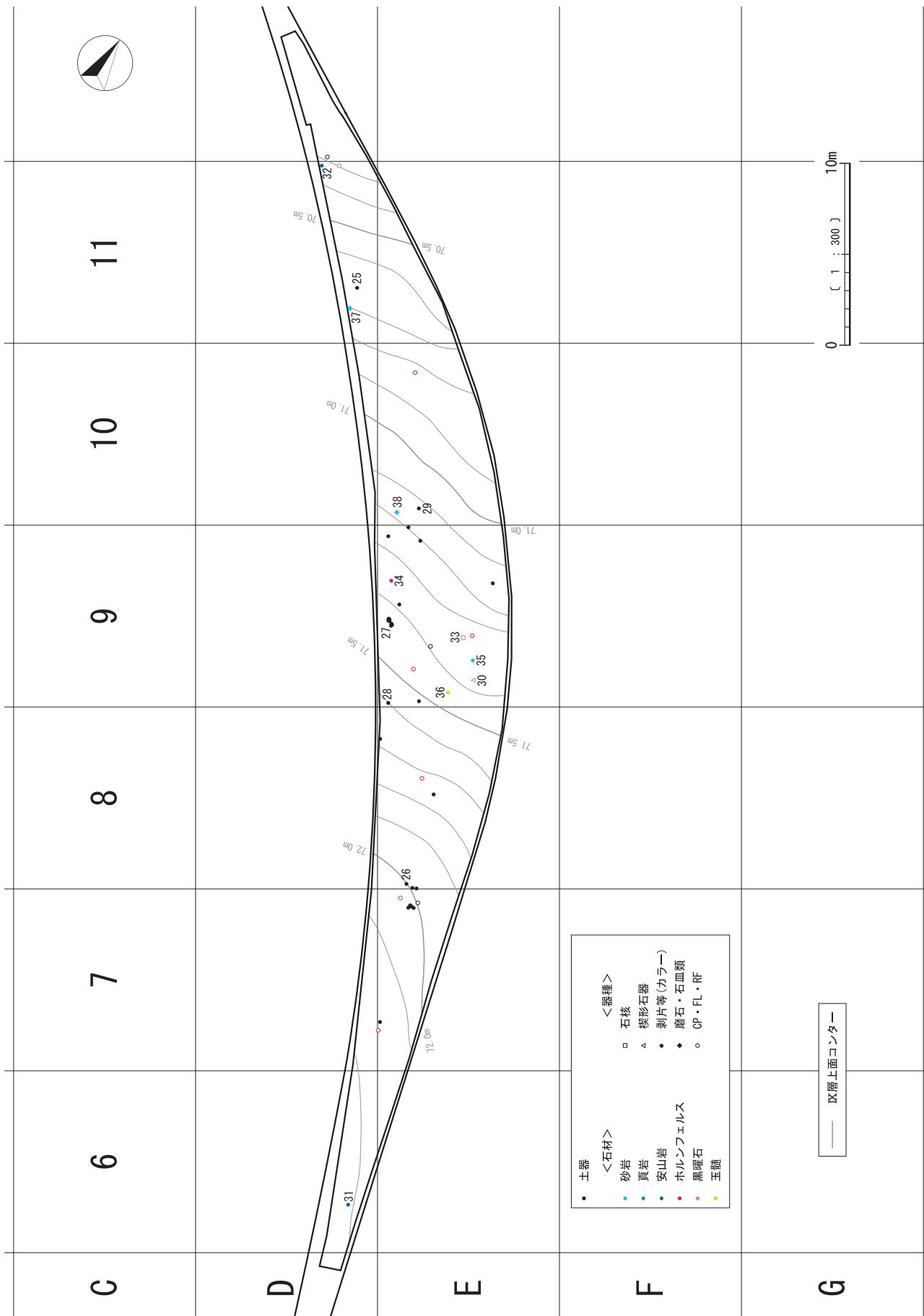
磨石（第35図37）

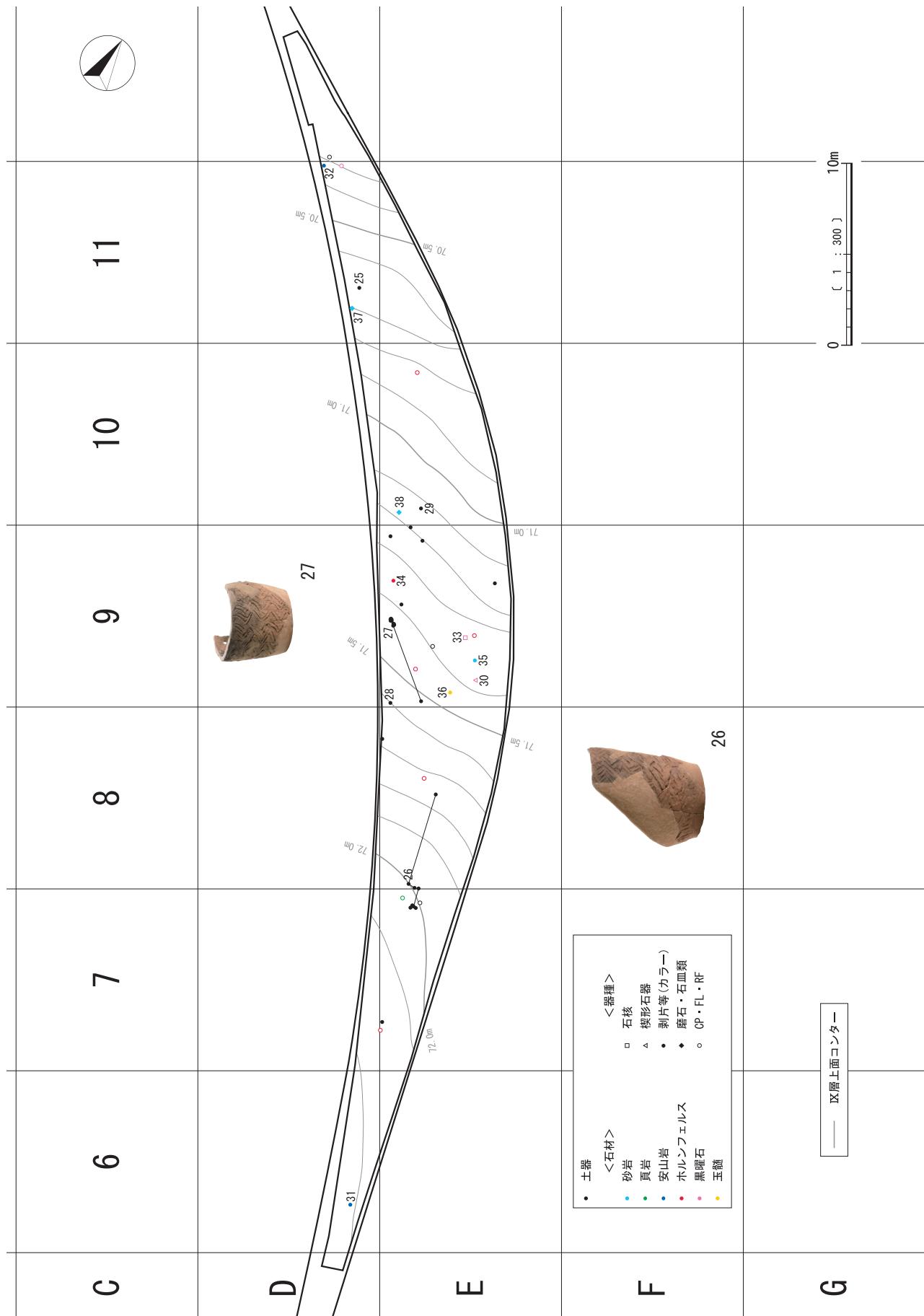
37は、磨石である。素材は、安山岩である。表裏の平坦面に磨面が、側面に敲打痕が確認できる。表面は磨面の中央に浅い凹みがあり、敲打に使用したとみられる。側面の敲打痕は、左右側縁は中央部に集中しているが、



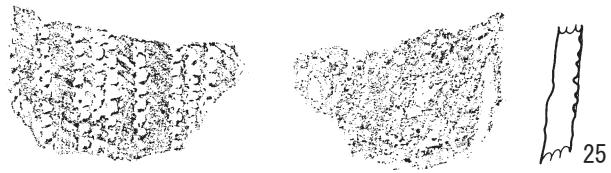
第29図 繩文時代早期 包含層礫出土状況図

第30図 繩文時代早期 遺物出土状況図

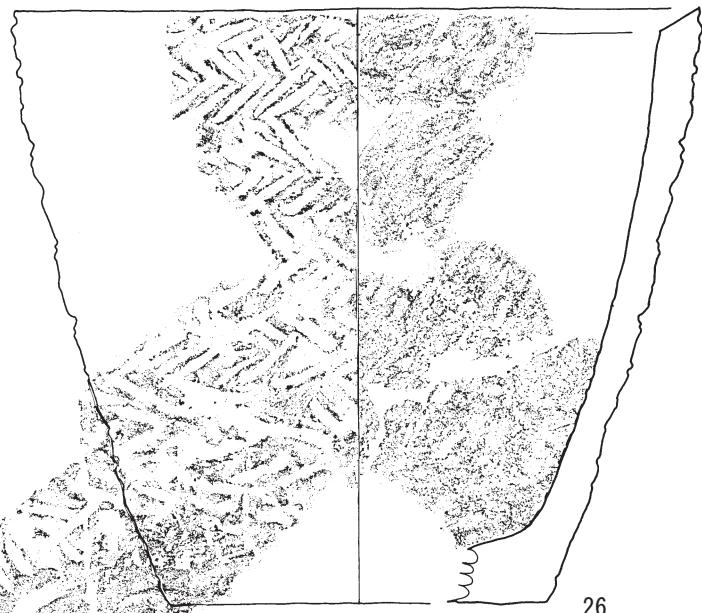




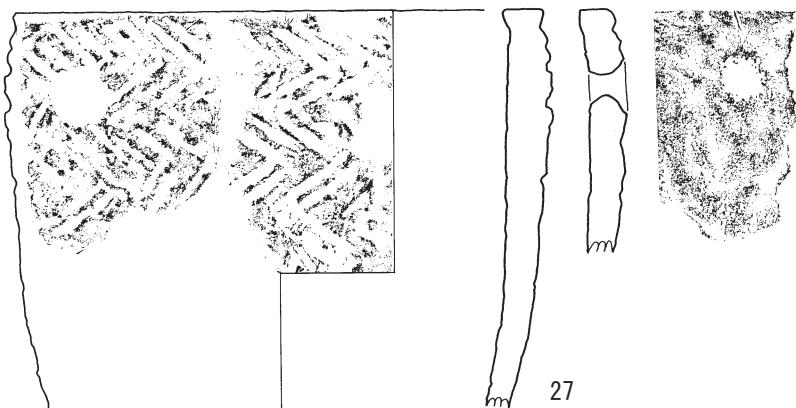
第31図 繩文時代早期 遺物接合図



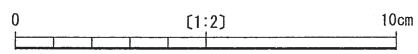
25



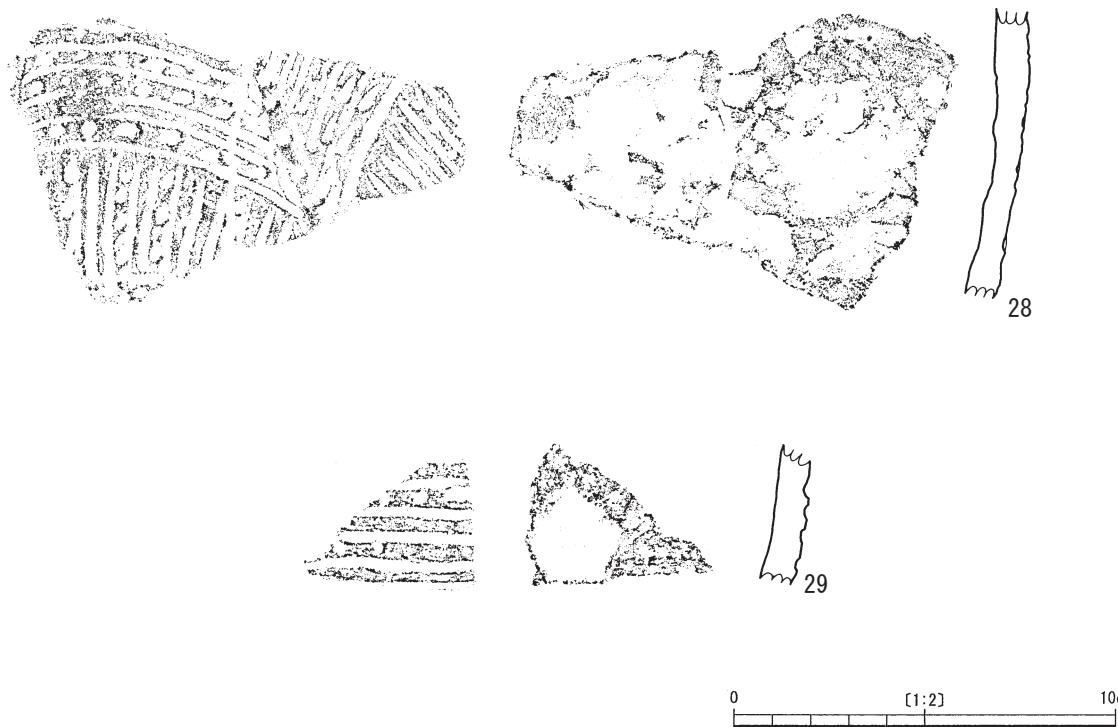
26



27



第32図 繩文時代早期 出土土器(1)



第33図 縄文時代早期 出土土器（2）

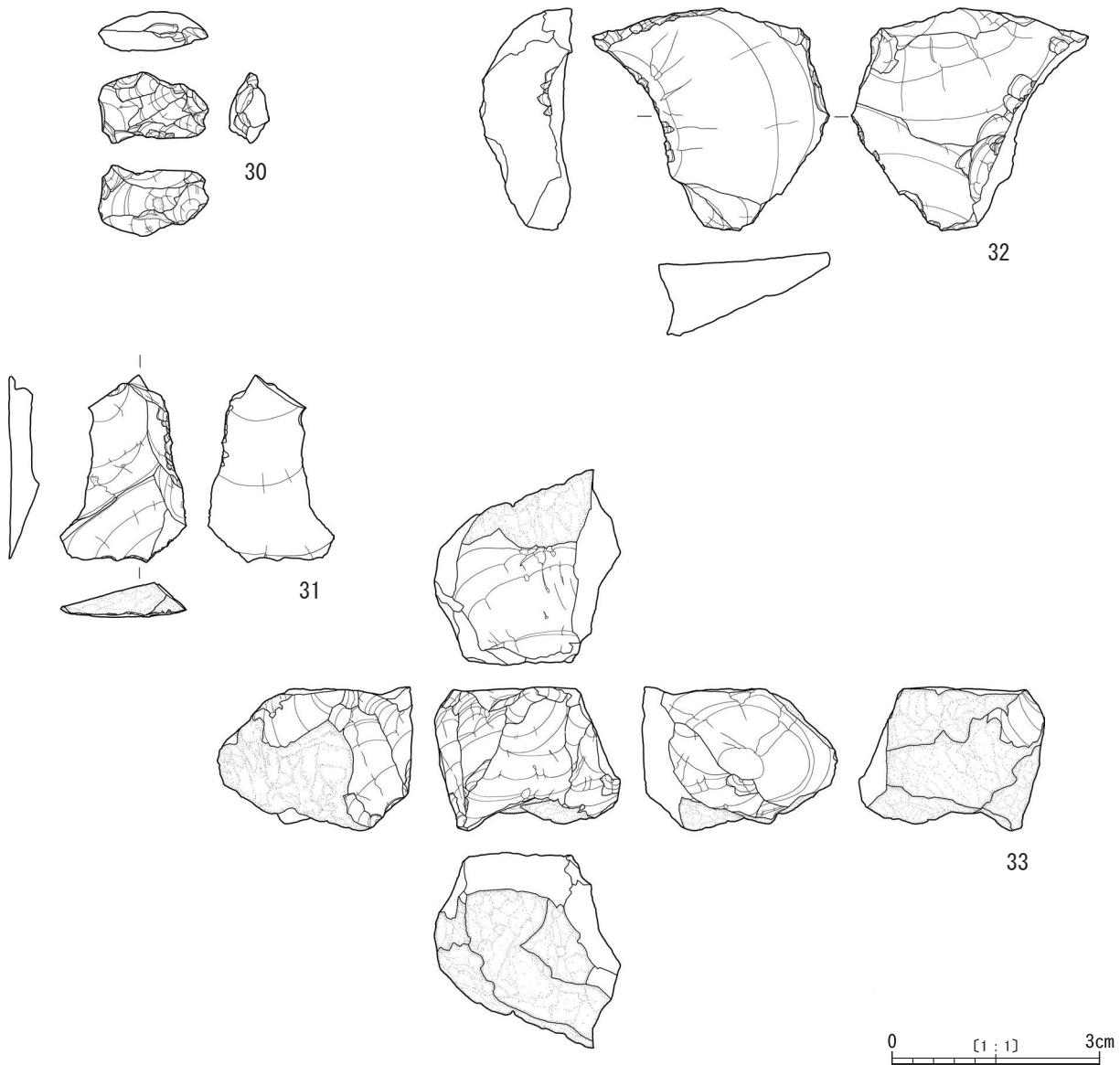
上縁下縁においては敲打痕が側面に沿って残っている。表面は擦痕がほとんど確認できないが、顕著な磨面を呈することから磨石として使用された可能性が高い。

有溝砥石（第36図38）

38は、有溝砥石である。素材は、砂岩である。砥面は4面すべてにある。表面には、真っ直ぐに伸びる幅広

第6表 縄文時代早期 出土土器観察表

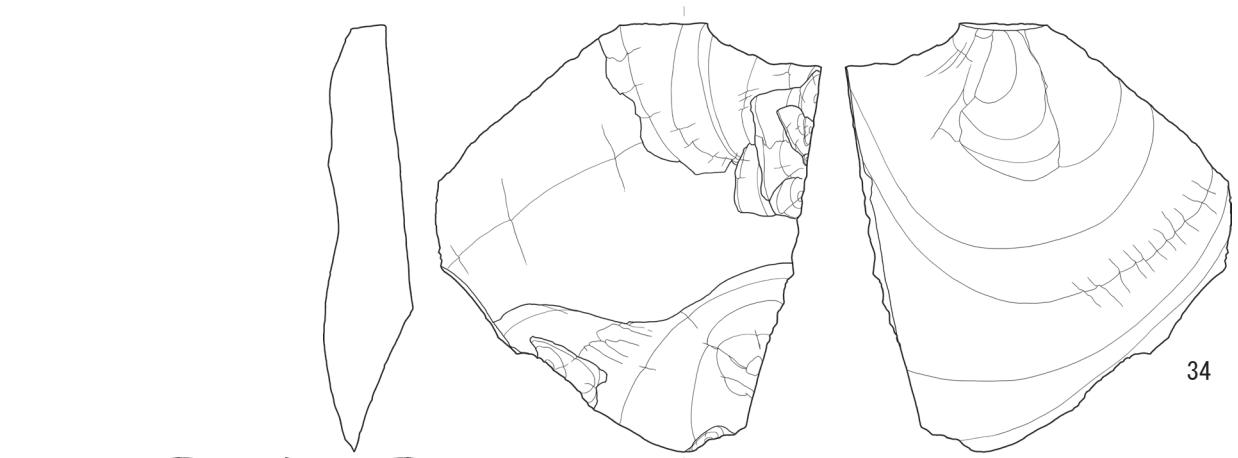
挿図番号	掲載番号	出土区	取上番号	層位	器種	部位	主文様・調整		色調		焼成	胎土				備考	
							外面	内面	外面	内面		石英	長石	角閃石	砂礫	小礫	
32	25	D-11	325	VIIおちこみ	深鉢	胴部	条痕、貝殻刺突文	ナデ	橙	にぶい橙	良好	○	○	○	○	○	砂礫1mm 小礫1~2mm
	26	E-8	689他	VIIおちこみ	深鉢	口縁~底部	短沈線による羽状文	ナデ	にぶい褐色	にぶい黄褐	普通	○	○	-	○	○	口径(18.0cm) 底径(10cm) 器高15.6cm 砂礫1~2mm 小礫1~3mm
	27	E-9	459他	VIIおちこみ	深鉢	口縁~胴部	短沈線による羽状文	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	やや不良	○	-	○	○	○	補修孔有り 口径(13.8cm) 砂礫1~6mm 小礫1~5mm
33	28	E-9	416他	VII	-	胴部	ヘラ状工具による刺突貼付突帯	ナデ	橙	にぶい褐色	普通	○	○	○	○	○	砂礫1~2mm 小礫1~5mm
	29	E-10	455	XA	-	胴部	貝殻条痕、貝殻刺突文	ナデ	橙	にぶい褐色	良好	○	○	○	○	○	砂礫2~3mm 小礫1~5mm



第34図 縄文時代早期 出土石器（1）

第7表 縄文時代早期 出土石器観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	取上番号	器種	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
34	30	E - 9	VIII	261	楔形石器	黒曜石 II A	14.9	8.8	5.4	0.7	
	31	D - 6	VIII	535	使用痕剥片	安山岩 A	26.1	16.6	4.5	1.5	摩滅あり
	32	D - 12	VII	165	二次加工剥片	安山岩 A	32.2	24.5	12.4	9.0	
	33	E - 12	VII	206	石核	黒曜石 I	20.0	25.1	27.8	17.0	
35	34	E - 12	VII	189	剥片	ホルンフェルス II	56.0	48.0	13.4	35.0	
	35	E - 12	VII	207	剥片	砂岩	91.2	57.4	18.5	73.0	
	36	E - 12	VII	215	剥片	玉隨 II	18.2	25.1	9.3	4.2	
	37	D - 11	VII	6	磨石	安山岩 B	110.2	93.8	56.0	887.0	
36	38	E - 10	VII	242	有溝砥石	砂岩	126.4	75.0	52.5	684.0	

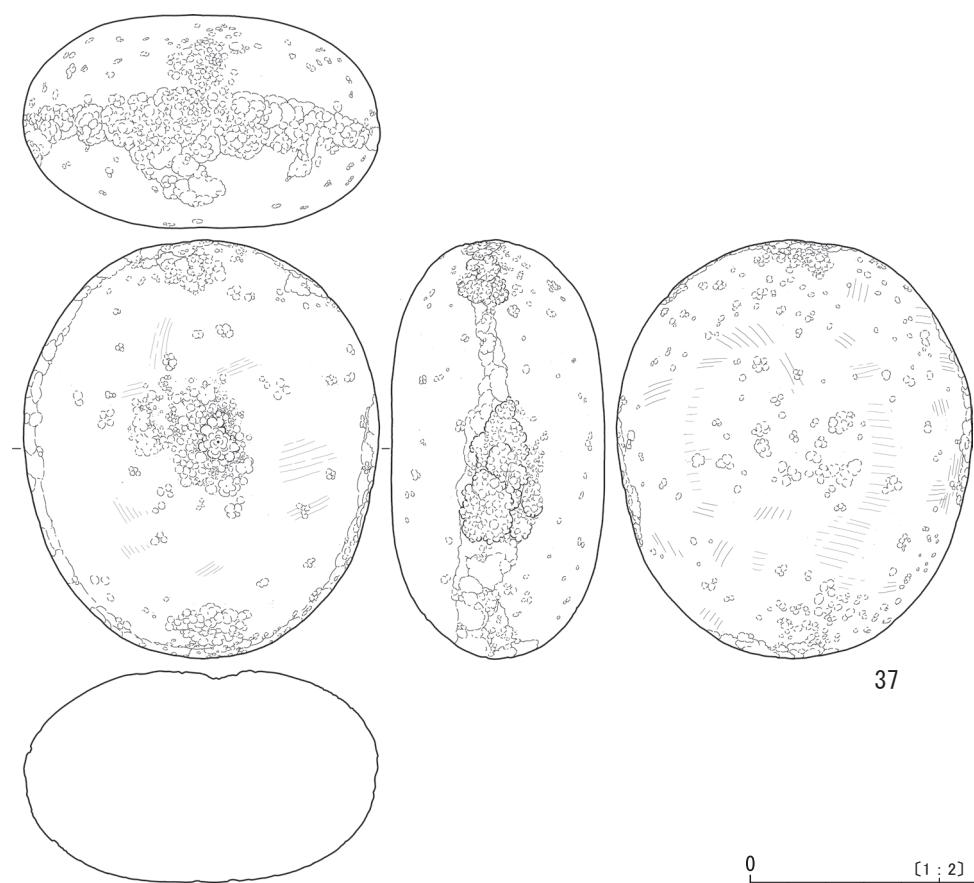


34

35

36

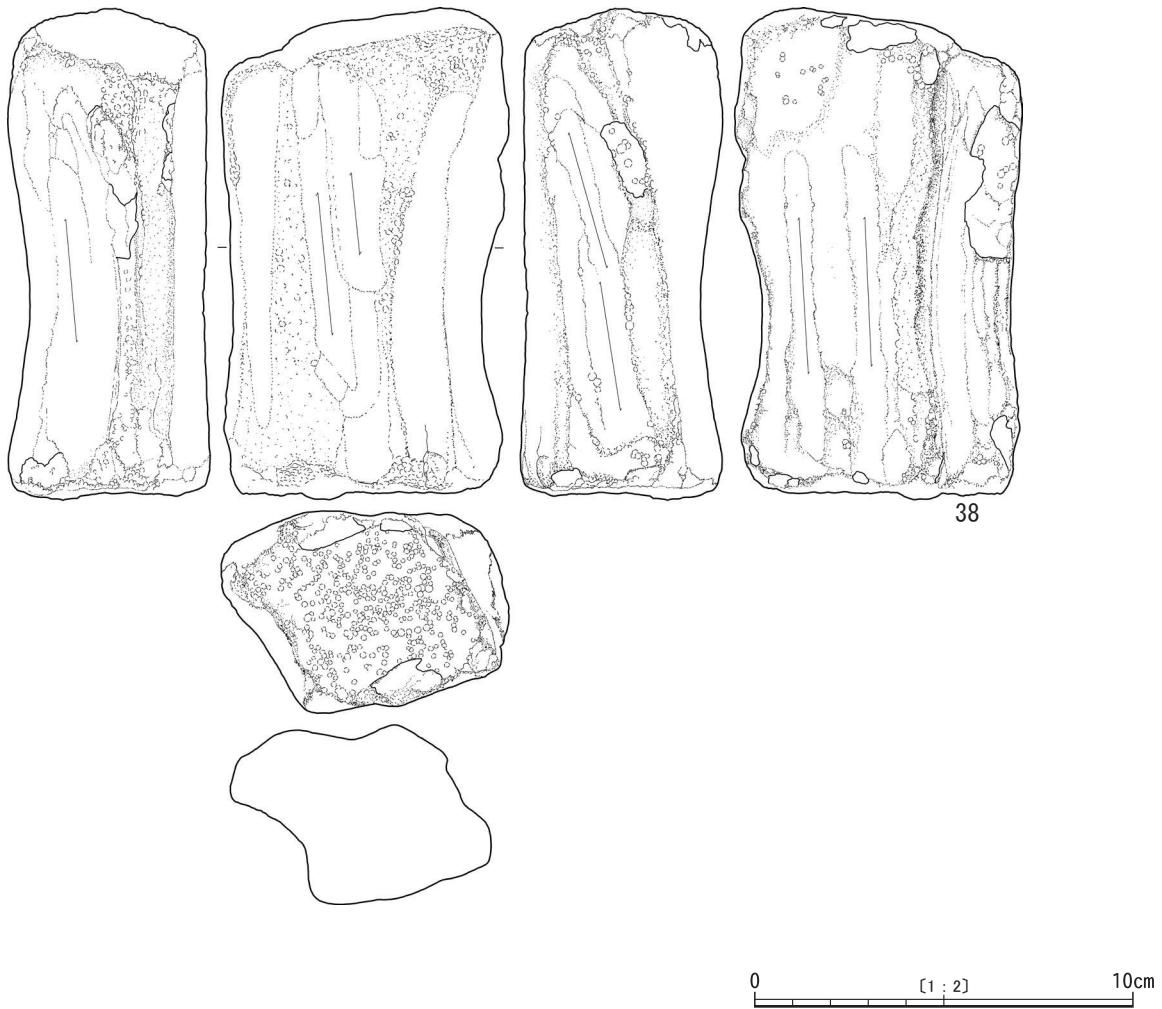
0 [1 : 1] 3cm
34 · 36



37

0 [1 : 2] 10cm
35 · 37

第35図 繩文時代早期 出土石器（2）



第36図 縄文時代早期 出土石器（3）

い逆三角形の溝状の使用部分が2条確認できる。溝の形状から、磨製石器や骨角器等の研磨に用いられたのではないかと考えられる。また左側面には、深いU字形の溝状の使用部分が確認できる。溝の形状から、玉や骨角器等を研磨するのに使用されたのではないかと考えられる。右側面や裏面においては、2条ずつ浅いU字形の溝状の使用部分が確認できる。この2面も玉等の研磨に使用されたのではないかと推測される。

第3節 縄文時代後期・晩期の調査

1 調査の概要

該当層は確認できなかったが、縄文時代後期に該当する土器が1点、縄文時代晩期に該当する土器が10点出土した。出土数も少ないため、ここでは縄文時代後期・晩期としてまとめる。

（1）遺物

縄文時代後期の土器は、1点出土した。（第37図39）

39は、胴部の土器片である。二重沈線の間に幅広の刺

突が施されており、胎土には3～5mmの白色粒が目立っている。

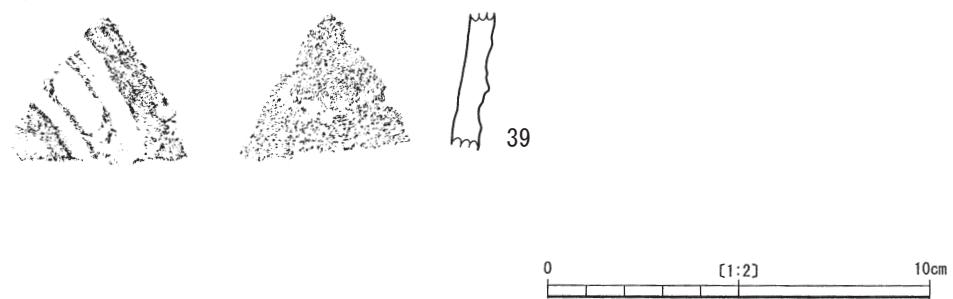
縄文時代晩期の土器片は、10点出土し、すべてを掲載している。（第38図40～第39図49）

40は、深鉢の口縁部である。口縁がやや内傾する器形で、内面、外面ともに丁寧なナデを施している。口縁部は指で押さえながら形を整えており、ややくぼみがある。41は、深鉢の口縁部である。真っ直ぐ立つが口縁端部が少し内に入る。外面はナデ調整を行い、内面は貝殻条痕後に丁寧なナデ調整を行っている。42は、鉢の口縁部である。やや内湾する器形で、厚みがある。内面、外面ともにナデ調整を行っているが、外面はナデ調整後ケズリを施している。外面下部に炭化物が付着している。43は、鉢の口縁部である。内面、外面ともに貝殻条痕を施している。貝殻で調整を行った後、口縁部を指で整えている。厚みは薄く、色調は明るく焼成も良好である。44は、浅鉢の胴部である。内面、外面ともに貝殻条痕を施した後、ナデ調整を丁寧に行っている。45は、深鉢の胴部である。

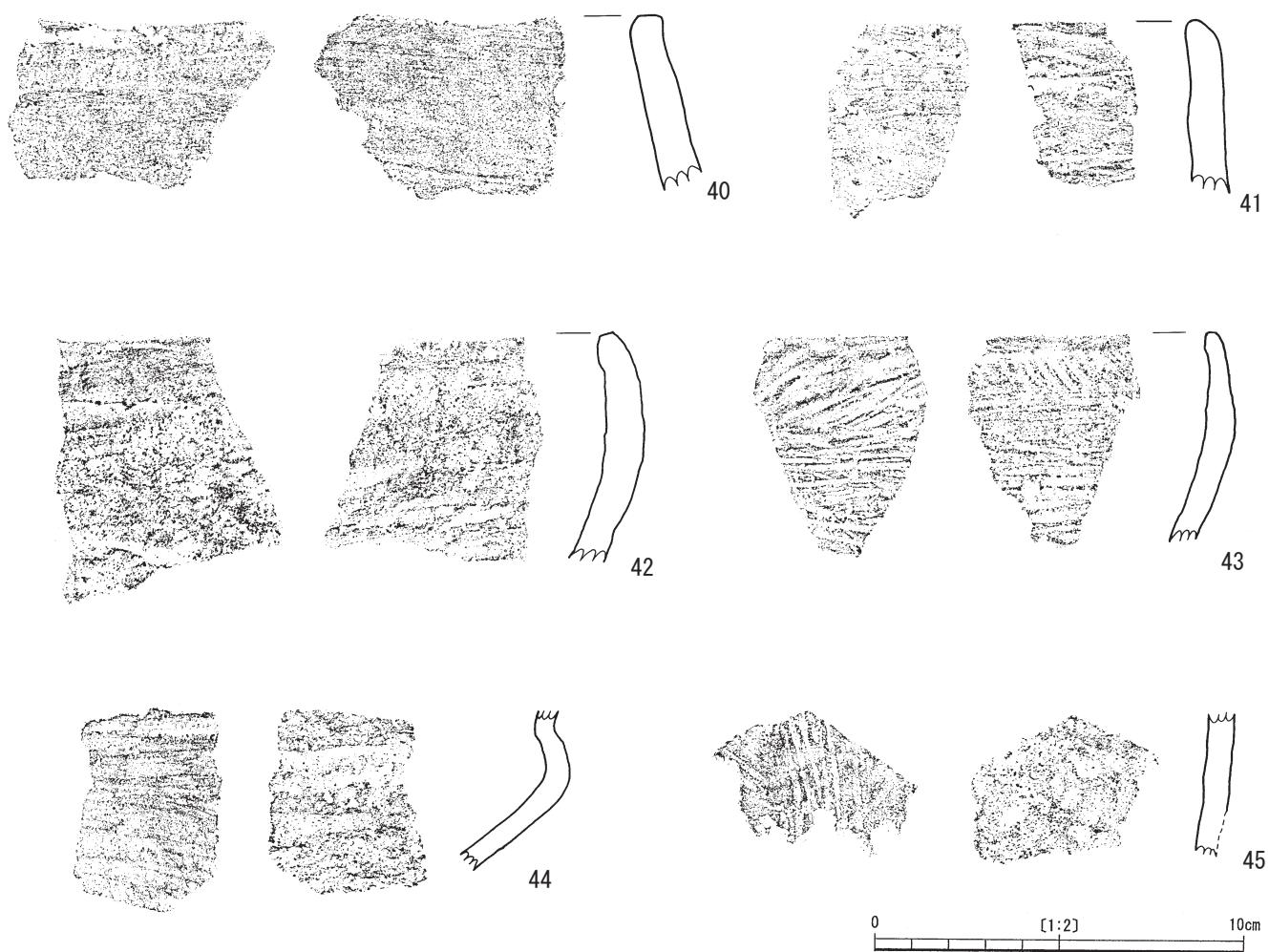
内面はナデ調整を行っており、小礫が表面に観察できる。

外面は縦位に貝殻条痕を施している。46は、深鉢の胴部である。内面、外面ともに横位に貝殻条痕を施しているが、外面は条痕の幅が広くはっきりとしている。47は、鉢の胴部である。外面は、丁寧に貝殻条痕が施されている。屈折部分で条痕の向きが変化し、下部では横位に、上部では斜位に施されている。内面は、貝殻条痕後

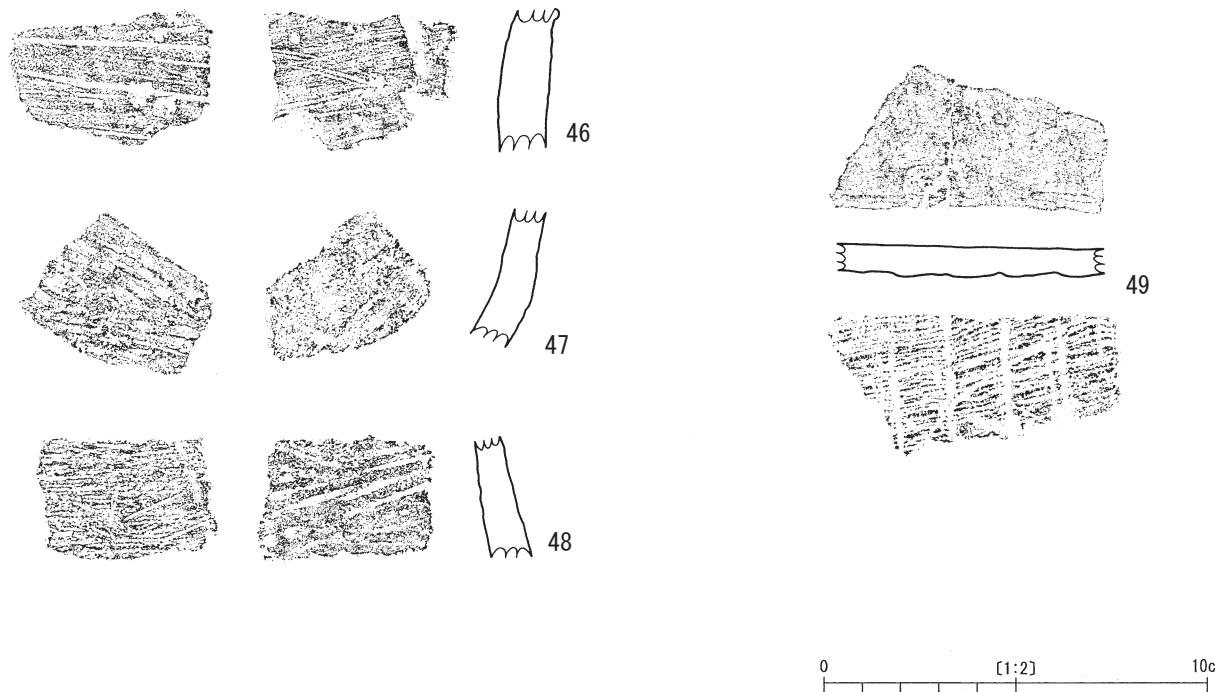
に丁寧なナデが施されている。48は、器種は不明であるが、胴部片である。外面は、主として横位に幅の狭い丁寧な貝殻条痕が施されている。内面は、幅の広い貝殻条痕が施されている。49は、組織痕土器の底部である。内面はナデ調整を行い、丁寧に磨かれ黒色である。外部は、編布の痕が明瞭に残っている。



第37図 縄文時代後期 出土土器



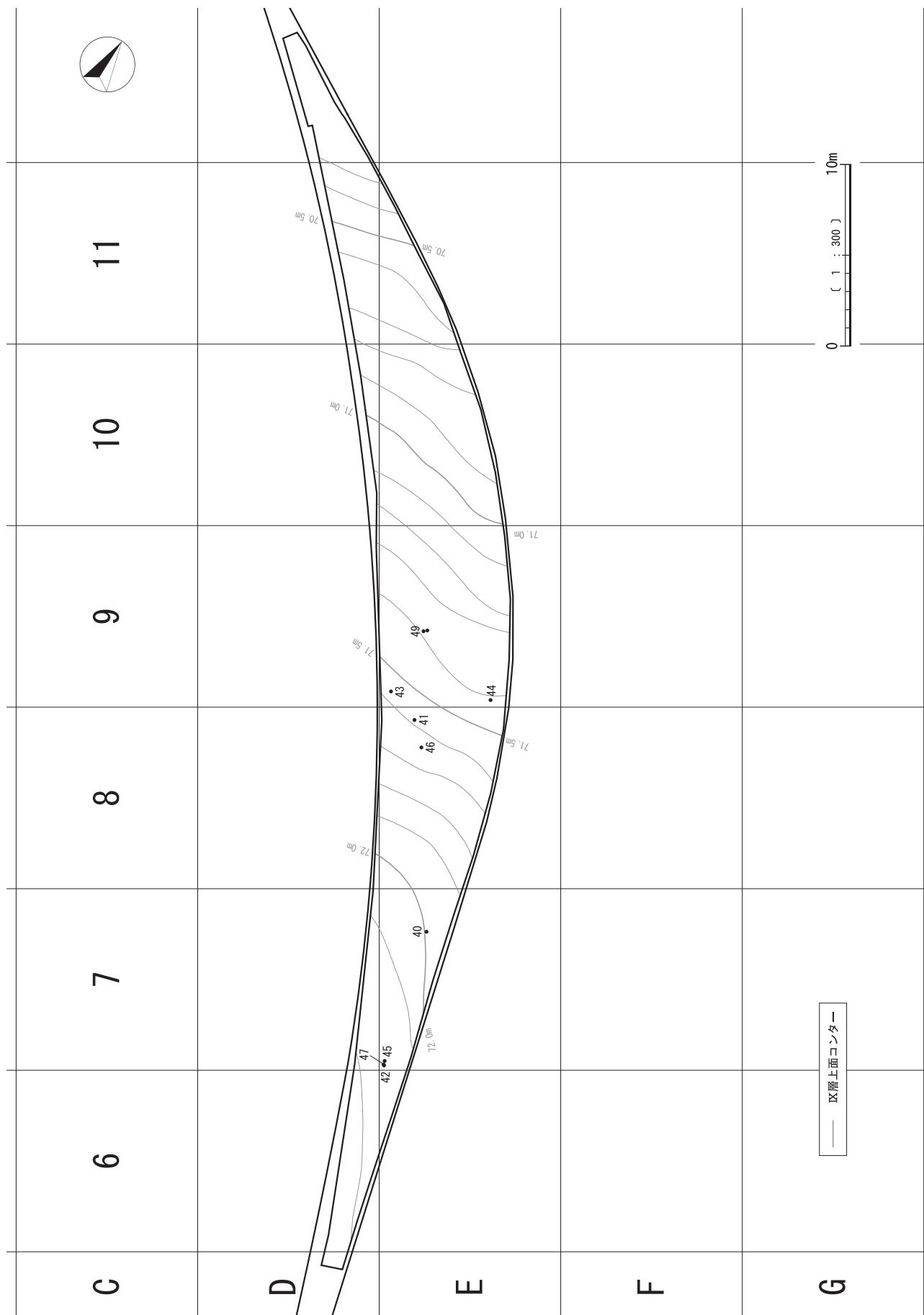
第38図 縄文時代晩期 出土土器（1）



第39図 繩文時代晩期 出土土器（2）

第8表 繩文時代後期・晩期 出土土器観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	取上番号	層位	器種	部位	主文様・調整		色調		焼成	胎土				備考	
							外面	内面	外面	内面		石英	長石	角閃石	砂礫		
37	39	-	一括	-	-	胴部	二重沈線、刺突	ナデ	橙	にぶい褐色	普通	○	○	○	○	○	砂礫3~5mm 小礫1mm
38	40	E-7	507	VIII	深鉢	口縁	ナデ	ナデ	黄灰	黄褐	普通	○	○	○	○	-	砂礫3~6mm
	41	E-8	70	VII	深鉢	口縁	ナデ	貝殻条痕、ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	普通	○	○	-	-	-	砂礫2~3mm 小礫1~3mm
	42	E-7	137	VII上	鉢	口縁	ナデ、ケズリ	ナデ	灰褐	にぶい褐	良好	○	○	○	○	○	砂礫4~6mm 小礫2mm・炭化物付着
	43	E-9	55	VII	鉢	口縁	貝殻条痕	貝殻条痕	橙	にぶい褐	良好	○	○	○	○	-	砂礫1~2mm
	44	E-9	67	V	浅鉢	胴部	貝殻条痕、ナデ	貝殻条痕、ナデ	にぶい黄橙	灰黄褐	良好	○	○	○	-	○	小礫1~3mm
	45	E-7	526	VIIおちこみ	深鉢	胴部	貝殻条痕	ナデ	黒	灰黄褐	普通	○	○	○	○	○	砂礫1~2mm 小礫1~3mm
39	46	E-8	76	VII	深鉢	胴部	貝殻条痕	貝殻条痕	灰黄褐	にぶい褐	普通	○	○	-	○	○	砂礫1~3mm 小礫1~2mm
	47	E-7	523	VII	鉢	胴部	貝殻条痕	貝殻条痕、ナデ	灰黄褐	黑褐	普通	○	○	○	○	○	砂礫2~4mm 小礫1mm
	48	SE001	1	-	-	胴部	貝殻条痕	貝殻条痕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	普通	○	○	○	○	○	砂礫1~2mm 小礫1mm
	49	E-9	203他	VI下	組織痕土器	底部	編布痕	ナデ、ミガキ	橙	黒	普通	○	○	○	-	-	小礫1mm



第40図 繩文時代後期・晩期 遺物出土状況図

第4節 弥生時代の調査

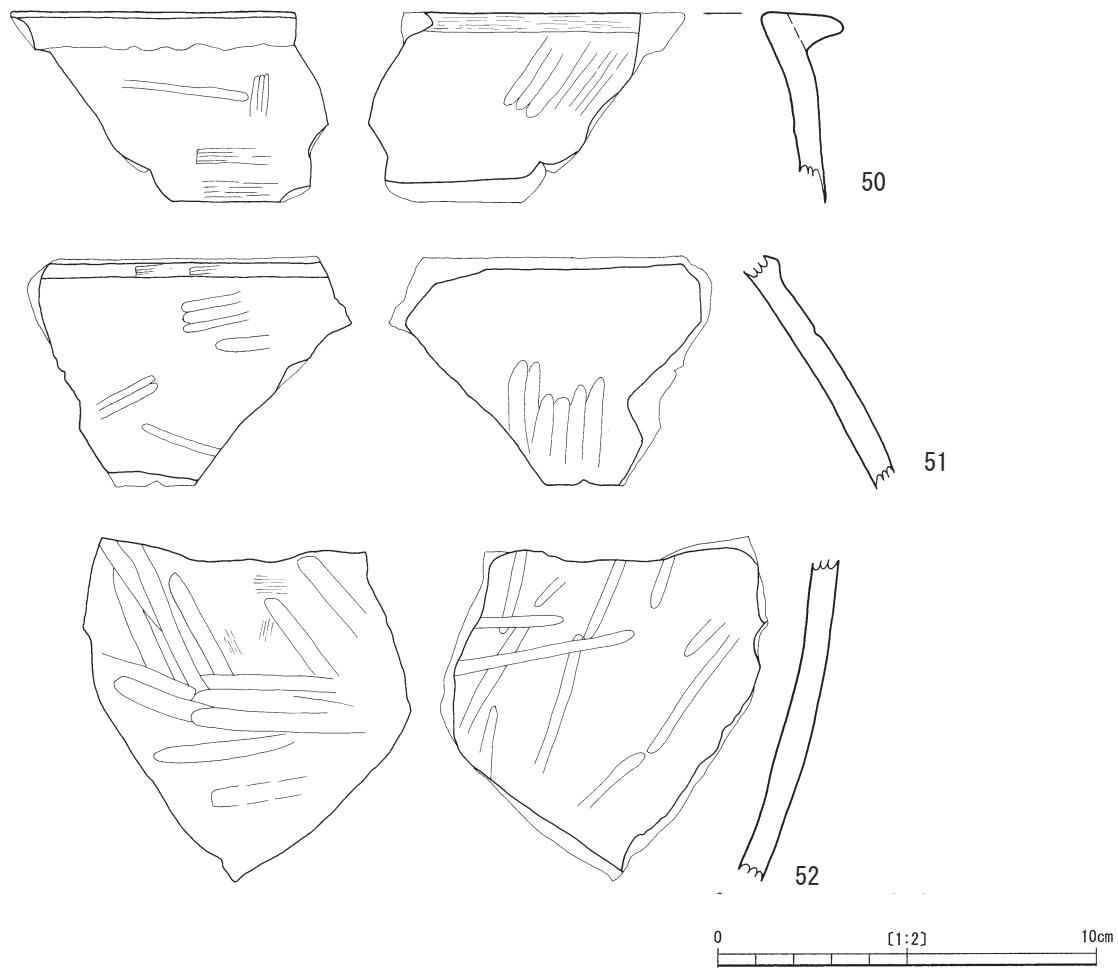
1 調査の概要

該当層は確認できなかったが、D・E-10 区付近のVI層からVII層にかけて弥生時期に該当する土器が数点出土した。

(1) 遺物 (第41図 50~52)

弥生時代の遺物は、土器片が13点出土し、そのうち3点を掲載する。3点ともに外面に煤が付着している。

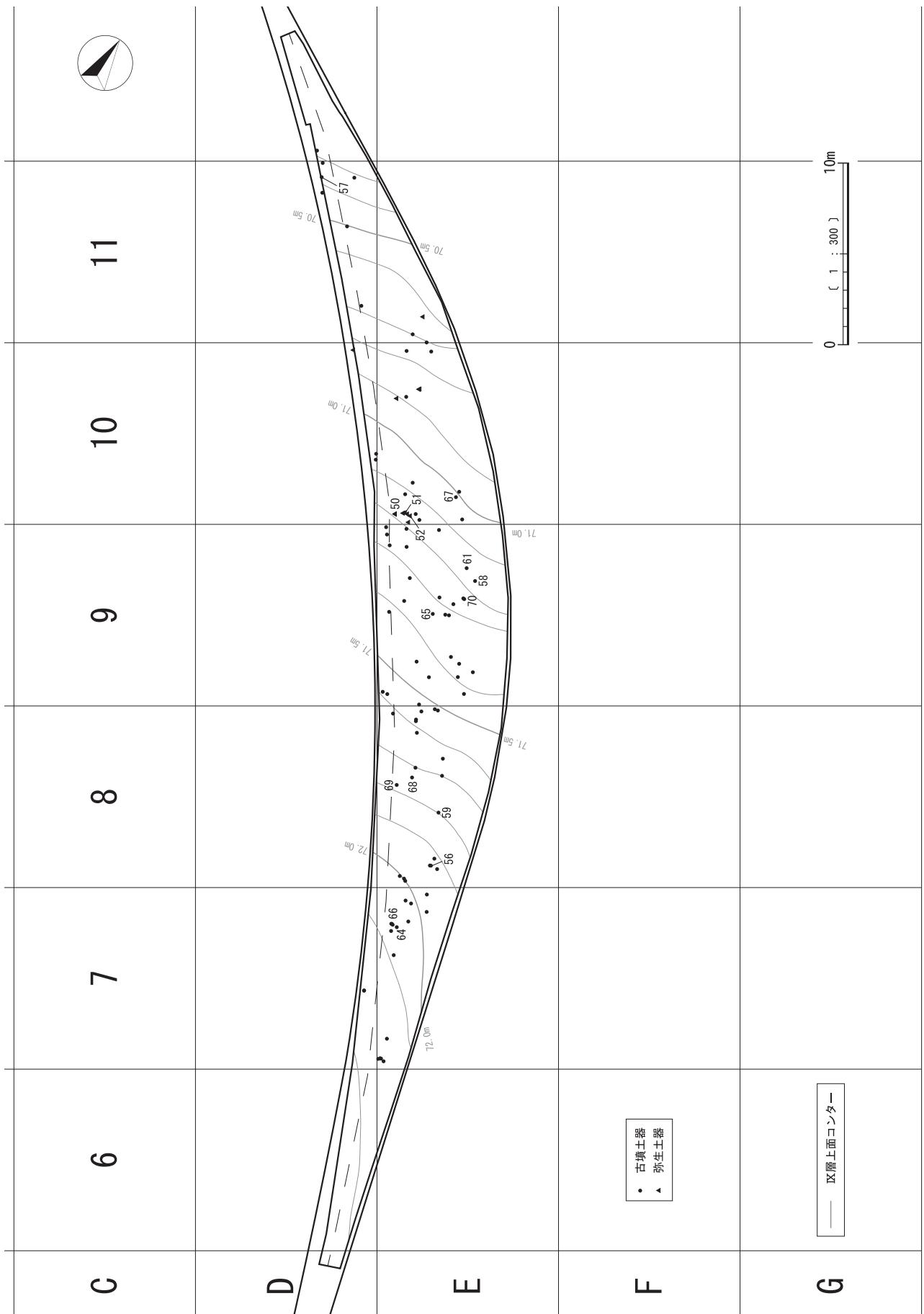
50は、L字状の突帯をもつ口縁部で甕形土器である。内面はナデ調整を行い、外面はナデ調整後のミガキが確認できる。51は、破片の上部に突帯部分が確認できる。壺形土器の頸部から胴部へと変化する部位だと考えられる。内面、外面ともに丁寧なナデ調整後、磨いている。52も、内面、外面ともにナデ調整の後、ミガキを行っている。器種は、甕形土器であると考えられるが、51と同一個体である可能性も残る。



第41図 弥生時代 出土土器

第9表 弥生時代 出土土器観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	取上番号	層位	器種	部位	主文様・調整		色調		焼成	胎土				備考	
							外面	内面	外面	内面		石英	長石	角閃石	砂礫	小礫	
41	50	E-10	58他	VI	-	口縁	ナデ ミガキ	ナデ	にぶい橙	明褐灰	普通	○	○	○	-	○	小礫1~2mm スス付着
	51	E-10	59	VI	壺	胴部	ナデ ミガキ	ナデ ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	○	-	-	○	○	砂礫1~2mm 小礫1~2mm スス付着
	52	E-10	183	VII	-	胴部	ナデ ミガキ	ナデ、ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	○	-	-	○	○	砂礫2~3mm 小礫1~2mm スス付着



第42図 弥生・古墳時代 遺物出土状況図

第5節 古墳時代の調査

1 調査の概要

試掘調査の結果を踏まえ、本調査では、表土からVI層上面まで重機による掘削を行った。VI層上面で遺構が検出されたため、一部VI層中とVII層以下については鋤簾等による人力掘削を基本として遺構・遺物の検出に努めた。検出された古墳時代の遺構は、調査区南側における竪穴建物跡が1基であり、遺物は調査区全体から出土している。調査区の旧地形は、調査区南側から竪穴建物跡が検出された付近までが高く、北側へ向かうにつれて緩やかに低くなっている。

(1) 遺構

当該時期と判断した検出遺構は、竪穴建物跡1基である。遺構内から古墳時代の土器が出土したため、同時期の遺構と判断した。

調査については、2つの土層ベルトを設置し、長辺を主軸にして4分の1ずつ慎重に掘削した。その後、2方向からの土層断面を実測した後、完掘した。

竪穴建物跡（第43図）

E-7・8区のVI層上面において検出した。埋土から成川式土器が出土している。建物跡の西側に約70cmの先行トレンチを入れたところ、調査区西側の土層断面に建物跡が延びていることが確認された。搅乱等もあり、遺構としての全容は判然としない。

検出規模は、長軸290cm・短軸180cm・検出面から深さは20cmで、平面形は方形を呈する。一部に壁帶溝と思われる溝と硬化面を確認しているが、柱穴は確認することができなかった。

(2) 竪穴建物跡内出土遺物（第45図53～第46図55）

竪穴建物跡内から土器片が43点出土している。小片が多く、そのうち接合した3点を掲載する。53は、口縁部から胴部までの土器である。口径は28cmで厚みは薄く、色調は明るい黄褐色を呈し、胎土には2～7mmの砂礫を含んでいる。内面は、ケズリを行った後ナデ調整を施している。外面の下部は、上から下へ幅1cm程度の工具でケズリを行った後、ナデ調整を施している。頸部



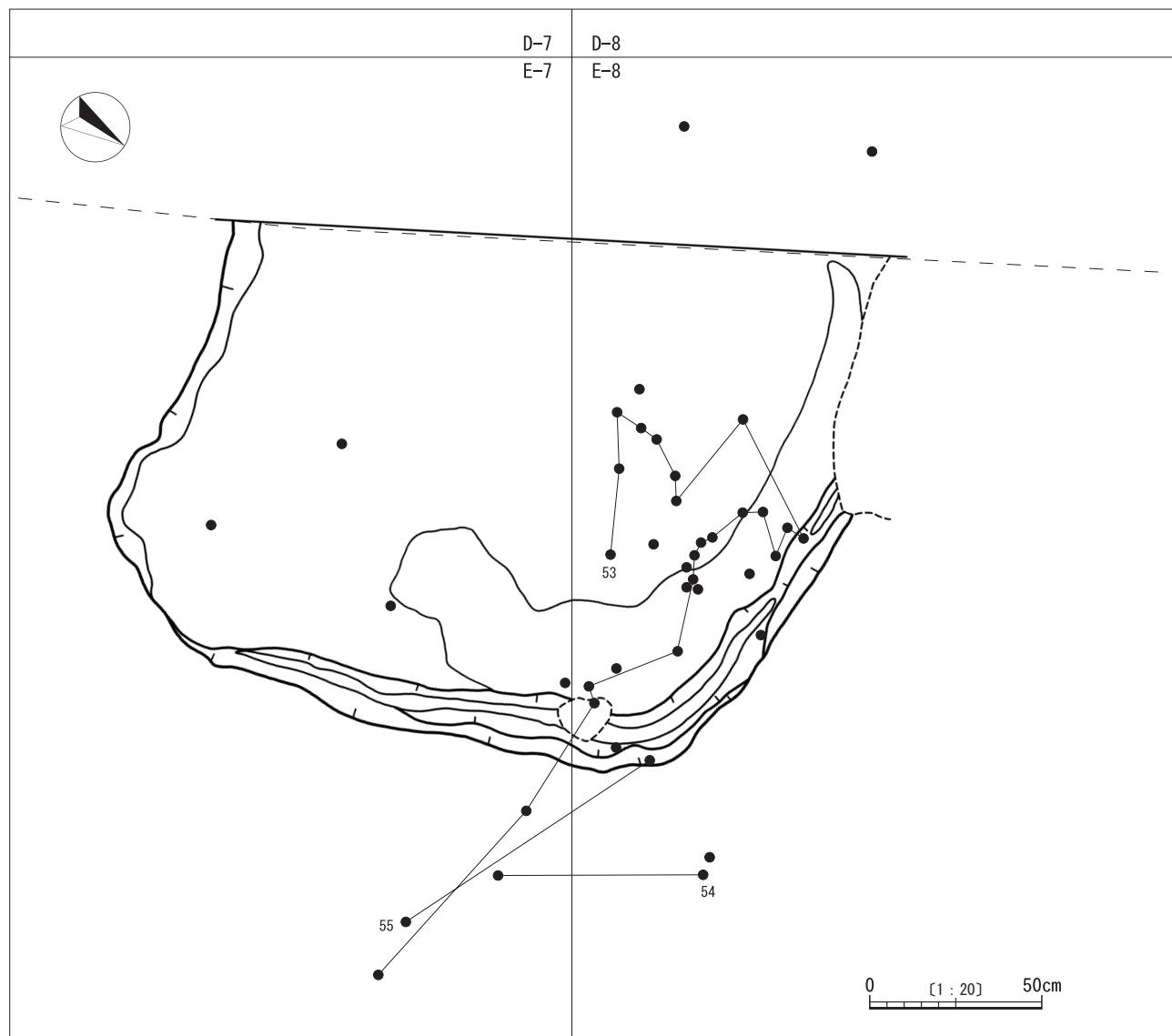
第43図 竪穴建物跡

付近になると、ナデ調整が特に丁寧に行われている。頸部はハケ目の後、しっかりと指オサエを行っている。頸部から口縁部にかけては、内外ともに指オサエで形を整えている。54は、壺の底部付近の土器片である。焼成は良好で、外面の色調は明るい橙色である。胎土に茶色の小礫を多く含んでいる。内面はナデで調整を行い、外面はケズリ後にナデ調整を行っている。底部付近になると、上から下方向へ調整を行っている。そのため、底部だけ別に作成し、その後成形した可能性も考えられる。55は、54に類似する土器片で、茶色の小礫も同様に含んでいる。壺形土器の胴部から底部の部位だと考えられる。上部内外両面に剥離が見られる。両面ともにナデ調整を行っており、内面は指でナデ調整が施される。

(3) 遺物（第47図56～第50図70）

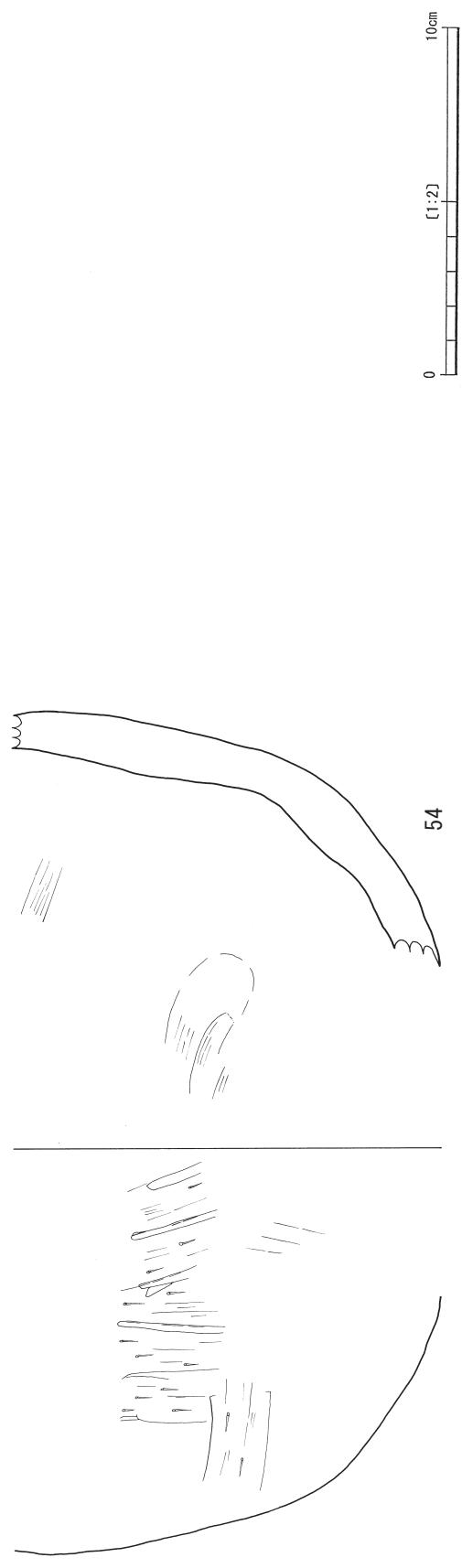
古墳時代の土器は、90点出土している。その多くが小破片である。そのうち15点を掲載する。56から58は甕

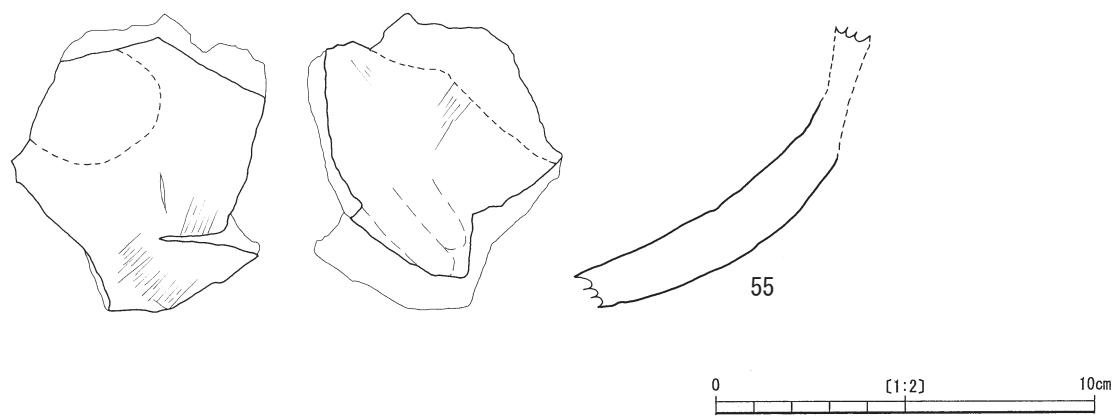
の口縁部の土器片である。56は外面、内面ともに丁寧なナデ調整を行っている。外面のナデ調整は、上から下への2mmほどの調整痕が確認でき、ゆるやかに外反している。57の外面は丁寧なナデ調整を行っている。破片の下部には1cmほどの突帯が付けられ、下部にナデを行った後、上面を押さえながらナデを施している。また突帯に刻みを施している。58は、内外面ともに横位にナデ調整を行っており、やや厚みがある。59は、甕の口縁部付近から頸部にかけての土器片である。外面に煤が付着しており、被熱したと考えられる。60は、口縁部の土器片である。厚みはやや薄く、口唇近くのナデが内外面ともにとても丁寧である。61は、壺の胴部片であり、厚みがある。上部の頸部へと続く部分に突帯を付けた後ナデを行い、突帯下部に刻目を施している。残存部が少ないが、突帯部分に沈線を施しているのが確認できる。62は脚部片であるが、器種は不明である。底径は12.6cmである。



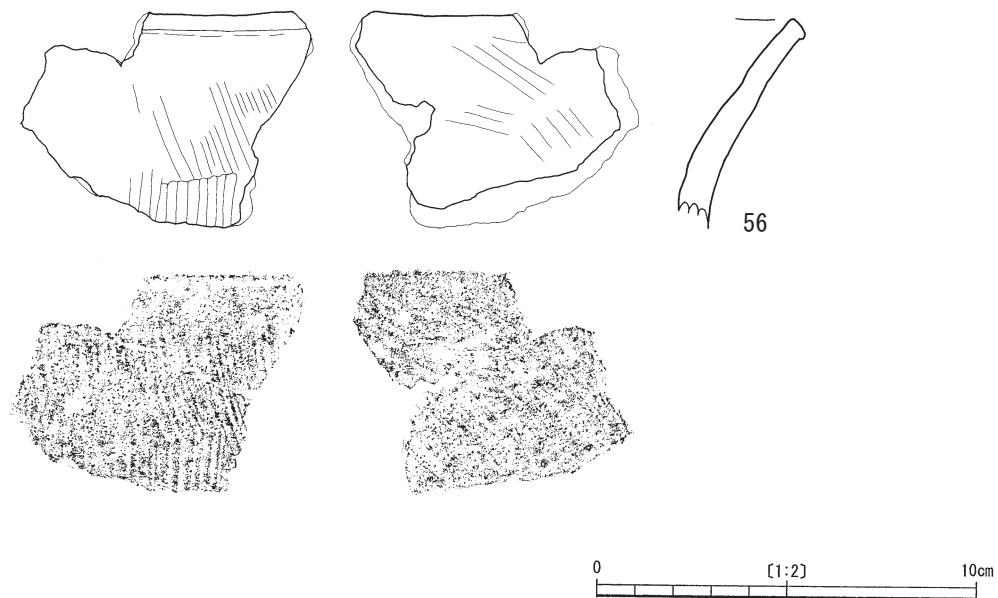
第44図 積穴建物跡内 出土土器接合図

第45図 穹穴建物跡内 出土土器 (1)





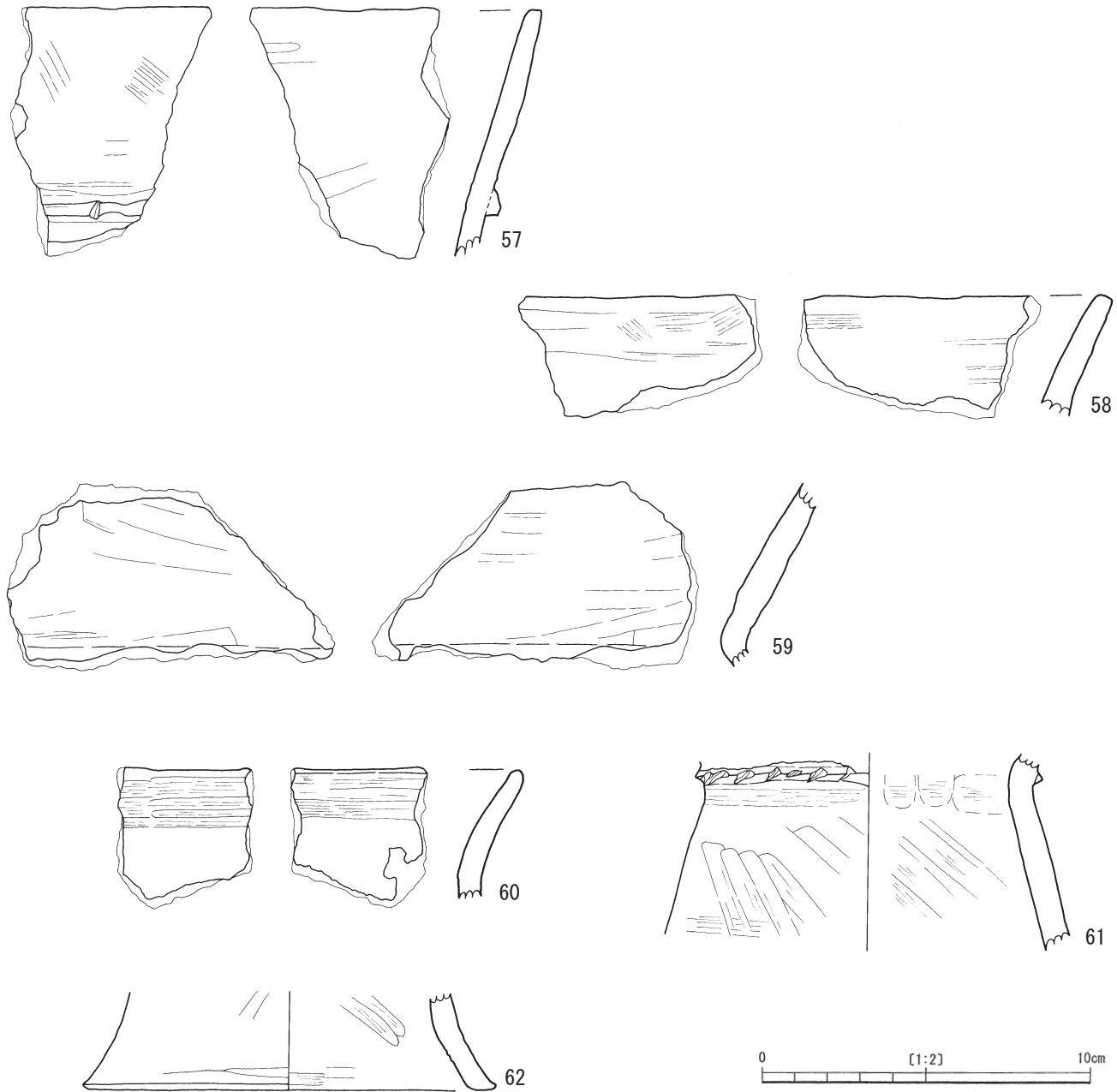
第46図 墅穴建物跡内 出土土器（2）



第47図 古墳時代 出土土器（1）

第10表 墀穴建物跡内 出土土器観察表

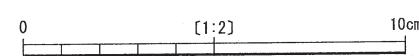
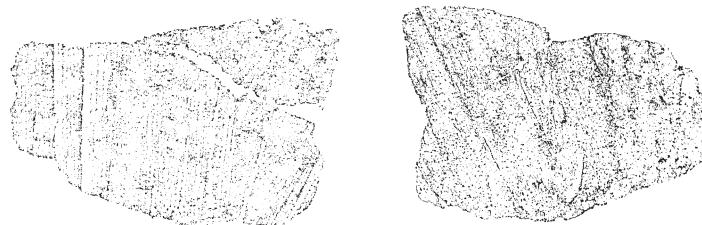
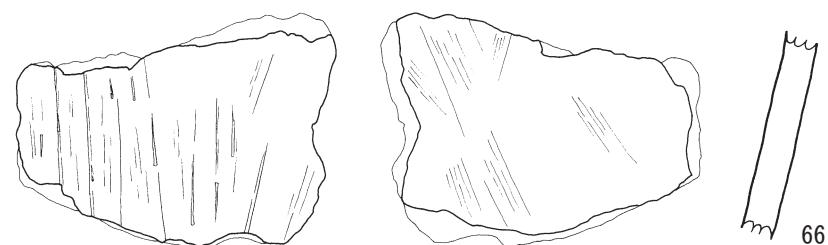
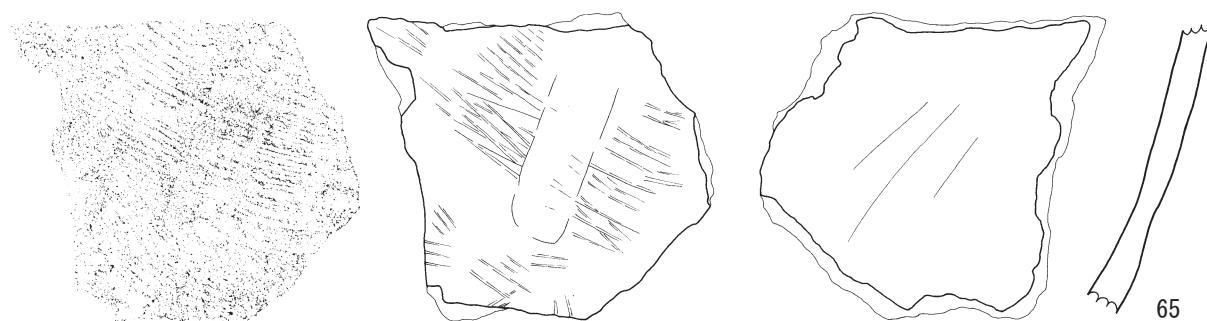
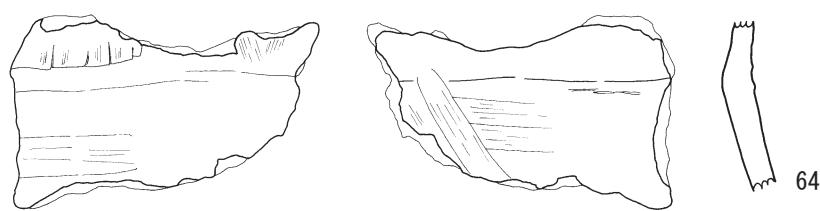
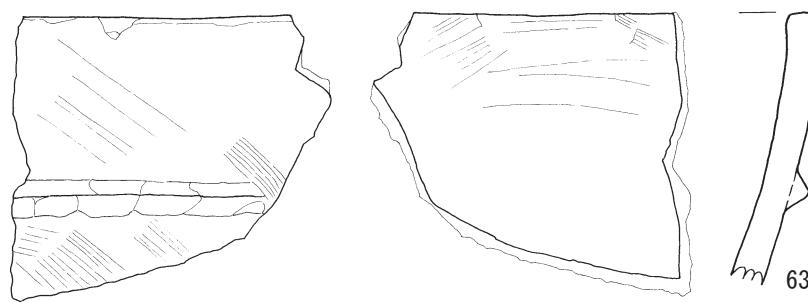
挿図番号	掲載番号	出土区	取上番号	層位	器種	部位	主文様・調整		色調		焼成	胎土				備考	
							外面	内面	外面	内面		石英	長石	角閃石	砂礫	小礫	
45	53	E-8	102他	SA001埋土	-	口縁～胴部	ハケ目、工具ケズリ ナデ、指オサエ	ケズリ、ナデ 指オサエ	明黄褐	灰黄褐	普通	○	-	○	○	○	口径 28cm 砂礫 2～7mm 小礫 1～4mm
	54	E-8	122	SA001埋土	壺	底部付近	ケズリ、ナデ	ナデ	橙	にぶい赤褐	良好	○	○	○	○	○	砂礫 2～4mm 小礫 2～8mm
46	55	E-8	127他	SA001埋土	壺	胴部	ナデ	指ナデ	橙	にぶい赤褐	良好	○	○	○	-	○	小礫 1～3mm



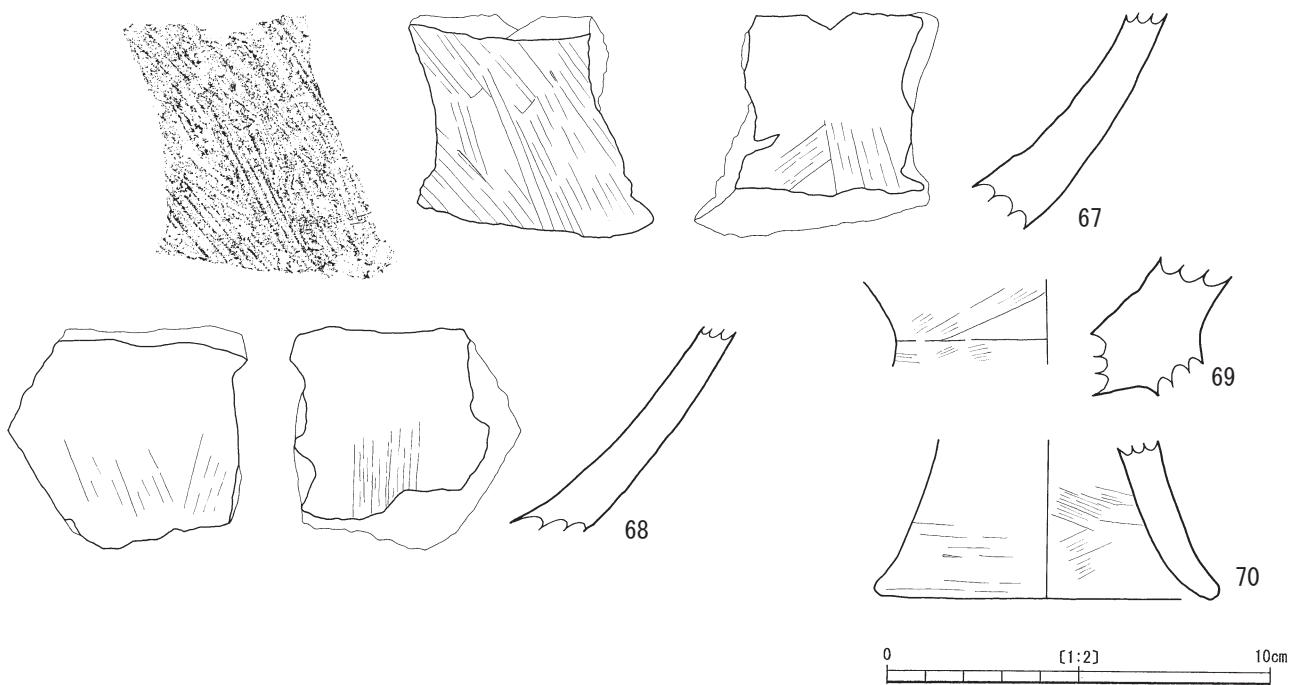
第48図 古墳時代 出土土器（2）

63は、甕の口縁部片である。突帯部分は、ナデを行い付けた後、下部を指でつまみ、形を整えている。64は、甕の頸部から胴部にかけての土器片である。縦からの調整後、横へのナデ調整を行っている。65は、甕の胴部片であり、内面は、丁寧なナデ調整を行っている。外面は、ハケ目を施した後、ナデ調整を行っている。また3~6mm程度の小礫を混ぜ込んで作成している。66は、甕の胴部片であり、内面はナデ調整が行われている。外面はケズリを行っている。白の小礫を含ませており、その石とともに削っており、上から下へのケズリが確認できる。67は、厚みがあり壺の底部付近の土器片と考えられる。色

は浅黄橙で明るい。外面の調整は、縦方向のハケ目である。内面はナデ調整を行い、茶色の小礫を含んでいる。68は、壺の胴部で底部付近の土器片である。下にいくにつれて厚みが出てくる。外面の調整は、ナデを行っているが剥落している。69は、甕の脚部の土器片である。内面はナデ調整後、指オサエを行っている。外面の調整は胴部から脚部へのくびれた部分にケズリ調整を行い、最後に指オサエを行い整えている。70は、甕の脚部の土器片である。底径は9cmで、焼成も良好である。内面は、丁寧なナデ調整を行い、外面は横位にナデ調整を行っている。



第49図 古墳時代 出土土器（3）



第50図 古墳時代 出土土器（4）

第11表 古墳時代 出土土器観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	取上番号	層位	器種	部位	主文様・調整		色調		焼成	胎土				備考
							外面	内面	外面	内面		石英	長石	角閃石	砂礫	
47	56	E-8	511他	VII	甕	口縁部	ナデ	ナデ	橙	にぶい黄橙	普通	○	-	-	○	○ 砂礫2~5mm 小礫1~2mm
48	57	D-11	454	VII	甕	口縁部	刻目突帶, ナデ	ナデ	にぶい黄橙	褐灰	普通	○	-	○	-	○ 小礫1~2mm
	58	E-9	66	V	甕	口縁部	ナデ	ナデ	明黄褐	にぶい黄橙	良好	○	-	○	-	○ 小礫1~4mm
	59	E-8	144	VII	甕	頸部	ナデ	ナデ	橙	にぶい橙	良好	○	○	○	○	○ 砂礫2~3mm 小礫1mm
	60	-	一括	-	甕	口縁部	ナデ	ナデ	灰褐	灰黄褐	普通	○	○	-	-	○ 小礫1~3mm
	61	E-9	40	VI	壺	胴部	刻目突帶, ナデ 指オサエ	ナデ, 指オサエ	橙	にぶい黄橙	良好	○	-	○	○	○ 砂礫1~5mm 小礫1~4mm
	62	-	一括	-	-	脚部	ナデ	ナデ	にぶい赤褐	にぶい黄橙	普通	○	-	○	-	○ 底径12.6cm 小礫1~3mm
49	63	-	一括	-	甕	口縁部	突帶 ナデ	ナデ	にぶい黄橙	橙	良好	○	-	○	-	○ 小礫1mm
	64	E-7	487	VII	甕	胴部	ナデ	ナデ	褐灰	にぶい黄橙	良好	○	-	○	○	○ 砂礫2~3mm 小礫1~2mm
	65	E-9	47	VI	甕	胴部	ハケ目, ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	普通	○	-	-	-	○ 小礫3~6mm
	66	E-7	485他	VII	甕	胴部	ケズリ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	○	-	○	○	○ 砂礫2~7mm 小礫2~6mm
50	67	E-10	37	VI	壺	胴部 (底部付近)	ハケ目	ナデ	浅黄橙	にぶい黄橙	良好	○	-	-	○	○ 砂礫2~4mm 小礫1mm
	68	E-8	86	VIII	壺	胴部	ナデ	ナデ	橙	にぶい橙	普通	○	○	○	-	○ 小礫2~3mm
	69	E-8	85	VI	甕	脚部	ケズリ, 指オサエ	ナデ, 指オサエ	にぶい橙	にぶい橙	普通	○	-	○	○	○ 砂礫1~3mm 小礫1~3mm
	70	E-9	42	VI	甕	脚部	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	良好	○	-	-	○	- 底径9cm 砂礫2~3mm

第5章 自然科学分析

下桃木渡瀬遺跡内で検出された礫群から出土した礫付着炭化物について放射性炭素年代測定を委託した。以下にその分析結果を掲載する。なお、報告書刊行における遺構番号名の変更に伴い、分析時の号名も報告書と同様に変更している。また炭素・窒素安定同位体比分析（炭化物の給源推定）も試みたが、必要量不足により測定不可能だった。

放射性炭素年代測定（AMS 測定）

株式会社 古環境研究センター

1 はじめに

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素 (^{14}C) の濃度が放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土器付着炭化物などが測定対象となり、約5万年前までの年代測定が可能である（中村、2003）。

2 試料と方法

試料は、礫（No.1）に付着した炭化物である。表1に試料の詳細および前処理・調整法を示す。測定は加速器質量分析法（AMS法：Accelerator Mass Spectrometry）で行った。なお、試料が微量なことからセメンタイト化による微量測定を試みた。

3 測定結果

AMS法によって得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素 (^{14}C) 年代および曆年代（較正年代）を算出した。表1にこれらの結果を示し、図1に曆年較正結果（較正曲線）を示す。なお、No.2は炭素量不足により測定不可であった。

(1) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を -25 ‰ に標準化することで同位体分別効果を補正している。

(2) 放射性炭素 (^{14}C) 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、現在（AD 1950年基点）から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は5730年であるが、国際的慣例によりLibbyの5568年を使用している。付記した統計誤差（ \pm ）は 1σ （68.2%確率）である。 ^{14}C 年代値は下1桁を丸めて表記するのが慣例であるが、曆

年較正曲線が更新された場合のために下1桁を丸めない曆年較正用年代値を併記した。

(3) 曆年代（Calendar Years）

放射性炭素 (^{14}C) 年代を実際の年代値に近づけるために、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動や ^{14}C の半減期の違いを較正している。曆年代較正には、年代既知の樹木年輪の詳細な ^{14}C 測定値および福井県水月湖の年縞堆積物データなどにより作成された較正曲線を使用した。較正曲線のデータはIntCal 20、較正プログラムはOxCal 4.4である。

曆年代（較正年代）は、 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した曆年代の幅で表し、OxCalの確率法により 2σ （95.4%確率）で示した。較正曲線が不安定な年代では、複数の値が表記される場合もある。（）内の%表示は、その範囲内に曆年代が入る確率を示す。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布、二重曲線は曆年較正曲線を示す。

4 所見

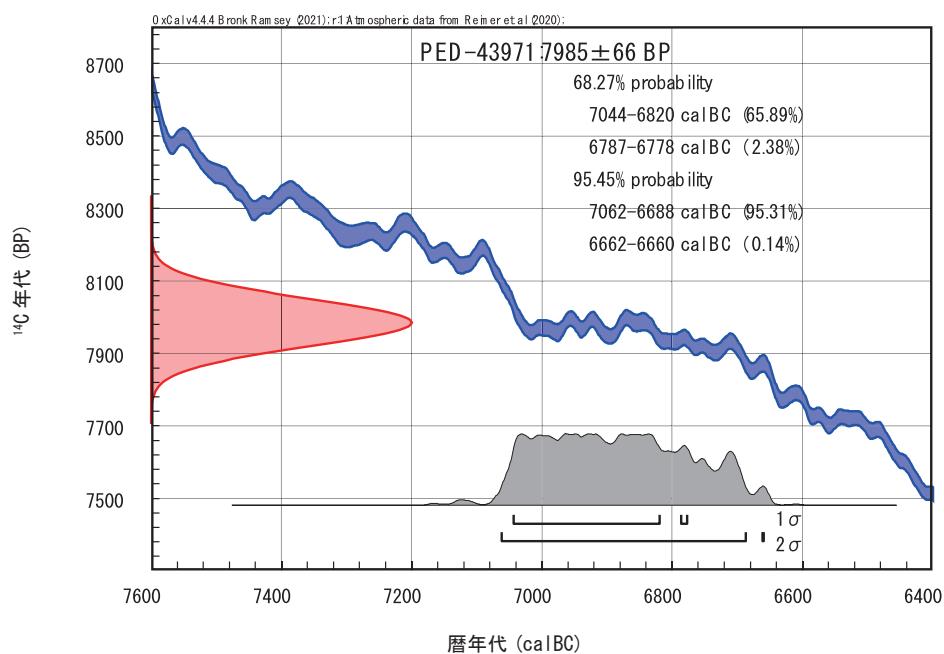
加速器質量分析法（AMS）による放射性炭素年代測定の結果、礫付着炭化物（No.1）では 7990 ± 70 年 BP（ 2σ の曆年代で BC 7062~6688, 6662~6660 年）の年代値が得られた。

文献

- 中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」. 日本第四紀学会, p.3~20.
- 中村俊夫（2003）放射性炭素年代測定法と曆年代較正. 環境考古学マニュアル. 同成社, p.301~322.
- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51 (1), p.337~360.
- Paula J Reimer et al., (2020) The IntCal 20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0~55 kcal BP). Radiocarbon, 62 (4), p.725~757.

第 12 表 出土試料の放射性炭素年代測定結果

試料 No.	測定 No. PED-	試料の詳細	種類	前処理	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	^{14}C 年代 (年 BP)	暦年較正用 年代(年 BP)	暦年代(較正年代)	
				測定法				1 σ (68.2%確率)	2 σ (95.4%確率)
1	43971	礫付着炭化物 E-8 区、X 層	炭化物	超音波洗浄 有機溶剤処理 AAA 処理 微量測定(セメンタイト化) AMS 法	-18.76 ± 0.45	7990 ± 70	7985 ± 66	cal BC 7044-6820 (65.89%) cal BC 6787-6778 (2.38%)	cal BC 7062-6688 (95.31%) cal BC 6662-6660 (0.14%)



第 51 図 暦年較正結果



第 52 図 試料写真

第6章 総括

第1節 旧石器時代の調査

下桃木渡瀬遺跡では、IX層・X層が旧石器時代該当層であり、礫群6基、角錐状石器2点、磨石1点、凹石5点、台石1点、石皿1点が出土した。

下桃木渡瀬遺跡では、薩摩火山灰とその直下の粘質土層（いわゆるチョコ層）は、安定したプライマリーな堆積は見られなかった。調査時の認識としては、礫群や角錐状石器が出土したX層は、縄文土器等の落ち込みはほとんど見られず、比較的安定した堆積状況を示すものと考えた。縄文時代早期該当層であるVII層・VIII層とは、IX層を挟んで分離できる状況であった。

礫群は6基検出され、周辺の礫の分布からみてもX層の中部から下部に主体がある。構成礫の多くは、被熱による赤化がみられ、周辺の包含層から出土する礫も共通する特徴をもつ。礫群間で接合を試みた結果、隣接する4号礫群と5号礫群間で接合できる礫が確認できた。そのため、4号礫群と5号礫群間の遺構は同時期に存在したと推測される。また、4号礫群は掘り込みの中に礫が密集しているが、5号礫群は集中部がなく散在している状況から、5号礫群は4号礫群の搔き出し部であった可能性も考えられる。さらに礫群と包含層出土礫との接合を行った結果、4号礫群の礫が南に約18m離れている包含層出土礫と接合し、台石となった。このことから、台石として使用された後、礫群に転用されたものと考えられる。

一方、調査区6号礫群から微量であったが炭化物付着礫が出土し、放射性炭素年代測定によりcalBC7062-6688という結果が得られている（第5章参照）。礫群を検出したX層からは、角錐状石器等が出土しており、薩摩火山灰の下位層にあたることから、分析結果と層位的な年代観には相違があり、今後検討が必要である。

遺物は、角錐状石器5（XI層）、6（X層）（第21図）が出土している。ともに貞岩を石材として使用している。

下桃木渡瀬遺跡周辺には、後期旧石器時代の遺跡として、ナイフ形石器や台形石器、剥片尖頭器等の出土報告がある津フジ遺跡、背野平遺跡、上桑持野遺跡、荻久保遺跡等がある。また鞍曲遺跡や宮ノ上遺跡、石材原産地の近傍に位置する枕崎市の奥木場遺跡などがあり、多くの旧石器時代の遺跡がある。周辺の遺跡の特徴から、この地域が玉髓やホルンフェルス、貞岩を石材として多用していることがわかるが、下桃木渡瀬遺跡においても貞岩製の角錐状石器や玉髓の剥片等が出土している点に共通点がある。

下桃木渡瀬遺跡では、ナイフ形石器文化期に該当する

角錐状石器が出土しているが、上層において細石刃文化期の遺物は出土していない。また、今回発掘調査を行った箇所は、遺跡の縁辺部にあたるため、全容は判然しないものの、明確な石器製作跡は検出されていない。

礫石器は、X層上部から中部にかけて出土している。そのうち台石は、前述のとおり、礫群内の礫と包含層礫が接合できたものであり、礫群と同時期のものと考えられる。後期旧石器時代の礫石器については、宮ノ上遺跡から台石の出土例が報告されており、立切遺跡（中種子町）や見帰遺跡（志布志市）等、県内における類例がある。磨石、石皿についても同様の状況である。

凹石については、向椿城跡（日置市東市来町）においてVII層から1点の出土例が報告されている。同層からは、ナイフ形石器・三稜尖頭器・細石刃・石鏃・隆帯文土器などが出土している。

下桃木渡瀬遺跡出土の凹石は、平均重量が586.4gで、5点中4点は形状が亜円礫、亜角礫を用いており、他遺跡の縄文時代層で出土している凹石とは形状が異なる。旧石器時代での出土例がほとんどないため、今後の検討課題と考える。

第2節 縄文時代早期の調査

下桃木渡瀬遺跡では、VII層・VIII層が縄文時代早期該当層と考えられる。遺構は、集石が2基検出され、土器小片が29点、楔形石器1点、磨石1点、有溝砥石1点が出土した。

集石の検出面はVII層であるが、時期判断の指標の一つである遺構内遺物の出土がなく、集石の詳細な時期決定は困難である。

下桃木渡瀬遺跡では、場所によっては部分的に搅乱等や落ち込みが見られ、土器の出土層が安定しないことから、土器は型式から時期を認定し、石器は遺構と同様、出土層位に基づいて時代認定を行っている。

土器は、型式から縄文時代早期と認定できた29点のうち、接合を行った土器を含め、5点を掲載した。

25は、貝殻条痕後、丁寧にナデ調整を行った後、縦位に3条、1条と貝殻刺突文を繰り返し施しており、早期前葉の加栗山式土器深鉢の胴部に比定される。26・27は、短沈線による羽状文が施されており、早期前葉の桑ノ丸式土器と比定され、28・29は外面に縦位や横位の沈線間に刺突を加え、縦位に紐状の低い突帯を貼り付け刺突を加えており、早期後葉の平柄式土器に比定される。

石器は、有溝砥石38が出土している。4面すべてが砥面であり、表裏・右側面に溝状の使用部分が2条ずつ、

左側面には深いU字形の溝が確認できる。縄文時代早期で、三角山II遺跡（中種子町）で4点、関山西遺跡（曾於市末吉町）で1点出土している。類例として挙げた5点の多くは砥面が1面であり、38に比べると確認できる溝の長さも非常に短い。時代は異なるが、縄文時代草創期として三角山I遺跡において2点、縄文時代晩期として関山西遺跡において1点、柏城跡（いちき串木野市）において1点出土例がある。縄文時代の有溝砥石として類例が数点確認できるが、いずれも形状が大きく異なるため、今後の調査における類例を待ちたい。

第3節 縄文時代後期・晩期の調査

縄文時代後期の遺構は、検出されていない。遺物は、土器1点のみである。39は、貝殻条痕に貝殻刺突文が施され二重沈線を作っている土器片で、指宿式土器に比定される。

縄文時代晩期の遺物は土器のみで、10点出土したが、すべて黒川式土器に比定される。40、42はナデ調整やケズリが施され、41、43~48は貝殻条痕を施す土器片である。49は、組織痕土器の底部の破片で外面に、編布の痕が鮮明に残っている。

第4節 弥生時代の調査

弥生時代の遺物は、土器のみで13点出土し、そのうち3点を掲載した。50~52は、すべて丁寧なミガキが施され、外面に煤が付着している。弥生時代前期後半から中期初頭にかけての土器と考えられ、入来式土器と比定される。

第5節 古墳時代の調査

古墳時代では、堅穴建物跡を1基検出した。方形をしており、1辺は約2.9mである。もう1辺は調査区西側に延びており、全容は判然としない。また一部に壁帶溝と思われる溝と硬化面を確認している。

遺構内遺物は、土器小片43点が出土し、包含層から土器小片90点が出土した。遺構内遺物では、接合した土器を含め3点を掲載した。

53は、口径28cmと下桃木渡瀬遺跡出土の土器の中で最も大きな土器となった。外面下部を丁寧に工具でケズリナデ調整を行い、頸部付近になると特に丁寧にナデ調整が行われる。頸部はハケ目の後、丁寧に指オサエを行っている土器である。また54・55は、類似する土器片で壺形土器の胴部から底部の部位と考えられる。この3点は、成川式土器に比定されるが、様式の細別は困難である。他の小片の中に東原式から辻堂原式にかけての土器と比定される成川式土器が出土していることから、堅穴建物跡もこの時期に該当する可能性がある。

下桃木渡瀬遺跡周辺で報告されている遺跡に、堅穴建

物跡7基やV字形の溝状遺構が報告されている答石遺跡がある。堅穴建物跡からは成川式土器の細別様式である東原式土器、辻堂原式土器、笹貫式土器が出土し、古墳時代前半から終末期まで、集落が長期間存続していたことが確認されている。その中で、下桃木渡瀬遺跡と同時期の堅穴建物跡は第1号住居と第5号住居である。第1号住居は1辺が約4mで焼土が確認されており、第5号住居は1辺が約3.4mで、2基の円形の地床炉が確認されている。下桃木渡瀬遺跡の堅穴建物跡に比べると一周り大きな造りになっており、整地のための深い貼り床や火が使用された痕跡もあり、住居として使用していたことが報告されている。

下桃木渡瀬遺跡の堅穴建物跡がどのように使用されていたか詳細は不明である。

第6節 おわりに

今回の調査は、下桃木渡瀬遺跡の縁辺部のみにとどまっており、調査範囲も狭く、得られた情報は限定的である。しかし、旧石器時代では、X層検出の4号礫群、古墳時代では堅穴建物跡が調査区西側に延びていることから、調査区周辺への遺跡の広がりや良好な残存状況が想定される。

【参考・引用文献】

鹿児島県立埋蔵文化財センター

2004「三角山遺跡群（2）（三角山II・III・IV遺跡）」埋蔵文化財発掘調査報告書（63）

2006「三角山遺跡群（3）（三角山I遺跡）」埋蔵文化財発掘調査報告書（96）

2008「関山西遺跡」埋蔵文化財発掘調査報告書（126）

2008「向柏城跡」埋蔵文化財発掘調査報告書（129）

2010「宮ノ上遺跡」埋蔵文化財発掘調査報告書（146）

2010「柏城跡」埋蔵文化財発掘調査報告書（155）

2018「鞍曲遺跡」埋蔵文化財発掘調査報告書（192）

公益財団鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター

2019「見帰遺跡」埋蔵文化財発掘調査報告書（23）

川辺町教育委員会

2007「背野平遺跡」埋蔵文化財発掘調査報告書（9）

2007「荒多遺跡・上桑持野遺跡」埋蔵文化財発掘調査報告書（10）

2007「津フジ遺跡」埋蔵文化財発掘調査報告書（11）

南九州市教育委員会

2008「答石遺跡」埋蔵文化財発掘調査報告書（1）

枕崎市教育委員会

1987「奥木場遺跡」埋蔵文化財発掘調査報告書（3）

中種子町教育委員会

2002「立切遺跡」埋蔵文化財発掘調査報告書（4）

南種子町教育委員会

2000「横峯C遺跡」埋蔵文化財発掘調査報告書（8）

写真図版

図版1 基本土層・旧石器時代1



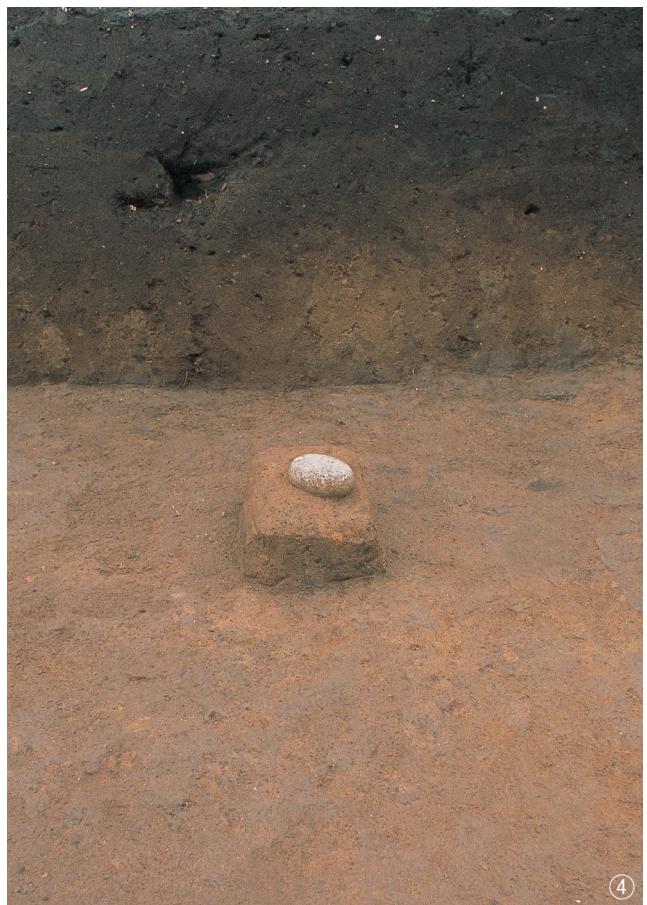
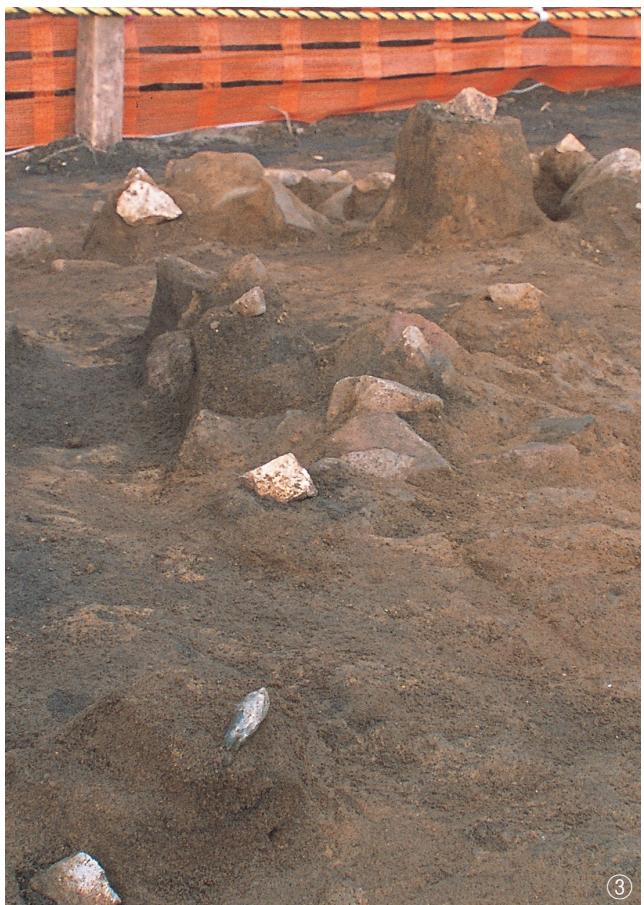
①基本土層
②旧石器時代遺物出土状況



① 1号礫群検出 ② 1号礫群完掘
③ 2号礫群検出 ④ 2号礫群完掘
⑤ 3号礫群検出 ⑥ 3号礫群完掘



①4・5号礫群検出
②4・5号礫群完掘



①6号礫群検出
②6号礫群完掘
③角錐状石器6出土状況
④磨石19出土状況

図版5 繩文時代早期



① 1号集石検出 ② 1号集石半裁
③ 2号集石検出 ④ 2号集石完掘
⑤ 繩文時代早期遺物出土状況



①



②



③



④

①堅穴建物跡検出
②遺構内出土遺物
③土層断面
④堅穴建物跡完掘

図版7 旧石器時代
遺物1





図版9 繩文時代早期 遺物1



25



27



28



29

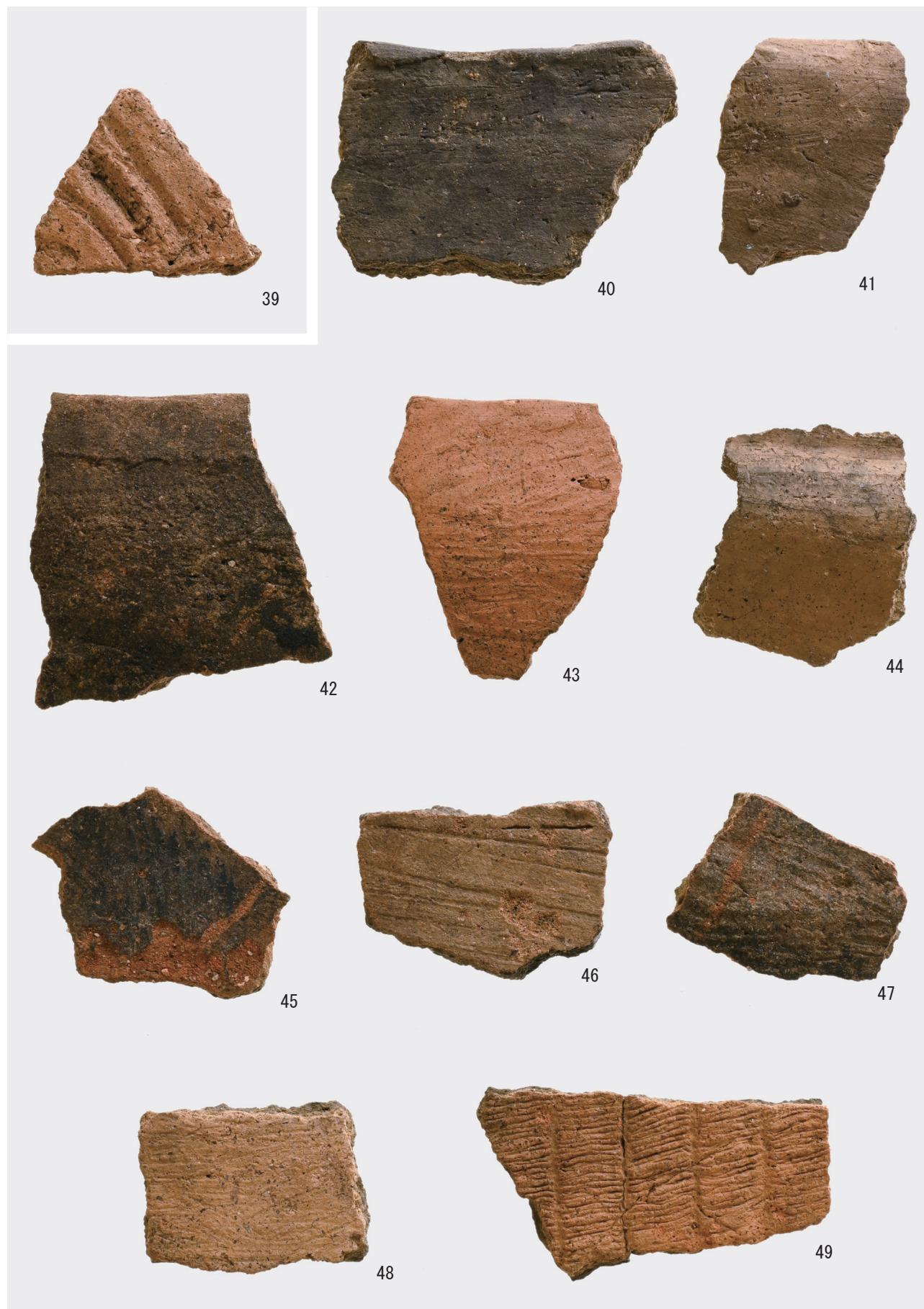


26

図版 10
縄文時代早期
遺物 2



図版 11 繩文時代後期・晚期 遺物







鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（212）
主要地方道石垣加世田線道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

下桃木渡瀬遺跡

発行年月 2022年3月

編集・発行 鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号
TEL 0995-48-5811 FAX 0995-48-5821

印 刷 所 協業組合 ユニカラー
〒899-2504 日置市伊集院町郡 2042-39
TEL (099)813-7213 FAX (099)813-7214